620-185
1200501537645
185

25 314

108

帝國圖書館藏

愛憎秘叉録

三上於菟吉著

620-185
620-185

愛憎祕及錄

三上於菟吉

裝幀……………山川秀峰

雪夜永代橋畔兩雄相鬪ふ

附り　美女受難の事

——年の瀬に迫つて、世の中の騒々しさはいよ〳〵甚だしいものとなつて來た。江戸八百八町は、外目にはまだ歴代の榮華を誇つてゐるやうに見えたが、行政も警察も亂れに亂れてあわたゞしい崩壞がつい目の前に迫つてゐることは爭はれなかつた。幕府は攘夷の王命に進退兩難に陷り、長州とは戰端が開かれ、しかも薩南の大藩が虎視眈々として、關ケ原以來三百年の宿怨を晴すはこの一期と隙を覗つてゐるのは何人にも瞭然としてゐた。それ故、市中の秩序維持、町人の幸福保護といふやうなことに、上司一同がかまけてばかりゐられないのに無理もないが、それにしてもこのごろの物騒さは、あまりにひどい。毎夜多少とも名だゝる大店の幾つかは夜盗に押込まれ、晝間でさへも浪人どもの押借强掠が行はれた。

押し詰つた二十一日に海運橋の江戸一屋が、一擧に七千兩といふ被害を受け、その翌晩には麴町飯田町の質屋丸木が、一萬兩近い奪掠を蒙つた上主人が殺されたといふ噂がパツと擴まると、忙がしい盛りの師走を、目立つた店では黄昏時からパタ〳〵と大戸をおろし、出入の鳶人足どもに非常をいましめさせて、ひたすら無事を祈るやうな始末だつた。

その暮の二十三日は、いかにもさうした淺間しい世の歳末にふさはしく、朝から鉛色の雲が低く垂れ

て肌を切るやうな凩が吹いてゐたが、日暮に迫ると、風だけはぴつたり止んで、そのかはりにジト〳〵と冷たい雨が降り出し、やがてその雨が氷雨に變つて、逸早く落ち暮れた夕闇に包まれた江戸の巷を言ひやうのない陰氣さで濕らしつゞけはじめた。

「どうでござんす、ひどいお天氣になつてしまひましたね？　世の中はこんな風だし、この霙は屹度雪に變りませうし、いやはや御同樣とんだ年の暮を見るものでございますね？」

「昨夜は伊勢源で在金を全部奪られたさうでござんすが、今夜も亦、どうせ碌なことを聽かずにはすみますまい。まあ、こんな晩にはお互に早仕舞にして、寢酒でも飮つて寢てしまふ外はございませんね。では、お寢み。」

「お寢み。」

通りすがりの商人で、知つた同志はいづれもこんな挨拶をかはして、あわたゞしげに濡れしよびれた夕闇の中に消えるのだつたが、その闇も深くなつて、いよ〳〵夜になつてしまふと、人足は、大通りさへもぴたりと止つた。

まして、こゝは只さへ淋しい大河沿だ。堀割と土藏と、それから一方には滿々たる隅田川の黑い流れとを控へた永代間近だ。泊り船のかすかな灯が、波にゆらいでゐるのが、光りのないより却つて淋しい河口近くだ。そして夜はもう大分更けて、常夜燈のあかりさへ眠むたげになつた頃だ。

こんな晩、こんな場所を往來するものがあつたとしたら、不用心の骨頂と言はれても仕方はない。

ところが、その冷たく氷雨する闇の底に、二ツ三ツ四ツ、ほの黄に浮いて近づいて來る灯がある。

沿を——永代の橋際にさしかゝつた駕籠が二挺、さすが夜あるきの用心で、駕籠屋も屈强つた三人の若者たちも見上げるやうな赤銅色の恰幅だ。その外に角力らしい六尺男、胴金の脇差込んでゐる。

「さあ、もう永代だ。もう一町場だ。急いでくれ。」と、若者の一人が聲をかける。

「この通り、この天氣に汗ぐつしよりでさあ——早くお店へ着いてお約束の熱燗が、あツし達だつて頂きてえから——」

ビシヤ〳〵、ビシヤ〳〵、雪まじりの泥を刎ねかして、永代袂を驅け拔けようとした時だつた。どこから現はれたのか眞黑な四ツの人影が、バラ〳〵と行手を遮つた。

「その方どもは油堀廻船問屋長門屋の者であらう？」と、一人が押し沈めた皺枯れ聲で訊ねた。

「は？」

「いや、その提灯のしるしを見ればよくわかる。駕籠の中には娘と乳母——外の者には用はない。娘だけを殘してとつとゝ消え失せろ！」

野太い聲が重ねて叫んだ。

「何だと！」と、きほひの若者が懷に右手を突込みながら、

「さては貴樣達は評判の惡浪人だな。見損なふナ。俺たちは板子一枚下が地獄の商賣、陸の奴等は貴樣等のだんびらが怖いか知れねえが、旦那に賴まれてお孃さまを守護してゐるんだ。三ぴん！　退け！」

すでに、右の手にはキラリと光る短かい刃！

「は、は、は、措け！　措け！　身ども達は人を斬るのが商賣、その方どもは船を漕いでゐれば大事ないが、そんなものをおもちやにするとあぶないことになるぞ。まづ、聽け！　長門屋と申せば名だゝる老舗、その方達のやうな荒くれものが長門屋に多いゆゑ、押し入つては事面倒と、わざと娘が今宵は密かにて加養中の病母見舞におもむくを探り出し、途中で奪はう手筈を定めたのぢや。もつとも娘とて、奪つたからどういたさうためではない。後で黄金と引き代へればよろしいのだ。安心して預けて行け！」

氣早な若者たちは、もう言葉爭ひは止めにしてゐた。

「面倒くせい！　やツつけろ！」

「合點！」

斬ツてかゝり、突いてかゝり、摑みかゝつたが、相手は自ら誇稱するだけの連中だつた。見る〳〵[illegible]刀は叩き落され、背打を喰ひ、六尺ゆたかの角力とりさへ當身に鳩尾を突かれてのけぞり、乳母はとうに背後の駕籠の中で氣絶させられた。

さすがに逃げもかねて、立ち竦んでゐる駕籠屋に、一人が命じた。

「乳母は面倒ぢや。娘の駕籠だけ舁ついで、身ども達の供をせい。」

一人が、先頭の駕籠に歩み寄つて、大店自用の乘物とて引戸になつてゐる、その戸を開けると、中からはほのめく美い匂ひ！

「娘、さう震へてゐずともよい。大事ないぞ！　それ駕籠屋！　舁かぬか！」

パチリと鍔鳴りをさせられて、駕籠屋が二人、怖る〳〵匍ひ出して、棒の下に肩を入れた時だつた。

「駕籠屋、その娘御はこの人々の言ふまゝに連れて行かずと、宅へと急ぎ送るがよい。」と、澄んだ、靜かな聲が——

一同は愕然として振り返へる。

そこには武士といふにはあんまりすんなりと、浪人髷に黑の着つけ、着流しにして細身の刀を、一本だけ落し差しにした白面の青年が、降り止みかけた氷雨を蛇の目にうけて佇んでゐた。

「何者だ！」と、黑裝の壯士の一人が叫んだ。

「貴公たちの惡あがきを制へに罷り出たものだ。」

と、氣輕な調子。

「やつてしまへ！」

ギラリ〳〵と四本の白刃が闇に煌めく。たツと、思ひ切つて踏み込む一人——いつかつぼめられた蛇の目の先端で、額口でも突かれたか、たゝらを踏んで背後へ蹌めく。

黑小袖着流しの青年武士は、やゝ右肩を聳やかして、手を劍把にかけた儘まだ拔かない。彼は別に後楯を取らうともせぬ。相手に背後へ廻らせる暇も隙も與へぬ自信があるやうに見える。

「やつ！」

「えゝつ！」

二の黑裝束は前後して氣合をかけて、隙間もあらせず打ち込んで來た。着流しの武士は左右の白刃をかいくゞつたが、立ち直つた時には、もはや今一人の後詰の奪掠者は刀背で打ち倒されて、傘で眉間を

突かれてぶつ倒れてゐる男の側につんのめつた。

　この後詰の武士が一同の中では一番の猛者であつたのであらう、それが敗れたと見ると、打ち込み試みた二人は、立ち直つた青年にもう刄を合せようとはせず、たゞ遠間をへだてゝ、僅かに切尖をひめかして虚勢を張るにすぎなかつた。

「おかゝりになるか？　お退きなさるか！」

　若者の聲は凛として冴えてゐる。

「いかゞなされる。」

　――駕籠が一挺、いつか永代橋を渡つて、橋詰に下され、垂れをかゝげて、こちらを見詰めてゐる武士がゐた。

　突然、立ち向つてゐた物取り浪人が、パッと刄を引くと、倒れてゐた二人も起き上つて一目散に逃げ出した。青年武士はニッと笑つて、乳母の駕籠に近づくと氣絶した彼女に活を入れた。

「あぶないことであつたのう。駕籠の衆、氣をつけてやるがよい。」

　そして、角力はじめ若者どもを一々呼び生かしてやる。

「いづれのお方さまか存じませぬが、このまゝお別れ申しては、宅へ戻つて主人に叱られまする。どうぞ、お所なりと仰せ聽けられまして――」

「いや、それには及ばぬよ。もはや心配もあるまいから、早う戻るがよいであらう。」と、青年は笠を拾ふと、そのまゝ歩み出さうとする。

「是非お供いたすなり、お住居を伺ふなりいづれかしませいでは、婆が付いてをりながらと、戻つてからが案じられます。私を可哀さうと思し召して――」と、乳母も供の者も、當の夜目にも白い面ばせの娘さへ、泥濘に手を突かんばかりだ。

「名乘るほどのことでもないが、そなた達當惑とあらば、行きがゝりのものは、日本橋白木屋店裏に住居いたす、露滴と申す奴ぢやと憶えて下され。」

　一行はそれと聽くと、もはや長居はまた何かの災を招くもとゝ、厚く禮をのべて立ち去るのだつた。

「いや、世も末法ぢや。」

　露滴と名乘つた若ものは、さう呟いて歩き出した。

　と、駕籠の垂れを上げて眺めてゐた武士は、駕籠舁きに足駄を出させてゆつたりと下り立つた。

「お待ち下さい。」

　露滴はふみとまつて振り返へる。

「拙者に御用？」

　騒がぬ語韻――下り立つた武士は蒼褪めて面長な、黒羽二重鷹の羽の五ッ紋、ゴワ〳〵の袴、三十左右、露滴に比べて六ッ七ッ年長に見受けられる。

「お手の内のあまり見事さに、一手お手合せ願ひ度うござる。」

　着流しの青年は、常夜燈の光りに相手をヂッと見て、ニッコリした。

「ほう、どなたかと思へば、佐々木先生でござりまするな。」

佐々木と呼びかけられた侍は、むしろ吃驚したやうに見えた。佐々木只三郎、浪人取締、小笠原閣老の懐刀、會津に生れて江戸一小太刀の名人と呼ばれ、最近勤王の義士清川八郎の暗殺を手もなく實行した精悍豹のやうな人物だ。

人も吾も、江戸無双の劍者とかぞへかぞへる、その佐々木を向うにまはして、莞爾として微笑む、この若冠の浪人は何者か？

「いかにも、拙者は佐々木、お見知りで恐縮いたすが、失禮ながらそこ許をばお見それいたした。一たい、どなたでござる。」

「當時、俳諧にかくれて露滴と名乘り、あはせていさゝか、詩と劍とに遊ぶものでござる。御高名の先生とお手合せは恐れ入りまするが、好む道、お言葉に甘えて御指南にあづかりませう。」

みぞれ、氷雨が、いつか雪に變つて、あかりが射し渡すあたりは、かぎりなく美しい氷の花片の跳躍だ。

佐々木只三郎はうなづくと右手を柄にかけて身がまへをした。足駄ばきのまゝだ。

手合せの指南のとは言つても、劍者と劍者との眞劍仕合、勿論いのち懸けで、一流の名人が、死すとも最後の悟入のための必死の術である。定めし若冠の露滴は身ごしらへでもするかと思ふと、先輩への禮を守つて足駄を脱ぎ捨てただけで襷もせず、これも右入身に身構へた。

佐々木が抜いたのは小刀――露滴は細身の刀――五尺ほど間を置いて、お互に中段に取る。小太刀の佐々木は眞劍にはいつも小刀を用ひた。刀身が短かいだけ、この人が位を取ると、その刀身がまるで

蛇のやうに物凄いものと變る。

「やーつ！」と、大劍の露滴から氣合がかゝる。鋭い、引き裂くやうなひゞきだ。

「よつ！」と、いつたやうな氣合で、佐々木は刺し貫ぬくやうに受ける。そして小太刀の先が、蛇の舌のやうに戰動する。

「やつ！」

「えゝつ！」と、今度は小太刀の方が、はじき返す。

と、間もあらせず、露滴の大劍が、眞槍のやうな直線をなして、髮を容れず。

――たつ！

と、佐々木の頸を突いて來る。引ッかはして、小太刀が相手の小手に飛ばうとする時、すうと輕く放れて、二人はふたゝび中段と中段――

長い〳〵睨み合ひであつた。

唐突けに、しかし靜かに、佐々木は聲をかけた。

「これは夜が明けようも知れぬ。拙者から申し入れて、申譯ないが、今宵はちといそがしいで、重ねてに願はれますかな？」

相手は構をそのまゝ、

「當方とても好んでのことではござりませぬ。いづれ折を見まして御教導を願ひませうか？」

「では――」

目と目が、ぴたりと合つて、サッと刀が引かれる。お互に拭ひをかけて、ピタリと鞘に――

露滴は濡れた足袋を脱ぎすてゝ、足駄を穿くと、佐々木を駕籠まで送つて行つた。

「久方ぶりで、測らずよい學問をいたしました。」

「御同樣――重ねて――御免。」

駕籠が上る。仲間が提灯を持つて引き添ふ。ピタ〳〵と、佐々木は兩國方面へ――

露滴は雪に傘を翳ざして、何事もなかつたかのやうに――

剽悍佐々木只三郎は、濱町河岸の寓へと歸る駕籠の中で、兩腕を思はず組んだ。

――露滴！　露滴！

現在は俳諧に隱れてゐると言つてはゐるが、あの若さで、あれだけの劍――その道で心血を注ぎつくしてゐる自分が、これまで目にも耳にも止めてゐぬはずはない。年は二十二三と見たが、劍氣は靜まつてしかも鋭く、あつぱれ成熟の劍豪ぶりだ。

――しかし、それにしても、あの劍法は不思議だ。本所の伊東甲子太郎そつくりの構も見えるが、突いて來るあの氣鋒は山岡はだしだ。あの突きの無想無念が、この俺でなくば、萬に一つも避しは出來ぬ。

佐々木は陰險な暗殺のもと締めとして、志士の間には惡罵され、佐幕の人々の間でさへ、あまりに凄慘な性質のために不評も蒙つてゐたが、かれも一流の達人で、この道のために常に歡びもし歎きもするのであつた。今夜の眞劍手合せとても、あの青年の劍氣のすばらしさに、思はず買つて出ただけで、恨みも怒りもない。そして、今は、寧ろ自分ほどの人も許し我れも傲る手だれ者に、身ごしらへもせず立ち向つた稀代の勇氣を讃歎する氣持になるのであつた。

――三崎町（講武所のこと）の道場でも見たこともなし、あれ程のものなら、武藝第一の現在、佐幕派なり勤王派なり、相當聞えてゐねばならぬ筈だが――

濱町河岸の屋敷に戻ると、愛妾のすゝめる盃にもあまり手を觸れず、ぢつと考へ込んでゐた佐々木は、やがて部下の石割三平といふのを呼んだ。佐々木は浪人取締りとして、言はゞ密偵部、諜報部を兼務してゐたので、探索方面でも相當な腕を持つた連中があまた彼の周圍をめぐつてゐた。

その中でも、石割三平は豹變自在、命令一下雲とも霞ともなる人物、昨日は浪人、今日は町人、髮の結方、着付をかへればすぐにその者になり切るといふ變裝の達者だつた。

その石割三平が、首領の召集で直ぐに前へ出た。

佐々木は盃を遣はして、愛妾に酌をさせる。

「恐れ入ります。」と、いたゞいて、一啜して、

「で、お呼び出しの御用は？」

「ほかでもないがの、今夜不思議な若者に逢うたで――」

「はあ？　また何か目星い猪が――」

――この仲間では、勤王家を嘲つて、猪と言つてゐた。志士は猪に通ずで、また山くぢらとも牡丹とも言つた。

「さて、その身性が一切わからぬのぢや。劍すぢも、わしにも讀めなんだ。」

「では、先生がお手合せをなさいましたので？」

「ウム、しかも眞劍でな――あまり見事な太刀すぢなので、合引きにして別れたが。」

「ほう！　先生が合引きになさるとは！」と、三平は目を見張つた。

「それがヲカしいのぢやよ、浪人風にしてゐるが、俳諧師露滴と名乘つて、刀は大だけ帶してゐた。役者のやうな美男で、年のころは二十歳を二ツ三ツも越してゐやうか――それでゐて太刀先きの靜かさといふものは――白木屋の近くにゐるとか言うてゐたやうぢや。」

「どちらでお逢ひになりました。」

「永代の袂――何でも油堀の長門屋とかいふのゝ娘が、流行の夜盗どもにつかまつてゐるところを救つたのがそやつぢや。その技が美しすぎるので、一手立合つて見たわけよ。」

「油堀の長門屋？」と、三平は好奇的に呟いた。

「長門屋は御存知ないか知れませぬが、長州と特別の關係がある廻船問屋でござりますが――」

「しかし、露滴といふ若者と、長門屋とは何のかゝはりも今のところではなささうだ。ほんの通りがゝりに、捨てゝ置けずといふ風であつたが――」

「で、夜盗といふのは、どんな輩でござりました。長州すぢの長門屋をねらふのでは、或ひは船材藏の――」

「そんなことであつたかも知れぬ。」

三平は浮かぬ顏をした。船材藏といふのは、あの河岸の御用倉を本據にして佐幕のあぶれ浪士の一團を差してゐるので、そこには三平が親しくしてゐる連中も少なからずゐた。

「しかし、わしが調べたいのは、あの若ものゝ身性だ。早速たのむ。」

「すぐに取りかゝります。何の、そのやうな人目に立つ人間なら、明日と經たず見出します。」

石割三平は立ち去つた。

佐々木はひとり言ちた。

「もう一度、どうしてもかやつと立ち合つて見たいものだ。あの年であそこまで無想になり切ることは難かしい。それに不思議なことには、あの劍は殺氣がないといふのがふさはしい位優美だ。まだ恐らく人は斬つてゐまいが、人を斬らずにあの度胸を、どこで仕入れて來たものであらう――どうぞしてもう一度あの若ものとだけは逢つて見たい。」

彼は愛妾が柔美な言葉ですゝめるまでは、冷えた盃を取り上げようともせぬのであつた。

美丈夫市に隱れて時世を冷眼す

附り　處女戀着の事

――日本橋の名代呉服店白木屋裏の拔新道に、その昔はどこぞの町家の隱居所であつたらしい、ちよいとした格子戸造りのひつそりとした一構がある。

茶庭がゝつた坪庭に、眞白に雪が積つて、それに射しかざす陽の色が限り知らず艶かしく美しい。

――雪降り明日は、はだか蟲の洗濯――

この妙な譬へを、誰が言ひ出したかわからぬが、全くはだか蟲も洗濯を始めさうな、溫かさ、のどやかさ、朗かさだ。そしてその眩ゆい大空を、高く鳶が舞うてゐるのか、ピーヒョロトロとなつかしい聲音が聞えてゐる。

坪庭に臨んだ、陽當りのいゝ緣側に、納戸いろの肩つきの衣類、茶博多の帶で、樂々と日なたぼつこをしてゐる若者、それが昨夜佐々木只三郎と劍を合せた露滴だつた。

俳諧を學ぶものと言つたが、なるほど床の間には蓼太の短冊、蕉風、談林あらゆる俳書が違棚に積み重ねられてゐる。

經机が一脚、硯箱――

しいんとしづもり返つた室内に、やゝ不調和なのは、蠟鞘細身の大刀が一振、床わきに立てかけられてゐることだ。

露滴は美しい目を上げて陽を仰いでゐる。さも孤獨を樂しんでゐるといふ風であるが、どこか眉間の頰のあたりに、微に憂鬱な影が射しても見えるのは、或ひはこの行ひ澄ましてゐるやうな若者の心にも人生の苦惱が燒きついてゐるのかも知れなかつた。

雪どけの軒滴がのんびりと落ちてゐる。もうおッつけ晝にも近いであらう。

と、格子戸の方で、

「頼まう!」と、一聲。

露滴は瞑想を破られて、ちよいと眉をひそめたが、

「[redacted]?」と、立ちもせず。

「岡倉ぢや、五兵衛ぢや。失禮いたすぞ。」

「おゝ、珍らしい。お通りなさい!」

岡倉と呼ぶ三十左右の武士が、面ずれのした雄々しい面をあらはした。鬢つき、髷、一目見て、水戸侍に相違ない。江戸にいくら長くゐても、爭はれず、語韻に訛がまじつてゐる。

「久しぶりだの、健勝で結構ぢや。」

「何しろ閑散な身の上、五體はいつものび〳〵としてゐますが、そこ許は忙がしいお身――御苦勞お察しいたします。」

と、露滴は慇懃だ。そして立ち上つて爐の釜の加減を見る。

「いやもう構はれな。」と、相手は抑へて、

「實は今日おたづねいたしたのは、折り入つてお頼みいたしたいことがあつてのこと、おもてなしは、また春長に――」

「この市井の閑人にお頼みとは?」と、露滴は女にも見まほしい白い手で、沸ぎつた湯を煎茶土瓶に汲みながら、

「さては何か運座のお催しでもござつてのことかな?」

キラリと岡倉の目が光つた。

「貴公にも似合はぬお言葉だ。この時世に兩刀をたばさむ身が、悠長らしい俳諧沙汰なぞいたすひまがあらうや。」

露滴は茶をすゝめて微笑んで、

「は、は、お氣に障つては相すまぬが、市に隱れる身に御用とのことゆゑ、さだめて風雅の上のことゝ存じましたまで――」

「早谷氏」と、岡倉はぢつと見詰めて、

「さては貴公、しんぞ武士を捨てたと言はれるのか！」

――早谷とは言ふまでもなく露滴の本姓だ。名を久米之助と呼んで八丁堀與力衆の家に生れた。皇學に凝つてゐた父久彌は當然皇國勤王の精神に燃えてゐながら、幕府の方針に從つて井伊大老の下知を受け、あまたの志士を牢獄に繫ぎ、さては無慘な刑死を遂げさせねばならぬ破目となつて、言はゞ思想と生活との矛盾に愛想をつかし、頭を丸めてしまつたのだつた。その頃の父親の苦悶を少年時代に眺めて成年に達しても家格の相續も願はず、父母が死んでしまつた今は、暢氣らしくかうした裏屋ずまひをして、俳諧いぢりをしてゐるわけであつた。

「武士を捨てるも捨てぬも――」と、露滴は相變らずのどかなものだ。

「現在かうした身すぎ世すぎをしてゐる拙者、お訊ねまでもござるまいがな。」

「もとよりわれ〳〵同志の者も、貴公の苦衷はよう知つてゐる。」

と、岡倉五兵衛は頷いて、

「しかし、何としても貴公は惜しい。貴公ほどの人物を、同志として數へることが出來ぬのは惜しい――三人寄れば必ずその噂が出るのぢや。ことさら今度さる大事を思ひ立ち、この場合是非ともお力添を得たいため、岡倉、同志にかはつて罷り出た次第ぢや、のう、早谷氏、もう一度昔にお歸りが願はれまいか？」

早谷久米之助も、父の學系と思想とを受けてゐるので、幕臣の家に生れながら勤王の義理は子供のころから辨へてゐた。そして少年時代、すでに水戸派の人々とも交りがあり、生れついた天才振りを志士の間に夙に認められてゐたのである。

「お言葉はいたみいるが、しかし、蛙の子はやはり蛙でござるでのう。」と、久米之助の露滴は微笑を口元に湛よはした。

「親が親なら、子も子でござるて――」

「貴公の父御は、大義に迫つて世を遯れられたほどの仁だ。」幕臣ながら最も尊敬さるべき義士ではござらぬか。」

露滴は答へなかつた。彼はふたゝび積雪が陽に輝いてまばゆい、狹い庭をながめるのである。

「貴公が父御の遯世を慕はれるも道理、しかしまた、貴公として父御が心に望みながら境涯上成就し得なかつた勤王の道に精進なさるが子としての務めでもあらうが――今や全國の志士はあまねく心を合せて進むべき時、この期をはづさば、或ひは折角の王政復古の大業も蹉跌せぬとも限らぬのぢや。萬卒+

得易し、一將は得難し——のう、小節を屈して大義に就かれるが足下の本分と思はれるが——」
岡倉が膝をすゝめて、熱心に説き立てるのだつた。
「岡倉氏。」と、露滴はしづかな聲で言つた。
「貴殿は水藩——そも／＼勤王大義のお家柄ぢや。貴殿方が王室に盡瘁なさるのは當然でもあり、われ／＼が羨ましく思ふところです。しかし、天下の大勢はもう定まつてゐる。間もなく三百年打ちつづいて武門の棟梁と榮えた大樹家の沒落は見えてゐます。その時、徳川の祿を喰んだわれ／＼までが、殺刄を取つて古い味方を打つには忍び難い。また、舊主に黨して朝敵となるのは拙者には不可能です。拙者はやはりぢつと動かずにゐさせて貰ひたい——諸氏にもよろしく申し上げ下さい。」
「だが、それは貴公が自分の感情におもねつて、大義を忘れたと評されることになりはすまいか？」
岡倉の語氣は鋭かつた。
「一天萬乘の天子をして、歷世式微のお歎きあらしめたのは何者だ？ 日本の武士は一旦こゝに心付いた以上、擧つて大樹を仆さねばならぬ。臣子の本分は恒にそこにある。」
理義一徹の岡倉の言葉を、露滴はうるさそうな顏もせず聽いてゐた。
「いかにも、義理はさうであらう——しかし——拙者のことはまづお忘れ置きが願ひたい。何分も
刀は腰に重く、その中に頭髪でも剃らうと思つてゐる始末——何分とも御推察が願はしい。」
岡倉が半ば憤慨したやうに何か言ひかけようとした時、再び格子戸に聲があつた。
「お願ひいたしますが、露滴宗匠のお宅はこちらでございませうか？」

「はい／＼、手前でございます。何ぞ御用か？」
「ちとお願ひがありまして先生に御面會が願ひたく參上いたしました。」
「只今雇婆も買物にまゐつて取りつぎもござらぬ。御用とあれば遠慮なくお上りなさい。」
露滴の面には、いつかまたのんびりした色が現はれた。
「では御免下さりませ。」
玄關を上つて、居間への襖の閾ぎはにつゝましく膝を突いた三十男、結城木綿の對に紺博多の帶、花いろ甲斐絹のぱつちに白足袋といふ、大家の番頭どころの身支度だ。
「先生でございますか？ 手前は油堀廻船問屋長門屋の手代頭、平七と申すものにござりまする。昨夜は主人娘儀、途中にて惡者に襲はれ難儀の折柄、御救ひ下さいました趣き、主人も一方ならず御恩に存じ上げ、今朝ほどよりお住居を尋ねまはり、やうやくお目にかゝれましてこんなうれしいことはござりませぬ。」
「ほう、では昨夜の娘子は、無事にお家へお戻りか？ それは頂上。まづこれへ通られて一服なさい。」
と、露滴は微笑んで言つた。
「それにつけましても、先生にはお身柄にも似合はぬお手の内のおもむき、若者ども一同驚き入つてをりました。」
「ナニ、では貴公久しぶりで腕立をいたしたわけかな？」
と、岡倉が興味を喚び起されたやうに訊ねた。

露滴は思ひ出したやうに笑つた。

「なんの、腕立といふ程でもござらぬよ。あぶれ者を投げてつかはしただけであつた。」

「いゝえ、左様ではござりませぬ。」

と、番頭平七は膝を乗り出して、

「供の者どもの話では、相手は黒裝束の浪人たちが四人、拔きつれてかゝつてまゐつて、用心につけて置きました五六人の若者がのこらず打ち仆されましたところへ、こなたがお立ち出でになり、白刃の中に飛び入つて追ひ散らして下されたとのこと——つけ置きました若者どもは、一人は十兩力士、名代の今川、あとは南海西海の荒波渡世、いづれも力も膽もひけは取らぬ輩——それを苦もなく打ち仆した浪人たちも、並大抵の夜盜ではござりませぬ。」

「そのやうに申されては閉口だ。何分相手は夜盜ばたらきでもするやうな手合、心が直ならぬゆゑ退け目がある。そこにつけ入つたまでのことです。」

露滴は心から何氣なく言ひ消さうとする。

「イヤ〳〵、貴公のことならさぞ勇ましい見ものであつたらう。夜盜と一概に申しても、このごろは天下の亂れに乘じ、相當な輩までが私慾にまよつて町人を脅かす由だ。」

と、岡倉は言つて、意味ありげに露滴をながめた。

「さすがに貴公ぢや。頭を丸めたいの、刀を捨てたのと申しても、義に迫ればやはり武士の魂を忘れられぬものと見えるのう。は、は、は。」

露滴は他をかへりみて微笑しただけであつた。

平七は大きな菓子折を取り出して、

「これは昨夜のお禮と申すではござりませぬ。お禮には早速主人長兵衛伺ひますでござりますが、まづはお茶の友までに——」

「ほう、かたじけない。越後屋だの。」と、露滴は磊落に進物を一瞥して、

「菓子は好物ゆゑ頂戴いたす。しかしわしはこの通り裏家にかくれて住む身、禮の何のと儀式ばつて、大家の主人なぞにたづねられては甚だ迷惑、その儀はかたく斷ります。」

「御尤もでござりますが、主人にして見ますれば、大事の娘の危難の救ひの神さま、このまゝ打すぎましては人でなしでござります。手前、早速これより立ち戻りまして、お住居をお見つけ申したことを知らせねばなりませぬ。それをお斷りなさいましては、中に立ちまして手前が一方ならぬ迷惑をいたします。私めに免じまして、後刻主人を召し連れました節は、なにとぞお逢ひなされて下さりませ。」

「いや、その儀はゆるして貰ひたい。」と、露滴は言ひ切つた。

「子供が井戸に落ちやうとするのを、帶際取つて引き止めるのは人間の道——昨夜のこともそれに變りませぬ。それを恩の禮のと言はれて、この狹い家へ押しかけられては、折角靜かな世界を好んで佗て住むわしにはいかい迷惑ぢや。かたく斷ります。」

「さう仰せられましては、平七當惑いたしまする。」

と、考へ込んだが、さすが大店の番頭役で、

「では、恐れ入りまするがまげてこれだけのお願ひを聽き屆けては頂けますまいか――實は手前主も俳諧を捻ないながら好みます身、今日にも明日にも、年忘れをかねて句會がいたしたいと申してをりました。これを御緣に先生にも主人寮までお氣向きお運びが願ひたいのでござりますが――」

「ほう、長門屋どのとやらも俳諧を好まれるか？　それはわしとて同好ゆゑ、當方の氣持次第で、お邪魔いたさぬわけもない。」

「それは有難い仕合せでございます。」

手代平七は、やつと役目が濟んだといふやうに、低く辭儀をして歸つて行く。

岡倉は一度は露滴のどこまでも隱者ぶりの言葉に憤つたやうであつたが、今の話を傍聽してからは、また晴れやかな顏になつた。

「早谷氏、そこ許がいかに捨てやうとしても、武士に生れついた身はどこ迄も武士ぢやよ。のう、そこ許は氣がつかぬであらうが、あの床にかけてある軸にしてからが、よくそれを語つてゐる。」

「ナニ、床の軸が何といたしたと申すのだ？」と、露滴は鶯茶風たいの軸を振りかへる。

岡倉は床なる蓼太の句を讀んだ。

「――碎けても三千丈や那智の瀧――碎けても三千丈や那智の瀧――」

そして頷きながら、

「句の好みにしてからが、やつぱし貴公は武士なのだ。腰の刀は大小そろはずとも、心はいつも武士なのだ。拙者はどこまでも貴公を武士と考へる。しかし、今日は拙者も他用のあることゆゑ、またそのうちに訪ねよう。では、これでお別れいたすぞ。」

「雇婆でも戻つたら、久々で一獻と存じたが――」

「いや、またそのうちに――」

――水藩の浪士岡倉五兵衞が、さう言葉をのこして露滴の住居を立ち出でゝ、大通りの方へ行く姿を、路地口に佇んでゐた一人の男が見送つてゐた。

唐棧柄の着つけに、壁茶の前掛、手には軸物らしいものを包んだ更紗の風呂敷をたづさへた、どこぞ書畫屋の手代風の人物――しかし、その男の口から、それにしては思ひがけない呟きが洩れたのだ。

「ふうん、あれはたしかに水戸の岡倉ぢや。曾ては木村繼次なぞと一緒に、天狗組にもゐた奴。木村が芹澤鴨と改名して、新選組に身を投じてからは、かれ等と別れて勤王一圖に生きる奴――そやつが出入するところを見ると、露滴も案にたがはぬ素性らしい。どれ、何にしても一目逢つて置かう。」

商人にしてはふさはしからぬ獨言を洩らしたも道理、それこそ昨夜佐々木只三郎から、特に露滴身の上詮議の役を命ぜられた、石割三平に外ならなかつた。

變裝自在の彼は、ちよいと髮のかたちを變へ、町人のなりをとゝのへて、そして相手が俳諧師と名乘つてゐるといふので、書畫屋の手代となり澄ましたわけであつた。

露滴はどこまでものんきな町家住居に親しまうとしてゐることとて、書畫屋益川の手代三平ととるものをすぐに居間に引いた。

石割三平は、今はすつかり町人であつた。辭儀の仕方から、言葉の抑揚、手に入つた

「それで私にどのやうな御用かの？」と。露滴は名札を眺めて訊ねた。

三平はかしこまつたまゝ、

「御存知の通りの御時世で、市中がしきりに騷々しく、今どき風流の書畫のと申すものも少[illegible]ますから、私ども渡世もまことに弱り切つてをりますので――何とか新春にもなりましたら、景氣[illegible]に人さまのお目を引く催しがいたし度く、名高い文人方のお力をおかり申して、盛大な會を催さうといふことになりました。それで、先生にも、是非御連名のお名をおかし下さるやうお願ひ申せと主人のおひつけゆゑ、まげてお許しをうけに上りました。」

「なるほど當今の形勢では、歌俳諧、書畫骨董が忘れられるは當然のこと、したがつて骨董屋の方々にも響きが強からう。いかにもその仰せは承知しました。しかし、この露滴なぞは、まだ生若くかけ出しの身、別に歌よみとも俳諧師とも天下にひろい目をしたわけでもない。それなのにわしなぞを、お宅の御主人が知つてゐて下さいましたか？ どこでかわしの短册でも御覽じてのことかな？」

露滴は別に鋭い視線を送るでもなく、極めてなだらかな調子で言つた。

しかし、相手にはこれが一寸、釘であつた。ヘマな返事をしては、つまらぬことになるかも知れぬ。相手は主人の佐々木さへ後れを取りも兼ねぬ腕前とのこと――

「はい、そのことは詳しくは承りませぬが、何しろ顏だけは相當廣い手前主人、どなた樣からか、先生のことをうかゞつて、御高風をお慕ひ申してのことでござりませう。」

露滴はニツコリと笑つた。

「實はの、益川のお手代、わしは何よりもいさゝか得意にした術があつての、その方ならいくらか人樣の前へも出せるかと思つてゐるのぢや。俳諧師としてのこの露滴が、御主人にまで知られてゐやうとは全く以つて思ひもかけなかつたよ。」

三平は乘りかゝつた船であつた――相手の言葉で、つい、あぶないとは知りながらも次のやうなことを訊ねずにはゐられなかつた。

「何よりもお得意のものとおつしやいますのは？」

「劍術さ。」

淡然として露滴は答へた。

三平はさすがにハツとしたやうな顏をして、それをかくさうとするやうに庭の方を見た。

露滴はさも面白げに、三平の横顏を瞶めて、

「劍術の方なら、まあ江戸並の劍術使なら向うへまはす勇氣もあるが、發句の方は何しろまだ〳〵水ばなれもしてゐない仕儀、どうぞ御主人へ、露滴が折角の仰せゆゑかしこまりはいたしましたが、少なからず照れてゐたと申して下さい。」

三平は庭へ目を反らしてゐるうちに、幾らか態度を持ち直すことが出來たやうに見えた。

「さて〳〵全く思ひもよらぬことを承はるものでございます。」と、さも驚いたやうに彼は言ふのであつた。

「俳諧の露滴宗匠が、劍術ならとの仰せ、これは吃驚いたしました。なるほどあなた樣のお頭と言ひ、

物ごしと言ひ、どこから拜見いたしましても御大身のお若隱居――定めし何かの御都合で世の中を風流にお見變へあそばしたのかと存じますが――」

「そなたの御主人が、わしに御用を言ひつけられるからには、多分いくらかこのわしに物奇な氣持を持つてゐられるかも知れぬから、ことのついでに申して置いてほしい――實はこのわしは、かう見えても直參、親どもは幾何幕府のお役にも立つたものだ。その子のわしは御覽の通り市井の發句よみとなり下つた不孝もの――なれど不孝ものとて、まだ昔學び覺えた劍だけは、發句よりもいくらかましかも知れぬ。となぁ」

――これは一通りならぬ奴だ！

と、三平は心の中に呟いた。

――こやつはわしが佐々木先生の言いつけで、身性を探索に來たと知つてゐるらしい。何分にも昨日の今日、どうせ今日あたりは、先生の仰せで何者かゞ遣つて來るだらうと待ち構へてゐたかも知れぬ。これはうまく取り入つて、味方につければ天晴れ功名だ。それに元々は直參と、自分でも名乘つてゐる。何か失策があつて世を隱れてゐる身で、先生に賴つて復活したいとでも考へてゐるなら、いつそ自分はかう〳〵言ふものだと名乘つてつかはさうかしら？　しかし、この面だましひは、なか〳〵一通りのものではない。ウカ〳〵心を開くことも出來ぬ。なにしろつい今ほども、水戸の岡倉が訪ねて來てゐるではないか！

三平ははやるところを押しとゞめた。そして何氣ない容子を作つて、

「さういふお身の上と承はりませば、主も會へ御贊成を得ましたことを、一層喜びますでございませう。では恐れ入りますが、この卷物へ御署名をお願ひいたしたいものでございます。」

三平はうや〳〵しく古渡更紗の風呂敷を解いて、中から一卷の軸物を取り出した。

露滴がうけ取つて一見すると、卷頭には、

――新春文雅集會御出席諸大家御連名。

と、さうしたゝめて、筆頭は龜田鵬齋、卷菱湖、それから歌人、狂歌師、俳諧師、さては文晁、抱一と言つたやうな名高い畫家の名もしるしてある。

――僞筆にかけては、古筆家から出た本田賢次郎が、佐々木の密偵部では隨一だつた。その賢次郎が素晴しい腕で苦心したものだ。一瞥しただけでは、當人にすらちよいと眞否が判るまいと思はれる。

露滴はその卷ものを、とつくりと見てさり氣ない調子で、

「なるほど、いづれも一代の名家、世に聞えた人達ばかり、この卷ものへ露滴の名をしるさせて貰へるのは、この上もない名譽です。」

と、さういふなり、經机の上の硯箱を開けると、筆を取つて、達筆にわが俳號をしたゝめて、その肩に小さく「迷人」とつけ加へた。

「さあ、これでよろしいかな。」

三平は押しいたゞいて署名を眺めた。西行をみつちり習つたと見える優雅な筆の香が、こゝろを魅するばかりである。

「──何といふ美しい手蹟だらう！

と、彼は心に驚きを二倍にしながら、

「はて、お見事なお水莖でございますが、お肩書きは何と讀みますのでございませう。」

「は、は、は。」と、さも無邪氣に露滴は笑つた。

「めいじんでござるよ。御連名はいづれも天下に鳴りひゞいた方々、ほん物の名人、それに肩を並べるからは、この露滴もあつぱれめいじん──めいじんとはいかゞであるな？」

──三平は、すつかりこの若ものに嘲弄された氣持で、一軸をかゝへたまゝ外へ出た。

──何といふ隙間もない奴だらう？　あやつは事によると連名帳が僞筆なのを、とうに見抜いてゐるかも知れぬ。迷人とは！　あきれ果てた曲者だ！

しかし、彼にすれば、佐々木への土産話は十分に出來たのである。いそ〳〵と歩みは早い。

──うら若い處女の祕密な感情ほど奇しいものはなかつた。

大河すぢ廻船問屋の中でも名だゝる老舗長門屋の娘お梅は、昨夜病母がしづかな寮で病を養つてゐるのを見舞つての歸へるさ、淋しい永代橋づめで、世にも怖ろしい無頼の浪人ものに襲はれて、あのやうな身も魂も添はぬやうな目に逢つたくせに、その變事を、今は神ほとけに感謝しないではゐられないのだつた。

彼女は殆ど氣を失ふばかりに恐怖に打たれたあとでも、なほ且つ自分を救つてくれた人の世にも美しい、世にも凜々しい立ち姿を忘れることが出來なかつた。

──ほんたうに、あの露滴とか申されたお方は、何といふ氣高さであつたらう。婆やは路考そつくりだと言つてゐるけれど、はまむら家（當時の名女形路考の家號）にはあんな品はありはしない。俳諧師とおつしやつたが、どうしてあの方がそんなお身の上であるはずはない。屹度々々立派なお武家だ。

さう考へると、あの時の名乘が出鱈目で、たとひ番頭をたづねにつかはしても、行方がわかるはずはないと、深い〳〵失望を感ぜざるを得なかつたのだつた。それが案外にも、いかにも白木屋裏に、さうした俳諧師がゐて、いつ何どきでも招けば參らうと答へたとのこと──それと聽いた時、彼女の胸は、まるで春の潮のやうに膨れ上がるのだつた。

──夜目の一目ではあつたが、たしかお年ごろは二十二三──もはや奥樣がおありだらうか知ら！

この疑問は、彼女自身の頰を染めさせるに十分だ。

──奥樣があるとしたら、あのお方の奥樣だもの、屹度々々玉のやうにお美しいに違ひない。

これは怖るべき想像だ。ほんのりとあでやかな處女の眉根が、あらうことか、不思議な暗鬱さにとざされるのである。

と、その時、雪後の午後の美しい陽が射した障子が開いて、あらはれたのは乳母だつた。

「お孃さま、お喜びあそばせよ。」

「何？　ばあや。」

お時は微笑した。

「あなた様にもわたくしにも、此の世で一番大切なお方を、明日の晩、およびすることにきまつたと、只今旦那さまの仰せでございました。」

——ハツと、お梅の胸は躍る。

しかし、その思ひを、親しいく、母が病身なので、その母よりも親しいものにすがつてゐる乳母にさへ、明しかねるものがあつたので、彼女はわざと氣づかぬさまをする。

「お前にも私にもこの世で一番大事な方とは、それはどなたのことなの？」

「まあ、お孃さまとしたことが、昨夜のお方でございますよ。あのお方を、一刻もお忘れあそばしてはすみますまい。」

「あゝ、あのお方——」

お梅はさう呟いて、大店の愛娘にふさはしい黄八丈の振の袖を口元へ持つて來た。

「あすの晩は、お孃さまも一生懸命お美しくあそばせよ。あのお方はほんたうに、はまむら家そつくり——お孃さまとお並べ申したら、それこそお雛さまより似つかはしうございませう。」

お梅は顔を反けたが、その頰には黒繻子と合せた緋鹿子よりも一層紅い血汐が透いて見えてゐた。

露滴佐々木家招宴の戻り道刺客に逢ふ事

浪人取締佐々木只三郎は、昨夜はからず剣を交へて勝負がつかず、合引きにして別れて來た白面の青

年の身の上が、翌日一日氣にかゝつて、柳營に行はれた秘密會議の席上でさへ、ともするとその方へばかり氣を取られてゐた始末だつた。

夕方歸宅すると、隱密の石割三平が、これはひどく生々とした顔で、待ち兼ねたかのやうに前へ出た。

「どうぢや、石割、何か獲ものがあつたか？」

と、佐々木は出仕姿のまゝ、白扇を袴の膝に突き立てるやうにして訊ねた。

「はい、仰せにまかせて露滴身柄取調べに一日を費やしましたが、まづ半は目鼻がつきました。いかにも日本橋白木屋裏に住居をいたして、雇婆アと唯二人行ひすましてをるかに見えました。」

「ほう？」

「しかし彼奴は拙者が掛けた鎌よりぐつと先き潛りをして、俳諧より劍が得意だなぞと並べ立て、すこしもそれを祕さうともいたしませぬ。後暗さは五分もないやうな暢氣な調子で、その上語句の裏には、拙者が御前の仰せの探索に出向いたものだと、もうすつかり讀んでゐるやうなところさへ仄見えました。いゝ加減に今日は退いて置きましたが、拙者にもあの若者だけは奥の見通しがつきかねます。」

「ふうむ。」

佐々木は頷いて、

「一方ならぬ奴とは見たが、名乘つた住居も僞りならず、市井に安居いたしをるところを見

幕府に害心をいだくものとも見えぬのぢやな？」

石割は頭を揮つて、

「ところが左樣とばかりも申されませぬで、水戸の[illegible]露滴宅から出[illegible]たしかに見屆けましてござりまする。」

「おゝ、岡倉が――あやつ、東湖ゆづりの骨硬で、厄介な人間ぢや。岡倉と交りを深くして[illegible]を見ると、これはまた油斷がならぬ。」

その時石割三平は懷中から、連名の一軸を取り出して佐々木に示した。

「これがかやつの手蹟でござります。名人の名がつらならつてをるゆゑ、拙者は『迷人』とでもして[illegible]かうなどと申して、いやはや、厄體もない惡戯者でござりまするぞ。」

佐々木はぢつと卷物を眺めた。賢三郞苦心の僞筆で一代の文人畫家どもの名を連ねた最後に、

――迷人露滴

と、書きつけた一行に、彼の瞳はいつまでも惹きつけられてゐずにはゐないのであつた。

――善い手蹟ぢや。巧みな筆致ぢや。西行流を出て、しかも一層の天眞。武にうとからぬもの文にも志ありと申すが、これはまたあの劍にもまけぬ筆だ。

佐々木はます〳〵露滴の人物に興味と執着とを感じずにはをれぬ。若し彼が眞實岡倉一味で、世を忍ぶために俳諧に身をやつしてゐるとすれば、そのまゝに捨てゝ置くわけにもならぬが、それならば石割の前で、得意氣に劍を語るも異なものだ。岡倉は單文武の友にすぎぬか？萬一、露滴なる青年が、勤王佐幕いづれにも屬さぬ、江湖不遇の人物であるならば、言葉を厚くして彼を味方に引き入れなば、後

後どのやうに力になるかわからぬであらう。

「石割、御足勞だが、今夜もう一度露滴を訪ねて貰ひたい。もう書畫屋の眞似などして行くには及ばぬ。佐々木の石割と申して參り、主人昨夜の始末をつけたくお待ち申し上げる由傳へるがよい。鄭重にいたして、駕籠を釣つて參れ。」

「は。」

――石割三平は持つて生れた密偵根性で、あの不思議な青年の身の上をすつかり洗ひ上げ、牢舍にはふり込むなり斬罪に處すなり始末をつけてしまひたくてならぬのだつた。それゆゑ當の目あての人物に手をつけることは大賛成だ。

「畏まりました。直ちに手配をいたすでござりませう。」

――石割三平、今夜は晝間に引きかへて、揚々と白木屋裏へ出かけて行つた。

塗輿を釣らせて、カツチリとした武家姿、仲間に佐々木家の提燈を持たせ、格子口に立つて、堂々と名乘ると、婆やが引ツ込むと玄關口に出迎へた露滴――

「おゝ、いかめしいお名乘でござるから、どなたかと思へば益川の三平どの、これはまた急にお取り立てになられたものと見える。お目出たいことでござりますな。まづお上り。」

「實は露滴先生。」と、三平も平氣なもので、あからめもせず言ふのであつた。

「先刻の拙者は主人から命ぜられ、そこ許さまお住居調べのため姿を變へて伺ひましたまで。今日の石割が本體でござる。さて、その失禮は主人よりお詫びいたすとして、只今乘物を釣らせわざ〳〵出向き

ましたは外でもござりませぬ。手前主人、先生の御高風を慕ひまして、是非とも今夜一餐をともにいたしたく、枉げて御來駕願はしき由、拙者お出迎ひのために參りましたでござる。」

「さては、佐々木先生が、甲斐なき拙者にお目とめられて、わざ〳〵の御招待でござるか？　大家先生の御馳走とござれば、定めし山海の珍味も澤とござらう。幸、拙者風呂より立ち戻りましたところ、これより晩酌と考へましたなれば、早速お供仕るでござらう。」

露滴は淡々と申し入れを受けて、別に衣類をあらためるでもなく、黒羽二重の着流し、茶博多の帯、例の大劍だけを落し差しにすると、

「いざ、お供仕りませう。」

――三平は、かくまで輕々に招待承諾はなるまいと考へてゐたので、却つて呆氣に取られつゝ、露滴に駕籠を勸める。

「折角のおもてなし、御免を蒙る。」

俳諧武士はしづかに乘る。

――濱町河岸、佐々木只三郎屋敷は、黒鉄門、なか〳〵廣々たる取りまはし、表玄關に駕籠が止ると、塗枠の障子が開いて、中から二人の侍が出迎へる。

「これは〳〵、お客仁には逸早く御到着、主人もさぞ喜びませう。いざこちらへ。」

二人の侍が、露滴を導いたところは、案に相違して客間ではなかつた。奥手庭先に作り出した内道場、六間四面、檜張り、そこには左右に、すでに二十人あまりの若侍が押し並んでゐる。いづれもこの佐

々木の庇護をうけてゐる浪人どもで、一命の下に、密偵にもなれば刺客にもならうといふ面だましひの連中だ。

露滴は師範席にだしぬけに導かれたが、それもすこしも意としないやうに、一同に輕く會釋して座をしめた。

彼が清潔で、木々の新しい道場がさも氣に入つたやうに眺め廻してゐるところへ、しづ〳〵と佐々木只三郎が現はれる。小刀を前半に、鷹の羽打違の五ツ紋、茶縞仙臺平の袴といふ隆としたみなり。只三郎は幕府に仕官する以前、生地會津でも家柄の人物、人品骨柄、立ちまさつた壯士だ。それが殺人に耽つてから顏色が蒼ざめて、眼光に不思議な凄味が添はり、美男なだけに一層恐怖すべき相好を呈してゐる。

それに對坐するのは、年少ながら飄乎たる露滴――取りつくろはぬ調子で――

「おゝ、佐々木先生、昨夜は御無禮仕りました。また今晩は折角のお招きで――」

「イヤ、露滴どの、早速の御來臨かたじけない。實は直ぐと宴席に御案内いたさうかと存じましたが、拙者は武門、まづかゝる殺風景な席にお連れ申した。お許し下さい。」

「イヤ〳〵、これも亦結構なおもてなし、拙者世にありましたころには、しば〳〵諸家の道場も拜見いたしました。道場の風情と申しまするものも、また格別です。清楚、森嚴、おのづから道場主人の風がしのばれます。」

佐々木は莞爾とした。道場の氣分を讃められて惡い氣持はしないのだ。

「それにしても、露滴どの、貴殿は俳諧師とお名乗りなるが、昨夜のお手の内、全く神妙不思
は拙者も劍を取つてはいさゝか自信もあるもの。今一度御手合せ仕りたく、わざ〳〵お呼立
第ぢや。」

「數ならぬ拙者、その仰せでは痛み入ります。實は拙者とても武家に生れました身、いさゝか劍をもいたしましたなれど、所存あつて兩刀を帶すまじと思ひきはめて以來、昨夜が初めての腕立、それ先生のお目にふれ、遂に思ひがけなき仕儀と相なり、今に及んで汗顔至極でござります。」

「昨夜はゆきがゝりのことゝて白刄をまじへ申したが、今宵は竹刀にてお願ひ致さう。幸、門下にも貴殿の神妙劍を拝見いたさせたく、御面倒ながら御道場へ。」

主人みづから、まづ羽織を脱ぎ捨てゝ板張へ下りる。

「では、一手御教示を得ませうか。」

露滴は着流しのまゝこれも道場へ出る。

百目蠟燭が、煌々と輝いた板張りの眞中に、二人は道具はつけず、各々好みの竹刀を選んで立つ。佐々木は言ふまでもなく、一尺三寸の短く細い竹刀、露滴は二尺八寸の長いやつ――

刀尖を合せて一禮して、飛びしさると、佐々木は昨夜のまゝの中段だが、露滴は、

「御兔。」と、會釋の言葉と同時に上段だ。

ピリリと、佐々木の眉が動く。小太刀を取つて江戸一と言はれるこの佐々木を相手に、生若い身で上段とは――と、勿論さうした激昂が、この時彼の胸を掠めたに相違ない。

しかし、この怒りは佐々木の劍氣を擾すに役に立つただけで、露滴の方はあべこべに餘裕を生じたやうだ。

「ええッ！」

上段から、差面を取らうと鐵棍が落下するやうに落して來るのを、佐々木は付け入つて胴を拂ふ。いつかふたゝび前と同じ構へになる。

た、た、たッ！

小刻みに、しかし燕のやうに佐々木が踏ん込んだ途端に、露滴の大劍が胴へ來る。翻して佐々木の體が崩れると見ると、

「えい！」

裂くやうな氣合で、露滴の双手突き――漸く佐々木がやりすぎて、相手の小手を打つたが、同時にピシーリといふ打擊を十分に左の橫面に感じた。

「參つた！」

「參りました！」

――黑羽二重着流しの青年と、茶袴の襠を淺く挾んだ五ツ紋の壯士とは一禮した。

凄壯酸鼻を極めた立ち合ひは、僅かの間に了つて、並ゐる部下たちはほうッと深い息をした。

兩士は師範席に上がる。

「いや、失禮いたした。では、心ばかりの酒宴の支度を致してござるから――」

「辱なうござる。」

佐々木と露滴とが奥に這入ると、その後姿が消えた時、道場片隅に控へて仕合を見てゐた石割三平が、その影にかくれるやうにしてゐた大髻の武士にたづねた。

「どうぢや？」

「たしかに彼奴だ。」

その武士は、始終三平の許に出入してゐる浪人の一人、下總天狗黨の餘類と號して、粗暴放埒な野塚繁三といふ一刀流の仕手だつた。

二人は肩を並べて囁き合ひながら、佐々木家裏門の方へ出る。

「たしかに彼奴ぢやよ。折角うまく〳〵と攫つてのけようとしたところに邪魔を入れをツたのは——」

「しかし素晴らしい腕ぢや。」と、三平。

「うちの先生は大分惚れ込まれてゐるやうだ。」

「佐々木さんが惚れ込まうと込むまいと、身許がわかればこのまゝには出來ない。」

と、繁三が肩をそびやかす。

「だが、あの腕だが——」

「どんな達人にしたところが、暗夜のつぶてと言ふことがある。」

「成程な。」

「いや、御面倒をかけた。」

——野塚繁三は裏門を出て行く。さして行く手は、河向う船材藏だ。藏番添役井上吉兵衛は、賭博に身を持ち崩してゐる男なので、いつか一味二十餘名が徒黨して、こゝを本據に不埒なことの限りをつくしてゐるのだつた。

末世であつた。壞滅期であつた。最も尊敬せらるべき階級にある武士たちが、幕府直屬の倉庫を根城にして、盜賊、かどはかし、押借——あらゆる惡事を働いてゐるのに、それに注意するものとてもなかつたのである。

——此方は露滴、佐々木と水入らずの酒宴で、侍坐するものは、愛妾のお秀、侍女が二人——

露滴は酒は大量には嗜まなかつたが、すゝめられる盃を辭しはしなかつた。佐々木は露滴の人品に接すれば接するほど、どうしてもこの若者を同志に引き入れたい容子で、彼にしては絕えてない愛想よさで歡待してゐる。

「お差支なくば、お身の上を詳しくうけたまはりたいものでござるが——」

「イヤ、格別に取り立てゝ云ふべき身分でもありませぬ。父親は幕臣でありましたが、死後相續上の面倒もあり、拙者も窮屈な二本差が厭な氣性でござるで、町住居をいたしをりますが——」

「劍はいづれでお學びで？」

「それが、お恥かしながら、幼少のころ師匠の面倒を願ひましただけで、その後は諸方の道場でたゞ見樣見眞似をいたしましたに過ぎませぬ。それゆゑ、心の中では江戸中の大家を、こと〴〵く師として崇めてゐる次第でござります。」

「ほう、驚き入つたことだ。」

と、佐々木は盃を措いた。

「師に就くことなしにこれまでの御練達とは！　桃井、千葉、山岡、いづれの門にもまづ貴殿ほどの俊秀はござるまいて――」

「イヤ〳〵、そのやうなことがある筈がござりませぬ。先生とお手合は、兩度とも閑倖と申すだけで、自分にもわけがわからずをりまする始末――」

「御謙遜だ。」と、佐々木は盃をさして、

「ついては露滴どの――そこ許お身柄をお隱しなさる上に、强ひておたづねもいたすまい。たゞ、佐々木より折り入つてお願ひがござるが、お聽き入れ願はれませぬか？」

「と、仰せられると――」

「申すまでもなく、世上騷然たる現在、不肖ながらこの佐々木なぞも、歷世幕府の厚恩を思ふにつけ默視しがたく、蔭ながら時世匡正に力をつくしてゐますが、何分にも同志に人がましきもの少なく、面に勤王を唱へ、裏に我意を働くかの輩の跳梁を、恒に坐視せねばならぬ始末――若しそこ許ほどの仁が御加擔下さらば、大樹家のおためこよないよろこびと存じまするが――」

「世の中では先生を刺客の元じめのやうに申してをりますが、では拙者に暗殺の手傳をいたせと仰せられますので？」

ズバリとしたことを、しかし、悠乎として露滴は言つて退けた。

佐々木は鋭い目で、ジロリと青年を瞶めたが、次の瞬間には冷たく微笑した。

「ハ、ハ、ハ、恐れ入つた言葉だ。それは勿論現在の世態でござる。時に依れば暗殺もお手傳願ふかも知れませぬ。」

「まづ、御厚志だけはかたじけなくお禮申しますが――」と、露滴はしづかに言つた。

「しかし、暗殺のお手傳は御免蒙りたうござる。伺ふまでもなく、幕府へ忠誠の先生が、幕府の敵と見るものを、いかやうに所理あそばさうと、それは御自由――しかるに拙者は政局時世からは遠ざかつて隱れる身、恨みも恩もないものを殺戮いたすは好ましからず、その點お斷り申し上げます。」

佐々木只三郎ほどのものを前に置いて、しかもその怖るべき人物の邸內で、かくもきつぱりと言ひ切つて謝絕することは、白刄相打つよりも危險は一層であつた。しかし、知つてか知らずか、露滴は悠々と答へて、盃を膳に伏せると、

「これは意外の御造作に相成りました。また重ねて御意を得ることにいたしまして、今晩は失禮を――」

「いや、硬くるしい話で座興を殺ぎましたの。」

と、佐々木は別に憤るでもなく言つた。

「では、酒後の茶飯なり召してお戻りあれ。」

――間もなく、露滴は佐々木に玄關まで見送られて、乘物のすゝめを辭して出た。

冬には珍らしい靜かな夜で、凩もないが、雪後の大川を流れて來る夜氣は、微醉の頰を冷たく打つた。

——世の中は妙なものだなう！

と、露滴は白い息を吐きながら、大川端を松平屋敷に添うて歩いてゐる。

——あの裏家に隠れてから幾月か、浮世をよそに俳書三昧で日を消してゐた。それが昨夜のはからざる出來ごと以來、妙なことばかりつゞいて來る。岡倉の訪問、長門屋の招き、佐々木の招宴——岡倉も、佐々木も、めい〳〵の立ち場から、わしのやうなものをまた世の中に引き出さうとする。しかも右と左とへ、引ッ張らうとする。しかし、その双方とも、わしには行けぬ世界なのだ。わしはたゞ一個の民ぐさにすぎぬ。勤王を言はず佐幕を唱へずとも、民ぐさとして存へるだけの資格は持つてゐるはずなのだ

——

さう呟きながら、今しも川岸から右へ切れようとする時だつた。露滴はある氣配を背後に感じた。それはスーツと背肩を掠めた殺氣のやうなものであつた。

——ほう！　何か來るな！

咄嗟に、露滴の目が、前を瞶めたまゝ、しかも前後左右を測るやうに働く。

——何か來る。何ものだらう？　まさか佐々木が！

露滴に心の用心が出來てゐると知ると知らずや、

——ビュウ！

と、夜氣を切つて背後から斬りかゝつた白刄——肩を沈めてのめつて來る奴を叩きつける。

「何奴だ！」

聲も荒らげず言つた露滴の前後に四本の白刄が絡ひつくやうに迫つて來る。

露滴は相手の黒裝束を闇に透した。

「は、は、昨夜の先生達だな！　懲りずまた！　あまり執拗くいたすといのちが危いぞ！」

パッ、パッと、左右から閃めいて來た劍の間をどう潜つたか、いつか露滴の身は、河岸の縁へ、滿々として黒く流れる川面を背後にして突立つた。

「來い！」

露滴は拔かずに誘ひをかける。その誘ひに惹きつけられるやうに振り込んで來た刄の主じがまづ一番にドーンと大川へ投げ込まれる。次のも同じ運命——今一人はかなはじと劍を引いて逃げ去つた。

「この寒夜、泳ぎは冷たからなう——」と、露滴は水面を眺めて、それからたつた一人投げ倒されて絕氣してゐる黒裝束に近づいた。

「友達甲斐のない連中は、貴公を置いて逃げてしまつたぞ。それにしてもこやつ等は何者だ。」

正體もなく仆れてゐる黒裝束の襟元をくつろげたが、手がゝりになるやうなものも無ささうだ。ふと手先に當つた封じ文——封が裂れてゐるのが遂に出て來た。

遠い灯では文面は讀めない——それを袂に入れて、

「貴公、その中に通行人もあらうから呼び生けて貰へ！　わしは行くぞ。」

——露滴はそのまゝ立ち去つた。

すると、いづくともなく現はれて來たのは石割三平だつた。

「別所氏、しつかりせい。」

と、グイと活を入れて、

「野塚に相手は手硬いぞと忠告したに、輕擧するからこの始末だ――急ぐと事を仕損じる――どうぢや別所、正氣づいたか！」

――露滴は隱栖に戻つて來た。婆やが出迎へて、

「さき程、油堀の長門屋から手代がお使ひで明晩は是非お招きがいたしたいから、あらかじめお願ひいたします。いづれお迎ひに出ますがといふことでござりました。」

「ほう、これで露滴もなか〳〵賣れツ子になつたなう、この師走ぢやと云ふに、毎夜大家大身からの馳走の招きぢや。婆さん明年はさぞ福運がめぐむことであらうよ。ハ、ハ、ハ。」

彼はさう云ひながら居間に通ると、灯を搔き立てゝ、黑裝束のふところから拔いて來た文殼を讀まうとした。文殼は半ば裂けてゐて、何が何やらわからない。たつた一句――

――例の船材藏――

と、いふ文句がわかるだけだ。

――船材藏！　船材藏がどうしたといふのか？

露滴はそのまゝ手紙の切れツぱしを紙屑籠に投げ入れてしまつた。黑裝束のことなぞは相手の手の內もわかつてゐるので深く考へる必要もなかつたのである。

長門屋愛娘遂に黑裝束一味に奪はる

附り　露滴乘込みの事

露滴は長門屋からの迎へを心待ちにしてゐると、さもその翌日の夕暮、約束をしてゐたことなので、濟まなさうな顏付で遣つて來たのが手代の平七だつた。

「宗匠、まことに申譯のない使ひによこされまして――實は主人の家內が長らく患つてをりますのでお玉ケ池の方の寮へ保養にやつてあつたのでございますが、この寒さにすつかりやられたと見えまして、今朝ほどからひどく惡くなつたさうで、何でも今にも息を引き取りさうだと申して、今日は家內中ごつた返してをります。それで、折角お約束を願つた句會も、來春までおのべを願ひたいゆゑ、まゐつてよく申譯をいたせとの言ひつけをうけまして參上いたしましたが、何分、ほかならぬ病人のこと、お察しの上失禮御用捨願はしいのでございますが――」

露滴は頷いて、

「それは御心配なことだ。御內儀御大病とは一家の大事、もとより句の詩のと暢氣なことが言つてゐられる筈がない。早く御全快になつてから、ゆる〳〵お催しが願ひたいと、さう申し上げてくれるがよい。」

「まことに何とも相濟みませぬ。よろしくお怒りなく願ひ上げます。私はこれから主人娘を送つ[illegible]で參る大役をうけてをりますので、先達のやうなことがあつたあとゆゑ、日が暮れ切らぬうち送[illegible]

と存じてをりますから、失禮ではございますが、これでお暇をいたします。」

「おゝ、さうか、ではゆかつしやい。何分この頃の時世ぢや――日がある中はまさかあぶまいゆゑ、急いでゆかれるがよい。」

「ありがたう存じます。では、またいづれ。」

平七が歸つたあと、露滴は夕日かげが斜めに射しかける障子の中で、經机に凭れながら、蕉風の句集に讀みふけるのだつた。長門屋の招宴が延びたことは勿論心に止まる問題ではない。彼とすれば行くも行かずもどうでもよいのだ――それよりも寓でゆつくり『猿蓑』にでも心をひたしてゐた方がいくら樂しいかわからない。

露滴に取つては、今は俳諧も劍も心の中で一致してゐるやうな氣がした。蕉翁以下名だゝる俳人のよみ殘した句のところには、劍氣がいづれにも溢れてゐた。あるものは豪宕鐵石を割る底のものがあつた。またあるものは優婉小太刀の閃めきのやうなものがあつた。そして剛いにせよ和しいにせよ、すべてそこに不可思議な美と力とを含まぬものはなかつた。

露滴は『猿蓑』載するところの句を、一句々々ゆつくり味つて時の移るのも知らぬがほであつた――かういふ時の露滴にどうして劍を取つた彼が偲ばれよう。姿も心も、驚くばかりの和平に充ちてゐるのであつた。

――もう灯ともしごろ――いつか障子の日かげがすつかり亡びてしまつた。婆やが行燈を置いて行つた。町家ずまひも裏のこと、あたりはひつそりとしづまり返つて、何となく冬の夕べの物淋しさが身に

迫つて來る。

と、そのしづかさを破つて、櫺子窓の下にあわたゞしい足音、やがて格子戸が荒々しく引き開けられた。

「先生！　先生はゐらつしやいますか？」と、息せきあへぬ聲だ。

「どなたぢや？」

聽き憶えのある聲音を、聽き分けようとしながら露滴はたづねた。

「わたくしでござります。長門屋の平七でござりまする。」

「おゝ、平七さん。」

露滴は自身出て行つた。

平七は、髮もみだれ、裾も崩れ、淺間しく目を釣り上げてゐる。

「あゝ、ゐて下すつて嬉しうござります。お留守ではないかと、心配してをりました。」と、云つただけで、咽喉は干からびてしまつたやうに絕句した。

露滴は重大事が突發したことを直覺した。

「婆や、水を汲んで上げろ。」

平七はベタリと入口に腰を落したまゝ、婆やがあたへた水呑のぬるま湯をゴクリ〳〵と呑むと、一生懸命の眼付で露滴を見上げた。

「先生、是が非でもお力を仰がねばなりませぬ。先生のお力で、どうぞお取り戻しを願ひます。」

「何を取り戻すのか？　何か起つたのか？」

露滴は話が前後するのをもどかしさうに、

「落着いてお話しなさい。」

「先程も申し上げました通り、あれからうちのお嬢さまを、芝浦の寮まで送つて參ります途中、まだ日も暮れ切りませぬのに、ところもいつぞやお救ひをうけた永代詰で、惡浪人どもにたうとう奪ひ取られ、用心の若者は大てい斬られてしまひました。私はやつとのことで生命を遁れ、お上へ訴へればお嬢さまを殺すといふきびしい言葉ゆゑ、たゞおたのみいたすは先生のお力ばかりと、こゝまで夢中で駈けてまゐつたのでございます。」

「して、浪人どもはいづれの方角へ逃れたか？」

「お嬢さまを駕籠から引き出すなり、橋ぎはにもやつてあつた小舟にのせ川上の方へ漕ぎ出してしまひました。そしてその船が見えなくなるまで、殘つた浪人どもは私たちの襟がみをつかんで放しませんうち、小舟は夕闇にかくれてしまつたのでございます。浪人どもはお嬢さまを殺しも汚しもせぬ、後日當方から命じる場所へ、黄金を持參いたせば放してやると申してをりました。」

露滴は頷いて、

「しかし、それは不幸中の幸ぢや。長門屋どのはいかなる黄金にも事は缺かぬ富豪、娘子のためなら相手が望むだけのものを積めばよからう。狼どもを相手にじたばたするうち、大事な娘子に傷でもついては大變ぢや。」

「したが、お嬢さまを主人からあづけられた私には、このまゝのめ〱と、奪はれましたと云つて戻るわけにはまゐりませぬ。それに相手の浪人どもが、今度こそは露滴とやらも手出しが出來まい。は、は、は――と笑つてをりましたのが、憎らしく耳にのこつてをりますので――」

「ナニ、かやつ等が拙者の名を口にしたとな！」

露滴の眉根がピリ〱と引き釣つた。

「かやつ等が、拙者の名を！」

淺間しい泥水を面に注がれたやうないまはしい氣持が、彼の全身を走り流れたやうに見えた。

「えゝ、先生のお名を云つて、露滴にも今度は手も足も出まい――と、さう申してをりました。」

平七は、あながち露滴をいら立たせるために云つたわけでもあるまいが、この一言は十分に效果を奏した。彼はそれを聽くと目を閉ぢた。

「ねえ、先生、先生のお力なら屹度どうともなりますゆゑ、私どもを助けると思召して――」

「さうか、では、ちよいと行つて見ることにいたさうか？」

露滴はさう呟くやうに言つて、床の間から例の大刀を取ると落し差しにした。

「いざ、お供いたさう。」

現場へ行つて見ると、成程用心のためにつけられてゐた長門屋の若い衆たちが二人、むごたらしく斬り仆されて、町方役人手下どもが檢視を待つて張り番をしてゐた。露滴はその場を一瞥したのみで、もう此處には用がないといふ風で、

「では、長門屋へまゐつてゐよう。おツつけかやつ等から何かたよりがあるに相違ない。」

油堀長門屋の本家は、休業の札を出して混雜も一通りではなかつた。一方では寮の病人が死にかけてゐる。そこへ愛孃が浚はれた――この一家としては、未聞の大事件である。

露滴の到着が知らされると、勿論家人は神佛の來迎のやうに元氣づいた。寮の方から變事を聽いて驅けつけた主人長兵衞は、露滴の手を取らんばかりにして奥の一室に導いた。

「折角先生にお救ひを願つて、まあよかつた、有難かつたと喜んだも束の間、たうとう狼藉者に奪はれてしまひまして、何分このおやぢの氣持をお察し下さいませ。」

露滴は富豪の商人が、げつそりと頰を削かして、兩手を疊に項垂れたのをあはれと眺めた。

「御内儀の御病氣と言ひ、實以て御同情に堪へませぬ。出來る限り力添へもいたして進ぜたいと思つて、お見舞がてら出向きました。」

「有難うござります。何せこの亂れに亂れた御時世、お上お役向に訴へ出ましたところでどうせ結着を早々つけて下さるわけもなし、あなたお一方がおそれ乍らお手賴で――どうぞこのおやぢ奴をあはれと思召し下されませ。」

「拙者の考へでは、盜賊どもが申したといふ言葉に、うそいつはりはあるまいと思ふ――娘御は傷つけも汚しもせぬ。黄金を得るまでの人質ぢや――と、いふに間違ひはござるまい。今夜中には、何とかかやつ等からたよりがござらう。それを待つて拙者にも考へがある。」

主人は氣もそゞろな風であつたが、それでもさすがに大家の主人で、珍客でもあり救ひ主でもある露滴をもてなすべく、早速酒肴がはこばれた。

「いろ〱とおいそがしいところだ。拙者獨酌で時をすごさう程に、お構ひなく。」

露滴は氣を利かしてさう云つて、ちびり〱と盃をかたむけ始めた。

すると、案にたがはなかつた。二時もたつたかたゝぬか、主人と手代平七とが、手に一通の手紙をつかんで駈け込んで來た。

「只今こんなものが參りました。」

と、主人は露滴に美濃判一枚に荒々しい手蹟でしたゝめたのを示した。

露滴が一讀すると――

拙者等時局匡正の義軍を催し度く軍費調達のため貴殿娘梅預り候、金一萬兩、今曉丑三時までに永代橋際荷揚場に荒菰包として運搬いたし置くべく、見張人配置、または役向へ訴へ出でなぞいたし候節は、娘梅は勿論、店中一同鏖殺いたすべく、しかと申し達し候。

師走廿五日夜　　神變組印

「何ものがこれを持つて來たのぢや？」

「そこで人に賴まれたと申して、近所の子守娘が、手代の平七に渡してゆきましたので――」

――お梅を奪つて小舟に乘せ去つたと言ふ――この一萬兩の置場も川沿荷揚場を指示してゐる。して

見ると、賊どもは大川すぢに屯を持つてゐるに違ひない。

その時、サツと露滴の胸にひらめき過ぎたのは、例の黑裝束のふところから昨夜手に入れた文殼の切ツぱしだつた。

その文殼にたつた一句完全に殘つてゐた――あの、

――船材藏――

と、いふ文句――

露滴は初めて思ひ當つた。

――ぢやあ、やつぱしあの邊に、かやつ等の本據があるのだな。

彼の目には、幕府の木竹の倉庫が並んでゐる、水ツぽい、淋しい川沿一帶の景色が浮んで來た。そこら一面は人氣に疎く何となく魔の棲家にも變りさうに思はれる。

ふと、彼は刀を引き寄せて立ち上つた。

「ちと心當りがある。拙者出向いて見屆けてまゐる程に、それまでは黄金を運ぶことは無用です。」

「えツ！　では先生がこれから泥棒の巢へ？」

と、主人はあやぶんだやうに云つた。

「何事も出向いて見た上のことぢや。吉左右は追ッ付けお知らせいたさう。」

「では、力の强い若者を何人でもお召しつれなすつて――」

「は、は、は、氣の毒だが、捕物には身ひとつの方が――」

「なるほど、どうせ足手まとひでございませうな。」

と、平七は呟いた。

さう云ふうちに露滴の姿は、もう店へ出た。そして見送つて出た一同へ氣輕に頷いて見せると闇の中へ――

向う河岸の、濕氣をふくんだ闇の中に、露滴は佇んでゐる。空には鋭い星の光りが漲つて川面にかすかに映つてゐるが、あたりは眞の闇と云つてもよい。兩國から川下へかけて、芝居の書割のやうに灯入りの家がつゞいてゐるが、物音は天地に絕えてゐる。

問題の船材藏は表門をぴツたりと締め切つて、裏は川、側は堀割だ。踏ん込んで見ようにも足場がない。

露滴は考へ込んだ末、正面から堂々と打突かつて見ることに決心した。そして正面にかゝつたが、近づいて伺ふと、耳門がどうやら閉めずにあるらしい。かまはずに押して見る、スウと、音もなく開いてやゝ右寄り役宅にぽうと灯の色が見える。

入口の土間で、老人が一人、貧乏德利を抱へて股火をしてゐた。

「誰だね？」

と、老人は闇を透かすやうにして、鈍い目に見違へたか、

「おゝ、木村さんかえ？　もう奥ぢやあ盛んに始まつてゐるやうだよ。」

耳を澄ますと、丁半賭博の掛聲が、ハッキリと洩れて來る。

――何といふ事だ！

露滴は呆然とした。いかに末世とは言ひ、これまで旗本なぞの中には、賭場を邸に開かせて場銭の上りで贅澤をしてゐる不所存者もあるやうに聽いてゐたが、公儀役所の中で丁半の掛聲が洩れるとは――

――果して怪しい！ では、例の神變組とかの本據も、堂々とこの倉屋敷の中にあるのかも知れぬ。

相手は公儀地盤を金城鐵壁とたのんで、出入の番人をぼんやり者の老人に任せてゐた。それが彼に取つてはこの上もない好都合だつた。

「相變らず上機嫌だな？」

と、露滴は木村とやらになり澄まして、

「では通るぜ。」

ふところ手のまゝで、土間を通つて、板縁に足をふみかける。

「受けたら酒手をくんねえよ。」

「大丈夫だ。たんまりつかはすぞ。」

丁半の聲を目あてに奥に這入つて行く。

こゝを萬全の本據とたのんで、黄金を賭けて天下法度の博奕に耽つてゐる連中は、この不意の闖入者に氣付くはずがない。露滴はしかし、その場へすぐ踏ん込んではゆかず、物影に身をかくしてゐると、間もなく、座敷を立つて縁側へ出て來た一人――大髻の御家人風――近づいて、

「もし。」と、露滴が聲をかける。

「だれぢや？ どなたぢや？」

相手は油斷し切ツてゐるので、同類の一人と思つてか、常の調子で振り返る。

「わしぢやが――」と、一層近づいて、アッと、相手が聲を揚げるひまもなく肋を突き上げる。ムームと呻いてのぞけるのを、そのまゝ小脇にかゝへて、裏庭へ刎ね下りる。

裏庭の倉と倉との庇合ひに引擦り込んで、活を入れると、相手はきよとんと闇の中で目を見張つた。

「聲を立てると斬るぞ！」と、露滴は言つた。

「左樣にじたばたせずに、音なしく坐つてをれ！」

と、重ねて言つて、

「訊ねることに眞當に返事をいたせ。しからざるに於いては、斬つて捨てる。」

相手は無刀ではあるし、不意を打たれて膽を潰してゐることとて、唾を呑んで頷くばかりだ。

「貴公存じ寄りがあるだらう？ 今夕永代で淩つて來た長門屋の娘はいづれに隱してある。」

「長門屋の娘――いや、拙者一向左樣なことは――」

「馬鹿な奴が！ 祕したとてこの倉に連れ込まれたこと證人あつて承知してゐる。どこにゐるか？ ハツキリ云へ！ 云へば助けつかはさぬでもない――」

露滴は右手を柄にかけた。

「一味であれば聽き知りもしよう、わしは一昨夜神變組を蹴散らした俳諧師露滴ぢやぞ！ その一刀が

閃めいて見ろ、貴公の細首は――」

「まづ、お待ち下さい。」と、御家人はあはれな聲を出した。

「實は拙者は惡友にさそはれて、手なぐさみにこの倉へ出入いたすだけのもの――かどはかし、盜賊はいたしませぬが、今宵何か獲ものがあつた由で、鍵番詰所に納めたる趣は聽いてをります。」

「ふうむ。」

露滴は生若い御家人が、どこから見てもたゞ放埒者にすぎず、さまで惡事に深入りしてゐるわけでもなささうなのを見極めると、

「拙者といたしては、今夜こゝに入り込みをる奴原は、一人として生かしては措かぬ決心ぢや。しかし貴公が、眞實改心なすに於ては、見のがしても遣はさう。その代りその鍵番詰所とかへ案内いたせ。」

「はい。」

若い御家人は恐れと寒さとに身震ひして、

「鍵番詰所はあそこの灯の見えるところでござる。」

「貴公を信用して自由に歩ませる。その代り惡あがきをされると、背後から一刀でござるぞ。」

「大丈夫でございます。拙者はこゝの仲間とさまで深い仲ではござりませぬで――」

シト〳〵と、霜柱のたちかけた庭土を踏んで、二人は鍵番詰所に近づいた。

「こゝでござる。」と、囁き聲。

露滴は立て切られた戸の外に佇んで耳を澄ます。

中から濁みた聲が聞えて來る。

「どうだ――娘御――一つ酌をしてくれぬかな? ハ、ハ、ハ、成程、手足を結かれてゐては、それもなるまいなう。いや、わしもいゝ年をして、そこ許とは祖父孫というてもよいのぢやが、しかし、やつぱし美しい女子を見ると、生ごゝろが出てまゐるて。ハ、ハ、ハ。組長どのゝお叱りさへなければ、手足をゆるめて、酌をして貰つて、それからこの寒夜ぢや。肌をあたゝめて貰はうものをなあ――」

六十ばかりの老人の聲だ。その男一人が慥にこの中にゐるお梅の側で、つれ〲の獨酌をこゝろみてゐるのであらう。

「あれは雜賀と申す老人で――」と、御家人が言つた。

「なか〲の道樂者で――」

「貴公、聲をかけてこゝを開けさせなさい。」

「は。」

ためらつたが、ギラリと閃めく物が怖ろしい。

御家人は、もう盲從する外はないと考へたので、わざと元氣な聲で、

「雜賀氏――御老人――」

「どなたぢやな?」と、中から濁つた聲が答へる。

「わしぢや、花田ぢや。ちよつとこゝを開けてくれ。」

「ふゝん、また元も子もなくして、一兩貸してといふのかな? よい〲貴公は狡うはない若い衆ぢや。」

貸して上げるぞ。」

老人は時々賭博の資本を貸して、暴利を貪る味が忘れられないと見えて、やつとこさと立ち上つて、重たい戸をガラリとあける。

「貴公、這入れ。」と、露滴に命じられて、花田がまづ這入る。つゞいて、露滴が――

「お！　この方は？」と、雜賀が目を瞠る。

「わしか！　わしは新しく組に入つたものですよ。」

と、言つた次の瞬間、柄頭がぐいと伸びて、老人の胸をグイと突き上げる。ウツと土間に突んのめつてしまふ。

「氣の毒だが、仕方がない。」

老人を仆して置いて、つか〳〵と座敷へ上る。座敷には隅の柱に、にぶい灯を受けてぼうと咲きみだれた紅い花！

それがかどはかされたお梅の崩折れた姿であつた。お梅は褄や振から緋い色をみだして、高島田の根も抜け崩れ、ぐつたりと俯伏したまゝ、氣を失つてしまつてゐるのか、露滴といふ救ひ主が近づいたにも氣がつかず、身じろぎもせずにゐる。

「お梅どの！　しつかりなさい。」

露滴は彼女の肩に手をかけてゆさぶつた。

「露滴がすくひに參りましたぞ！」

うつとりと、お梅は顏を上げた。彼の名が喪心しつくした處女の耳にもひゞいたのであらう――そして、ぢつと洞ろな目で相手を瞶めたが、急に――

「まア！　あなたが！」と、掠れた聲で叫んで、恥かしさを忘れてすがりつかうとしたらしかつたが、手足を紐で縛されてゐるのでそれが出來ない。

露滴は小柄を抜いて、バラリ〳〵いましめを解いた。

「さ、寒いであらうが、早く外へ――そなたは直ぐに戻らねば危ない。」

露滴は怖れと疲れとに身動きもまゝならぬお梅を引ッかゝへて、そのまゝ庭へ出た。

「貴公も來給へ。」

花田は露滴にすつかり魅られてしまつたやうに、默々とあとに從ふ。

露滴は倉の庇合ひを潛り抜けて、いつか裏河岸へ出てゐた。そこには竹木を流すための堀割が出來てゐて、小舟もあまたつないである。

彼はちよいと考へ込んだ。

「このまゝ舟でそなたを長門屋までお送りしたいのだが、それでは拙者としては折角やつて來た甲斐がない。さりとてお梅どのには櫓櫂はあつかへまいし――ところで、物は相談だが、花田氏とやら、貴公この娘御を長門屋まで送つて差し上げぬか――」

「拙者が！」と、花田はむしろ目を瞠つた。

「そこ許は御自分も云はれる通り、惡事に左まで染んでゐるわけでもあるまい。黄金は博奕でまうける

よりも、善事をして莫大に得るが勝だ。長門屋は名代の富豪、娘御を拙者と力を合せて救ひ出し、送り届けた旨を申せば、なう、禮金は云はずともものことぢや。お梅どの、無事戻つた上は、花田どのに十分の報いをして差し上げなさい。」

「そして、あなたさまは？」と、お梅ははなれともなく、露滴の袂を摑かんだまゝ氣づかはしさうに訊ねる。

「拙者でござるか？」

と、露滴は星あかりの中でニツコリして見せて、

「拙者はちよつとかやつ等に申しのこして參ることがござるで――」

「でも、相手は大勢、おあぶなうございます。もはや私もおかげで無事、なにとぞ一緒に宅までお召し連れが――」

お梅はをとめごゝろに、一生懸命で云ふのであつたが、露滴は頭を掉つて、

「イヤ〳〵、拙者としてはこのまゝには立ち去りがたいのぢや。いづれ後刻おたづねいたさうで、そなたは一刻も早く無事な顔を親御に見せて上げるが孝――また何ぞ變事もあれば、拙者の苦心が水の泡になる。さ、早く舟にのりなさい。花田氏頼みますぞ。」

「は、畏まつてござる。」

花田は美しい娘を送りとゞける大役を露滴からゆだねられて、得意のいろをかくすことが出來ずしやちこばつてゐた。

「身命を賭してもお送り申すでござる。」

「さ、お梅どの、乘船なさい。」

强ひて、抱き入れるばかりにして、露滴が小舟を突き出す。花田が器用に棹を用ふ。

お梅は闇をすかして、いつまでも露滴の姿を陸に求める。

しかし露滴は、二人を乘せた小舟を突き流すと、そのまゝ堀割の岸をはなれて、しづ〳〵と倉番屋敷の方へ歩き出した。

廣間の方では、折角盜み取つて來た黄金の蔓の美少女が、いつの間にかうま〳〵とふたゝび露滴の手で奪ひ出されてしまつたことにも氣がつかずに、正面に添役井上吉兵衛、左には佐々木の家來の石割三平、右には野塚繁三、それにつゞいて二十人あまりの無頼の武士が、車座になつて盃をあげてゐるものもあれば、また一團をなして丁半勝負に熱中してゐるものもあつた。かくて時刻を見測らつて、永代橋の荷揚場に身の代金の一萬兩をぬく〳〵と手に入れるために出かけようとしてゐるのだつた。

――と、その時障子がすうと開いて、そこに突立つた黒羽二重着流しの青年武士の立姿！

ふと、何氣なく目をあげた野塚が、それを認めて、

「アッ！」

と、叫んだ。

神變組亂刄裡に露滴　佐々木只三郎を嘲ける事

——神變組の一頭目野塚繁三が、露滴が鬪際に突然突立つた、スラリとした立姿を見て、思はず、

「アツ！」と、筒抜けた叫びを立てたと同時に、佐々木只三郎部下變裝得意の石割三平も、今夜はありのまゝの石割ゆゑ露滴の目を異裝で晦ますこともならず、これまた低く、

「オオ！　あれは！」と、呟いたまゝ、それでも主人の名分をはゞかつたと見え、狼狽てゝ顏を灯にそむけようとする。

神變組首領、船材藏藏番添役の井上吉兵衛は、まだ露滴を見知つてゐない。この神變組巣窟密會の場に、唐突けに闖入して來た浪人髷の美青年の姿を一瞥すると、半ば驚き、半ば訝しみながら、咎めるやうに罵しりかけた。

「こりや、何者だ！　案内もなく無禮であらう。」

「お尋ねまでもなく名乘らうとしてゐたところだ。」

と、露滴は例の爽かな、少し尻上りの調子で抑へるやうに答へた。

「拙者はそれなる石割氏もよう御存知の俳諧師露滴。不思議な御縁で、この船材藏に巣を食ふ神變組とやらの方々と兩三度お出逢ひしたものだ。神變組のさる人々より、今日こそ露滴も手も足も出まいとか

の言傳てがあつた由ゆゑ、とりあへず、身一つにて參上いたした。歌俳諧に身を窶す露滴の劍は戯れとは申せ、そこ許達にはちと荷が勝ちすぎるか知れねど、相當の挨拶があつてしかるべきだ。床前のお方、御返事いかゞ？」

「ナニ、その方露滴とな！」

井上吉兵衛、男ざかりの武士ながら、直ぐには立ち兼ねて唸いた。これまでその名を耳にも目にもしなかつた露滴と呼ぶ俳諧師、佐々木只三郎さへ押され勝ちだといふ年少劍豪が、行きがゝりで敵に廻つたといふ話は、野塚、石割たちから聽いてゐた。その人間を向うにまはしての仕事は覺束ないといふ見込みで、相手の鼻を明してやらうと、今夕の長門屋娘お梅奪掠を企て、十分に成功して祝盃を擧げてゐたのに、當の露滴が、思ひもかけず、しかもこの船材藏内の密室に姿を現はさうとは！

——世の人は幕府直屬の倉庫としてしか考へてゐぬはずのこの藏へ、一體どうしてこの男が出現したのだ！　どんな手懸りで嗅ぎつけたのだ！　內通のものでもあつたか！

吉兵衛の胸の中には、あわたゞしくこのやうな疑念が入り亂れた。

と、その時、野塚繁三は負けじ魂で叫ぶのだつた。

「組頭、驚くことはござらぬぞ！　露滴とて神ではない。われ〱の本據へ乘り込んだのは死地に好んで入る愚か者！　それ方々、やつておしまひなさい！」

と、言葉で、露滴の劍豪は聽き及んでゐながらも、いづれも命知らずの若侍たち、いつかめい〱

「ばう、と捨て、襷さへかけてしまつてゐたのが、ギラリ〱と引き拔いて、刀葉林の譬をさなが

切尖を揃へて半圓を描いて露滴を圍まうとする。

は大刀の鯉口を切つたまゝで、まだ抜き合はせようともせず、ズイと一歩二歩室内に進み入る、露滴の眼眸と足の爪先の動きとに押されて、半圓陣が微妙に動いて、いつかこれまで吉兵衛どもが坐つてゐた床の間まで近づいた。

と、右手が、柄にかゝると、白い電光のやうなものが空に走しつて、露滴は完全に床柱を後楯に取つてしまつた。

「石割氏。」と、野塚繁三が忙しげに囁いた。

「露滴がお藏を嗅ぎつけたとて、まだ人質に指を觸れてはゐまい。大事の玉だ、この場へ――」

と、言つたのは、露滴の鋭い切尖を、人質お梅に依つて鈍らさうといふ考へだ。露滴のために神變組幹部の一命も危い時は、お梅の白い胸元に刀尖を擬してその場を逃れようといふ心算に相違ない。

石割は頷いて室外に去る。勿論鍵番詰所にかくしたお梅の許へといそぐのだ。

露滴はしかし、急に斬らうとも突かうともしない。片手青眼につけたまゝ、凜々たる語韻で長廣舌を弄してゐる。

「何分にも亂世だ、おの〱方が切取り强盜武士の習ひといふその惡習に染むのも不道理の道理とも申されよう。そこ許がたが、前非を悔いて、藏屋敷を退散いたさうなら、拙者は忘れ置かう――のう、お互に大事な生命だ！　殊更、頭らしいお方に言ふが、この露滴の刀が動くと、部下の若侍の一命が、一刀ごとに消え申すぞ！　哀れではないか！　のう、そして最後には貴公もこの世の暇を[illegible]

ぬ。下らぬ意地を張りなさるなよ！」

その言葉は、もとより藏屋敷の一室のことゝて、天井の高いがらんとした部屋中に、いう〱として刺すやうに鳴りひゞく。

しかし、若侍たちは多勢をたのみだ。つまりは他人を犧牲にして置いて、自分が功名を遂げようといふ欲望を制することが出來ぬ手合だ。

「やあ！」

「えゝつ！」と、威嚇だけが目的の氣合を、亂雜な夕立の雨脚のやうに注ぎながら、じりゝ、じりゝと圓陣をせばめて行く。

露滴は相手の刀身が、霜が置いた薄のやうに閃めきながら迫つて來るのも、まるでよそ事のやうに辯じてゐる。

「あらためて申し入れるぞ！　露滴はこれまで人を斬つたことがない。蟲けらはじめ物の生命と申すものが大事なことを、よう知つてゐればこそぢや。されば神變組二度の狼藉を制しながら、一方をも殺めなかつた。が、今夜はそこ許たちの出樣ひとつで、生れて初めて人を斬るつもりでござるぞ。拙者にはそれが悲しく思はれる。悔いて改むるにはゞかるこそ卑怯ぢや。のう、この理がおわかりなさらぬかな――」

と、言つて、右寄りに中段につけた一人をぢろりと一瞥して、

「ほう、この仁は鬼のやうな顏付をしてゐなさる。人外者！一

チラリと、露滴の刀尖が微動すると、それが死の誘惑で、吸ひ寄せられたやうに例の鬼のやうな形[illegible]の一人が一刀を揮つて、

——たつ！

と、我れにもあらず飛び込んで行く。同時に、サツと露滴の劍が刎ねのける。それが今夜藏屋敷内[illegible]初の血飛沫で、そして又露滴自身が呼號する通り、彼一代の最初の殺人刀であつたに相違ない。

この一沫の血飛沫が、亂鬪の序幕だつた。眞紅な鮮血のなまぐさゝに心を擾された若侍どもは、[illegible]醉したやうに蒼褪めて、齒を嚙み締めて斬つてかゝる。

露滴は切尖で拂ひのけつゝ、

「かはいさうな方々だ！ 盗みの分け前の少ない仁が、死出の旅には先供をせねばならぬとは！」

なぞと呟いて、出來る限り猶豫をあたへて、相手を改悛させようとこゝろみてゐるものゝやうに、かく〳〵二度目の殺刀を振り下さうとはしないのだ。

すると、その時、一時姿を消した石割三平が、あわたゞしく現はれて、血走しつた目で井上、野塚に囁いた。

「ナニ！ 娘がゐない！」と、野塚が突走しつた聲で叫んだ。

「おゝ、お梅どのなら、もうとうにわが家に立ち戻つて、鬼の棲家の怖ろしさを語つてゐようぞ！」

と、この怖ろしい殺陣の中で早くもその囁きを聽きつけた露滴は叫んだ。

「愚者の智慧はいつもあとから出るものぢや。」

「おのれ、憎まれ口も程にして置け！」

と、今は明かに敵意を示した石割三平が呪はしげに罵つた。

「腕自慢のその方ゆゑ、出來るだけ大勢の刃にかけてつかはさうと、たつた今濱町河岸へ知らせたぞ。人も知つた佐々木の一統が押し寄せたら、その方の身は膾まがひの五分だめしぢや。今の中、勝手な熱を上げて置け。」

「ほう、佐々木氏一味も御光來か！ それは一層おもしろい。」と、露滴は苦笑を洩らした。

「そこ許たちこそ、あの世の旅へ講中氣取りで、大勢で押し出すがよい。三途の川の船頭どもゝ、渡し錢の多いのはよろこばうよ。は、は、は。」

しかし、石割三平が、濱町河岸佐々木屋敷へ助勢を求めたといふ一言は、神變組荒氣の猛者どもの作戰を變へさせた。彼等はこれまで一氣を押し詰めて討ち取らうとしてゐたが、腕をすぐつた助勢が來るとわかつたので、今度は出來る限り間隔を置いて、相手の疲勞を待つて、損害を少なくして打倒しようと工夫しはじめた。

だが、そんな事は、露滴はすこしも構はなかつた。

「拙者も初めて人を斬つて見たら、なか〳〵面白いものだと知り申した。いや〳〵、人を斬れば寢ざ[illegible]も惡しからうが、けものと思へば、まづそれで心が濟む——刃のけがれは、歸り途に大川で洗つて[illegible]う。さあ、まゐらぬか！ まゐらぬとこちらから仕掛けるぞ！」

つ、つ、つ——つ、つ、つ、と、露滴の爪先が疊を[illegible]。とその刀に直面してゐた一人が、打ち込ま

ねば次の瞬間には斬られるにきまつた瀬戸際に、血[illegible]突いてかゝる。

――ビユウ！

と、いふやうな刃風を立てゝ、露滴の劍が相手の右腕の付根に入る。

そして、一刹那、サツと包圍の陣が亂れてあとへ退く。

逸を以て勞を待たうとする作戰は、一見悧巧のやうで、その辨今の場合にはあまりふさはしいことではなかつた。これほど段が違つた人物を向うにした時には、相手を休ませることは却つて氣力をあたへることに外ならない。いつそ最初の氣組通り、遮二無二突ッ掛つて行つたならば、露滴とても鬼神ならぬ生身、一人と二十人あまりのことゆゑ、たまには微傷の一つ二つは負はせることが出來て最後の勝利は神變組に歸したかも知れなかつたが――

露滴は助勢が押し寄せると聽いても、苛立ちいそぐ模樣もない。彼としてはある程度までこの一味を懲らしめて置けば、堂々たる船材藏を根城にして惡事を働くやうな輩は、兎にも角にも退散するであらう――そして公儀の名の汚れを洗ふことも出來やうといふ程の氣持らしかつた。

彼は甚だ緩慢に敵手をあしらひながら、たゞ苦辯熱罵を逞しくするのみだ。

「濱町河岸から出張の方々と申すはいつ着かれるかの？ 冬の夜はいかに長いとは言へ、夜が明けかゝりもしては惡鬼惡靈は姿を消す外はござるまいぞ――どうだ、石割氏、もう一度迎ひの使をお差し出しになりましたら――」

だが、彼が待ちくたびれたやうにこんなことを並べた頃、たつた河ひとつ向う河岸のことゝて、佐々

木屋敷内寄食の密偵刺客役の浪人達が五六人、矢のやうに小舟を飛ばして裏手河岸に上陸した。

この一組は、酒食の料を稼ぐため、石割同樣神變組に腕貸をすることはあるが、氣魄、劍道、ともに泥棒御家人とは選を異にしてゐるものがあつた。

中でも城山半吉といふのは、青年劍士沖田總司と相打ちを取つたことがあるといふ二十七八の手練の士だ。ドヤ〳〵と廣間に乘り込んだ助勢の中から、挺身して乘り出して、

「新手の身どもたちが入れ變らう！ 一同お引き下さい。オイ、露滴とやら！」と、グイと胸を突き出すやうにして、いつか唯一人先頭に立つて、

「身どもと一騎討――勇氣があるか！」

「は、は。」と、露滴は、これまで片手中段に取つてゐた劍をそのまゝ、

「勇氣があるなしは勝負の上でおきめしようではないか、早くかゝつてござれ。」

「ふん、舌長な！」と、城山は分厚の剛刀を上段に取る。

「御めい〳〵、蠟燭を足して御見物願ひたい。久しぶりで助直の切味を御覽に入れよう。」

露滴はぢつと相手を觀察した。なるほど高言にたがはず、新しい敵手は敵とするに足るかも知れなかつた。上段にぢつと据つた大劍が、ズーンと押し下げて來たのを受け流すと、次の刹那には諸手突に變つてカーツと鐵壁をも貫ぬく勢で突いて來るのが十分に推測された。

――ふうむ、捨身に來るな。

と、考へて、自然な微笑をうかべた露滴、切尖を相手の咽喉にねらひを取つて、

「心が直ぐでなければ、突きは突けぬものでござるよ。」

だしぬけな呟きが、世にも勁烈な氣合よりも一倍鋭く城山の心肝を寒からしめたやうに見えた。

上段の構へに兎の毛ほどの亂れが見えて、見開いた兩眼が眩ゆいものを見たかのやうに瞬いだ。

殺氣が正氣に壓されたのだ。

しかし城山は奧齒を嚙み締めて、

――何を！

「えいッ！」と、突ツ刎ねるやうな氣合をかけて、勢を盛り返してのしかけようとする。

露滴は、まだ微笑を消さずに、極めて輕く之れを受ける。

城山の稽古着の背に、寒夜ながらジタ〳〵と汗がしみ出したのが一同の目にもよく入つた。

――危ないぞ！

――駄目だ！

めい〳〵、多少とも劍を解する輩であるから、味方が押され拔いてゐるのがわかりながら、助太刀に出ることは出來ない。助勢が出ると城山が感じた瞬間には、身體に隙が十分にあらはれて、同時にズバリと露滴の一刀が躍動して來るであらう。

すくひに出ることは、却つて當人を殺すことになるにきまつてゐた。

――危ない！

――もう此れまでだ！

一同は目をつぶりたいやうな氣持で双劍士の成行を見つめてゐる。

その中で、門井、内山といふ二人が劍友が仆れたら、間を置かせず飛び蒐らうと健氣な決意で、爪先立つて鯉口を切つてゐる。

「やッ！」と、死に物狂ひで懲りずまに押ツ被せる城山――

「よッ！」と、はじき返して自若たる露滴――

すると、その時、突如として室外の暗がりから激しい怒罵が起つた。

「この場の有樣は何事だ！　城山、刀を退け！　露滴殿、お靜まり下さい。」

そして、ぬッと姿を現はしたのは、いつもながら紙のやうに蒼白い、殺氣の化身であるやうな佐々木只三郎その人に外ならなかつた。

あまりに突然な佐々木の出現は、井上、石割以下、神變組一味及び救援の諸士に取つて明かな驚きであつたに相違なかつた。彼等は思はずたぢ〳〵と背後にすさつて、中には室外に身をのがれようとする者さへある。

佐々木は兩手をひろげて叫んだ。

「城山、刀を退け！　一同動くな！　その場に坐り居らうぞ！」

城山は雷霆に壓されたやうに、グ、グと後退して刀を垂れた。

一同は辟易してその場にピタリと坐つてしまつた。

「露滴殿、いかなる仕儀でござる？　實は只今參邸いたせば拙者家來石割以下船材藏にて危急――若者

ども助太刀に駈けつけたる趣ゆゑ、當屋敷は公儀の所屬、血に汚しては一大事と取り沈めに馳せつけ申したが、その相手が貴公とは――」

露滴は刀を下げたまゝ、しげ〱と佐々木を眺めた。

「いやなに、さまでお騷ぎなさるほどのことでもありませぬ。この一構へ、盜賊の巣と見きはめましたで、ちよいと懲らしめに參りましたまで――」

そして、項垂れてうづくまつてゐる石割の方を目で指し示して、

「しかるに思ひがけなく先生御家來石割氏が、泥棒一味でおいでなさるで、ひどく吃驚致しました。それにしても、先生は御近所のお住居、かつは御家來衆が夜盜一味なるにも拘らず、これまで何も御承知なさらずにおいでなされたか？ それはまた失禮ながら迂濶千萬――」

露滴の言葉は靜かであつたが、言々句々、佐々木の肺腑を突かずには措かなかつた。彼としては、との船材藏役人どもが不行跡で、賭場が開かれ、集まる一味が押借ゆすりを試みるといふやうな噂を聞かぬでもなかつたが、その惡事が結句夜盜にまで進み、しかも一味の中に石割はじめ自分手の者あまたが加はつてゐるといふことは、今夜初めて見聞するのであつた。

佐々木は絶句して、憤怒に黒い炎を吐くかと思はれる瞳で石割以下を睨め下ろした。

露滴の聲はゆつたりと續いて行く。

「石割殿はじめ、死力をつくして拙者に手向ひなさる以上、いかに澆季とは申せ、佐々木先生もこの一味の上にお立ちなされてのことかと、實は一方ならず驚いてをりました折柄、突然お立ちいでの先生より只今のお言葉――さては御存知なかりしことゝ、失禮ではござるが先生御武名のために祝着申し上げます。」

――佐々木只三郎、性來の殺氣と、幕府への忠節とが奇怪に混じて、暗殺捕縛の役を好んでつとめてはゐても、名門に生れて劍に生きる當代の一人物――それが露滴から、夜盜の頭目と目されたといふのである！

ピリ〱と、佐々木の眉は動いた。

――禮儀とすれば、自分の不德と部下の不埒とを厚く謝罪して、一味を公儀役人に引き渡すことを露滴に約すべきだ。

しかし、それが出來ることだらうか？ 自分の部下が盜賊であつたといふことを、世間に公開することが忍び得るであらうか？

彼は一層蒼褪た。正義と害心との心裡の爭鬪に草葉のやうに蒼褪た。

――糞！ こやつを斬ッてしまへ！ 死人に口なしぢや！

凄絶の氣が眉間を地獄の炎のやうにかすめた。そして思はず一足踏み出さうとすると、その途端に、荒々しい足音が庭先に近づいた。

「御用心なさい！ お倉裏河岸を目がけて、人數大勢を載せた小舟が三艘押し寄せて參りますぞ！」

「ほう、長門屋の船頭ども、拙者出迎へに參つたか？ それともその筋の――」と、露滴はそるやうに呟いた。

――佐々木は出端を碎かれてしまつた。

露滴を打取ることは、腕利きの部下に加へるに自分を以てすればあながち難事ではあ[illegible]人數が寄せて來たとなると、その爭鬪は當然、公儀役人の耳に入らう。又、寄せて來たと[illegible]どもであるとすれば、騷ぎは大きくなるばかりだ。その曉こそ、これまで武名に汚辱を受け[illegible]が、盜賊の張本と罵られて、縛り首の重罰をも受けねばなるまい――

――佐々木只三郎は、そのまゝ立ち竦んでしまつた。

「佐々木先生、先生お立ち越しの上は、これ等の人々を、先生にお渡し申して立ち去るが、若[illegible]儀と存じます。拙者といたしましては、公儀お倉が泥棒の巣になるやうなことなくば、それにて[illegible]たします。いかゞでござらう？ お預り下さいますか？」

露滴の言葉はこちらの胸を見通してゐるやうだ。

佐々木は、無念のいろを隱し切れずに、しかし止むなくうなづいた。

「しからばこれにて御免蒙ります。」

拭ひをかけて、ピタリと一刀を鞘に、露滴は一禮して、そのまゝ庭先へ――

佐々木の目が爛々と闇に消えゆく露滴の後影を追ふ。鯉口が一度斬られて、またピーンと閉まる。

一座は顏を上げるものとてもない。

――今こそ敵だ！ 今こそかやつは俱に生きるわけには行かぬ敵だ！

と、佐々木は心に呪つた。

そしてジロリと激しい目で居流れて項垂れた不心得な武士どもを眺める。

――此奴等は刄にかけるも穢らはしい。しかし此奴等を我が手にどこまでも庇護せねば、露滴に一步を讓る事となる。不正とは知るが止むを得ない――あゝ、いまはしい事ではある。

佐々木は不埒な部下のために、露滴ほどのものを終生の敵として憎まねばならなくなつたことを憤らずにはゐられなかつた。つかつかと石割の側に步み寄ると、パッと頭上に唾を吐きかけた。

「馬鹿者奴が！」

ではあるが、結局その夜の中に、この場に居合せた侍どもを、彼はわが屋敷の中に隱してやることにせぬわけにはいかなかつたのであつた。

愛憎渦卷く中を露滴靜かに都上りの事

「不運と申しますものは、あとからあとと、どうしてまアから續いてまゐりますものか、長州樣があゝいふ破目におなりあそばして、この長門屋もお上から睨まれ通し、商賣の方も思ふにまかせぬところへ、家内の大病――ことしの暮ほどいまいましい暮はないと呟いてをりますと、たツた一人娘のこれが一度までの大難――しかし、あなた樣のお力で、大事な娘に何事もなく濟みましたは、神佛の御加護でがなございませう――いえ、もうこれの身に間違ひさへございませんたら、商賣がどうなりませうと、病身の女房はどうせ諦めてをります壽命――私といたしましてはこれに越した喜びは無いのでございます

さ、どうぞ、おすごし遊ばして──娘や、さあ〳〵、お酌をして差上げませぬかえ。」

廻船問屋長門屋の主人は、事實二度迄愛孃の危難を救つてくれた露滴を、信心の琴平宮の神[illegible]めて、奥まつた離れに招じ入れてしきりに禮の言葉をくりかへしてゐる。

娘お梅は狼藉に逢つて亂がはしく亂れ汚れた衣類を、黄八丈の振袖に着更へて、緋の麻の葉に黑繻子の帶、恥かしさうに恩人の側に侍して重たげに銚子をいぢつてゐる。

露滴はまさに微醺だ。微醺は黑瞳をいよ〳〵涼しげなものにし、丹花一文字に引き緊まつた唇をいよ〳〵美しいものにした。

「ハ、ハ、ハ、怪我の功名、その上相手が弱かつたまでのことでござるよ。なれど、拙者臆病で、劍を取つて未だ人を斬つたことがござりませなんだ。今宵は遂に二三人手にかけましたが、この分ではこれが皮切りにならうも知れませぬ。人斬りを始めては、もはや俳諧どころでもござらぬで、またもとの武士に戻らずばならぬ仕儀──これが、殘念と申せば殘念で──」

冗談のやうに露滴は言つたが、彼としては妙な行きがゝりから船材藏役人どもを手にかけ、佐々木只三郎を敵にまはしてしまつて見れば、身を暗ましもせぬ以上、ふたゝび劍に頼つて對抗せねばならぬのだつた。

「さう伺ひますと、一層お氣の毒で。」と主人は悄れる。

露滴は笑つて、盃を干して相手に献した。

「いや、何事も宿世でござらうよ。川ものは川に果てるとか言ひますでな。」

そして、傍に恐縮して坐つてゐる花田御家人を眺めて、

「どうぢや、君も存分馳走に相成つたら──娘御が無事な姿を當家へ見せることが出來たのも、貴公の力が大分預かつてゐるのぢや。」

「ところが。」

と、若い、放埒者上りの御家人は、さも氣まり惡げに額を抑へた。

「ところが、拙者はさつぱりお役に立ちませんでした。何分にも櫓櫂をあやつツたことがござらぬで、却つて娘御がかよわい腕で漕ぎ抜かれた始末──」

「ハ、ハ、ハ、して見るとそこ許も勇婦ぢやな──」

お梅は頰を染めた。

「いゝえ、さいはひ下りでございましたから、おのづとこゝまで流れついたのでござります。」

「この娘はな、只今はそんなに大人しうなりましたが、いとけないころはいたづらで、ともすると堀割から小舟に乘つて、大川へ出ようといたしましたりして、ほんたうに世話をやかせたものでござります。」

長門屋主人は、娘いとしさに目がないやうに、

「子といふものを持ちましても、いつになつて安心の出來ますことやら──」と、そんなくり言を言ひかけた時だつた。

──慌たゞしく、廊下を走しつて來る跫音がして、挨拶さへもそゞろに障子を引[illegible]

突き出したのは、見世の若者の一人だ。

「旦那さま、大變でございます。」

主人と、娘とは、折が折で色を失つた。

「大變とは何だ！」

若しや、また惡浪人たちが押し寄せたのではあるまいか——

「只今お店のすぐ先きで、ぼろん字風のものを、三人ばかりのお侍さまが取りかこみ、いやもう激しい斬り合ひでございますが——」

主人は手を振つた。

「おおおお、騷々しい時世だの。そのやうなものにかゝり合つてゐては大事だ——早く大戸を下して、灯を消しておしまひなさい。」

「で、ございますが、旦那さま、そのぼろん字が、笠を脱ぎ捨てましたところを見ますと、長州さまのお船手——」

と、言ひかけて、露滴たちに氣兼をしたやうに言ひ澁る。

「ナニ、お船手！」と、主人はハッとして、

「お船手の藤川さまか？」

「はい、どうやら瓜二つにお見えなさいます。」

「それは大變だ。藤川さまはこの店に取つては、大事の大事のお役向——勤王とやらにお與しになつて、

身を隱しておゐでとのことだつたが、それでは何かわしに御用があつて、こゝへ訪ねておいでの途中、敵方とお出逢ひなされたものに相違ない。しかもこの店先と聽けば、このまゝには措かれない。及ばずながら、わしが御仲人に——」

主人はよほど恩義のある人と見えて、とつかは座を立たうとすると、お梅がすがりついた。

「父さま、まあ、そのやうに危ふいところへ——」

「いや、ぢやと申して捨て置いては、長の御贔屓さまへの義理が立ちませぬ。長州さまへすみませぬ。さ、放しやれ！　この間にもしお斬られにでもなつては——」

露滴は盃を置いて口をはさんだ。

「藤川——長州の藤川とは吉太郎といふ仁か？」

「いかにも、吉太郎さまで——先生には御存知で！」

「おゝ、名だけは聽いてゐる。よし、わしが出向いて、一通り容子を見屆けよう。」

と、大刀を取つて、ズイと立つ。

「まあ、それは有難いことでございます。」と、主人はいそ〳〵と、

「勤王でも佐幕でも、そのやうなことは私にはわかりませぬが、藤川さまは惡いことをなさる方ではございませぬ。どうぞ、お助勢あそばして——」

「とにかく、參つて、事の次第を訊ねて見よう。」

——露滴が若者の案内で廊下へ出ると、花田もあとにつゞく。主人、娘も、怖いもの見たさ、心がゝ

りさに、これも立つてゆく。

長門屋店先へ出て見ると、いかにも若者の言ふ通り、一人のぼろん字、三人の荒武者に追ひつめられて天水桶を後楯に、尺八を左に、右手には一尺八寸ばかりの護身刀を振りかぶつてゐるが、おぼろな灯かげにも、すでに左の肩口に、背後から斬られたらしい傷をうけて、必死の形勢だ。

迫つてゐる三人――それ等の面影に、露滴はどこか見憶えがあるやうに思つたが、早くも花田が囁いた。

「あれは佐々木組の人達です。いづれもなか〳〵の腕利――」

「おゝ、佐々木道場へまゐつた時、肩ひぢをいからしてゐた奴等だ――ふん、かやつ等、わしを見たな？顔を見られた以上引ッ込んでもゐられまい。」

露滴は例のふところ手で、悠々と近づいた。

「卒爾ながら、深夜の劍戟――意趣か仇討か、うけたまはりたい。」

佐々木組の一人が荒々しく答へた。

「こやつは不逞の輩でござる。拙者等誅滅いたす間、それにて御覧下さい。」

「不逞の輩は上役人取締るであらう。貴公等は役向とも見えぬ。例の佐々木先生お抱への刺客らしいな。いづれにせよ、一人へ三人での暗討は卑怯だ。」

露滴は聲も高めずにこゝまで言つたが、突然勵聲した――

「お退きなさい！　お退きなさらずば邪魔をいたすぞ！」

相手も露滴と見て取つたので、サッと不安の色を漂はした。彼等はこよひ船材藏一件はまだ知らぬらしいが、露滴の手並はすでによく心得てゐる――しかし、彼等としてもこのまゝには退けない。ましてこの藤川吉太郎をば、こゝ數日つけねらつて、やつとこの場に追ひつめたのだ。

一人が叫んだ。

「構ふな！　早う藤川をやつてしまへ！」

そして、手負の敵をば他の二人にまかして、自分は露滴に當らうとする。

露滴は左手をふところから出して、鯉口をブッリと押し切つて、やがて右手が柄へ――凍てた土を、草履に踏んで、ぼろん字の側へ來た。

「藤川どのとやら、拙者も見のがせぬわけがござるで、御相伴いたしますぞ！」

「かたじけない！」

肩の傷がよほど深いか、息が迫つて、聲音が掠れ喘いでゐる。

トウ！

露滴に對抗した一人が、唐突けに踏み込んで、突くと見せて横薙に、一擧に事を仕濟さうとするのを、俳諧師はニタリとしてほんの毛程に身をかはしたが、一瞬後にはあせらない中段の切尖が、相手の目の間にピタリと据ゑられた。

「お退きなさればいゝに！」

と、面倒さうに呟いて、敵の身體を吸ひ寄せるやうに上段に變る――相手はもう一度飛び込まねわけ

に行かぬから突き進むのを、

「エイ。」

押へて引くやうに斬り下げて、それには見向きもせず、

「ぼろん字どの、のいた！」

しかし、その時には、ぼろん字は左右から斬り立てられて、左の尺八はとうに取落し、右の劍でわかに身を防いでゐる。露滴が走りかゝつて、左の敵の小手を、太刀をつかませたまゝ斬り落とす――と同時に、その男が、斬られた右手首から潮のやうに血を噴くのを、左の掌で押へて逃げ出すのと同時に、今一人も刀を退いて、たちまち闇の中へ！

敵は潰滅した。

總毛立つて、立竦んで眺めてゐた長門屋一家が、ぼろん字の側にかけ寄らうとした時、氣がゆるんだか、彼はよろめき仆れかゝる。それを、露滴は抱き止めて、

「藤川氏とやら！　しツかりなさい！」

「は、忝ない――殘念でござる。拙者調べ上げの機密書を、京の桂どのまで持參しようと、長門屋の船便賴むためにこれまで參つて――」

片息に、喘ぎ、喘ぎ、ガチ〳〵と打突かる齒の根を嚙みしめて、藤川はそこまで言つたが、もう言葉がつゞかぬ。まとまらぬ。

「いづれのお方やら――御貴殿――この書類をお屆け下さい。」

刀をつかみしめた右手で、胸のあたりを――

「何ごとも緣ぢや。拙者身にかへ、桂どのまで、お文お屆けいたすであらう。」

――思ひがけきやの言葉が、露滴の唇を洩れた。深手に死に行くもの〻狂歡やいかばかり！

「お！　御貴殿が！　忝ない！」

藤川なにがしは血死期の恨みに、これまでつかみ〆めてゐた刀を捨て〻、わな〻く手先で、露滴の指をさぐつた。

「ハ、ハ、意氣地なく、はや視力もござらぬ。お顏を拜しがたいのが無念――では、桂どのへ、よろしう――」

肩胛骨を裂いて、肺尖深く斬り下げられた致命傷に、ぼろん字は露滴に抱かれて死んだ。

「御存じよりの仁であれば、死體はお葬り下さるがよい。」

と、露滴は男泣きの主人に言つて、

「少々、咽喉がかわいた。店頭で、茶を一杯頂戴いたさう。」

紙のやうに蒼褪たお梅がすゝめる煎茶を、

「イヤ、酒をたべたあとの茶ほどうまいものはござらぬ。もう一杯。」

そして、二杯所望して、それを飲み了ると、立ち上つた。

「では、わしはこれでお暇いたす。」

「まあ、もう一度奥へお上り下さいまして――とんだことで酒宴も亂れましたが――」

と、主人が止めるのを、

「イヤ、定めしお聴きになつたであらう。わしも妙な行きがゝりで、ぼろん字どのと約束してしまひました。ぼろん字どのゝ懐にあつたこの書類、これを屆けにこれから京へと上らねばなりませぬ。」

「と、申して、今晩すぐにお立ちとは、あまりに性急な！」

「はて、十萬億土に旅立つた人からの言づてぢや。たか〴〵東海道五十三次、ちよいと行つてまゐるであらうよ。」

そして、花田をかへりみて、

「貴公、お氣の毒ぢやが、明日にも白木屋裏拙者浪宅へまゐり、婆によう留守いたすやうに言ひつけて貰ひたい。」

主人は感に打たれてゐた。

「はてさて、御武家衆のお義理がたさと申すものは、格別でござりますなあ——」

「ハ、ハ、ほんの粋狂でござるよ。」

——露滴は、とにかく當座の旅銀にと、長門屋が差し出した百金を懐に遠慮なく收めると、寒夜の深更を、そのまゝ懐手でゆらり〳〵と——

——見送る男女の瞳には、不思議な感動の煌きがすべて宿らずにはゐなかつたが、その中でも、黄八丈の振の袂を、乙女らしく目に押しあてた娘お梅の白い頬は、いつまでも涙に濡れつゞけてゐた。

彼女ももはや春を知る年ごろだ。露滴のやうな若ものと、世にも奇しい交渉を生じた以上は、單純な

氣持で恩人を考へるわけにはいかない。

戀だ！ 今、彼女の胸を蕩かすものは戀だ！ だが、もはやその人の姿は無い！ その人の姿は深夜の闇に呑まれた。彼女はその人と自分とをへだてる闇が、彼がたどるながい〳〵街道よりも、一層果てしないものゝやうな氣がして、それを泣かずにはゐられないのである——

佐々木只三郎夜盗默許のこと
附り 長門屋滅盡のこと

濱町河岸佐々木屋敷の、茶室めいた離れの一室で、灯の色も寒々しい冬の夜更けを、壯年ながら幕閣から浪人隠目付の大役を任せられてゐる只三郎は、今し愛刀に拭ひをかけてゐるところだ。小太刀を取つては天下一と言はれた彼の差料、一尺八寸秋廣の燒刃の匂ひは灯かげに青々と渦を捲いてゐるが、この肌色にこれほどの凄慘味を帶びさせるまでには、これまで何人の血潮を嘗め吸つたであらう——

只三郎は愛刀の輝きに、惚々と眺め入る——まるで戀しい美女の肌を撫でさするやうにも愛撫する。

「のう、いつもそなたは變らぬわしの味方ぢや。いつもわしが斬りたいものをば、よう斬つてくれる。どんな骨の硬いつはものを斬つて捨てゝも、刃こぼれひとつ見せはせぬわい——」

さう呟く彼の瞳には、去る夏麻布一の橋で、清川八郎ほどのものを、後袈裟、たゞ一刀に打つて捨てた日のことが浮んで來る。斬り仆したなりにその場を立ち去つたが、刀刃一閃の刹那、ザアツと音を立

てしまいた、あの志士の眞紅な血飛沫は、今も目に映つてゐる。

「わしは斬るのだ。この上とも、何十人、何百人、何千人でも斬るのだ。おたのまれ申した上さまのために斬るのだ。海南西海の邊鄙にのさばつて、絕えず幕府をうかゞふ奴原を斬るのだ。」

只三郎は、心の中でそんな風に獨語ちつゝ、拭き上げた秋廣を灯火にかざして見て、ニタリと唇を引きまげて微笑したが、しかし次の瞬間、笑ひは消えた。そして、急に苦々しげな色が眉間を過つた。

「それにしても、あやつだけは！」

只三郎の心の目に、細そりとした黑衣着流しの男の面影が立つ。それは露滴と號する奇怪な青年の幻影だ。

只三郎の唇は一文字に引きしめられ、やがて並びのいゝ前齒が下唇を嚙み締めた。

「あやつ、今度出逢うた時こそ！」

――この小太刀の天才は、露滴に對しては偶然不思議な出會をして以來、相手の妙手を敬慕するあまり劍を取つて立ち向ひながら決して憎む氣にはなれなかつた。が、今はその友情も消えた。二度、三度勢のおもむくところ止むを得ないとは言へ、彼に退負を取つてゐる形になつてゐる只三郎であつた。

ことさら、船材藏の一件は只三郎の自負心を傷ける。自分の輩下が、あの破廉恥な手合と一味してゐることを、露滴にハツキリ知られてしまつてゐるのであつた。この一事でさへ身がわなゝく程憤ろしいところへ、折角追ひつめた長州密偵の暗殺を、またしても彼から妨げられたといふのだ。

「露滴とやら、今度こそは！」

切尖からはゞき元へ見下して、ピタリと鞘へ收める。

すると、そのかすかな鍔音が切ツかけのやうに、廊下に足音が止つて、

「先生、ちよいと御意得たいのでござりまするが――」

部下の石割の聲だ。

「何事ぢや。這入れ。」

「お邪魔いたします。」

這入つて來た石割を、ジロリと只三郎は一瞥する――刺し貫ぬくやうな目だ。

この寵愛を加へてゐた部下が、船材藏の手合に交じつてゐたのを見出してから、只三郎は言ふまでもなく憤つてゐた。石割に限つてそこまで魂を腐らせてゐるとは思つてもゐなかつたので、憎しみは一倍であつた。若し、部下に一人も多く腕の利いた人間が欲しくない場合であつたら、癇癖の佐々木のことゆゑ、とうに詰腹を切らせてゐたかも知れないのだつた。

石割も深く恐れ恥ぢてゐた。で、あの事件以後一週日ばかりといふもの、主人の前へ顏出しもせずに逼塞してゐたのだ――それが、今夜、だしぬけに姿を現はすには、何か重大な問題を提げて來たに相違ない。

「先生、拙者め、重々申しわけなく、お詫びの言葉もござりませぬが――」

「そのやうなことを言ふには及ばぬ。」

只三郎は、さもうるさげに押しかぶせて呟いた。

「心底濟まぬと思つたら、とうに腹を切つてゐるころぢや。今になつて、詫びるの詫びぬの——貴樣にも似合はず諄いぞ！　で、用あり氣だが、言うて見い。」

石割は白眼がちな目で主人を仰いだ。

「お許しを得まして、夜盗が働き度く存じます。」

「夜盗！」

只三郎は眉と眉の間に竪皺を作つて、石割を睨んだ。

「長州へどこまでも忠義立ての長門屋方に、明夜を期して燒討をかけたく存じます。序でに、不淨財沒收、家人鏖殺の都合にいたす積りでござりますが、この儀お許し願ひます。」

石割は怯めず言つた。

「長州密偵追討の節、同志が死傷いたしたも、露滴のわざとは申せ、長門屋にのがれぬ咎がござります。況して、同夜より露滴行方不明、他行とのことにござりますが、彼奴の行方も長門屋一門拷問いたせば分明いたしませう。或ひは、密偵調べ上げの例の機密書、露滴の手元に渡りませぬとも限らず、空しく拱手の時ではござりますまいと存じまして——」

「ふうむ」

只三郎は頷いた。

「したが、貴公たちに萬手際よく出來るかな？」

他家への押し入りと言ふなら、いかで佐々木がそれを認許しよう。しかし、長州系の廻船問屋で、とりわけ露滴に絡んでこの一黨にしば〳〵負けを取らせた長門屋のことだ。只三郎も、非道なことゝ知りつゝ十分に興味を持たざるを得なかつた。

「及ばずながら、拙者どこまでも責任を負つて事を運びます。とりわけ、長門屋内儀死去後、明夜は一週日、忌中にて家内疲勞の好機でござります。拔かりはござらぬほどに、御認許下さりたう——」

「わしには許すとは申されぬ。」

と、只三郎は冷たい笑ひを浮べた。

「なれど、明夜は、その方はじめ、その方選り出しの十人へ、一夜の外出を許すであらう。」

——生拔きの佐幕家であるがために、勤王志士を斬るに犬を斬るよりも悔いを持たなかつた只三郎は一概に責めることは出來なかつた。今夜の夜盗默許は、彼の『武士』を傷けるには違ひない。だが、すべては時の勢だつた。

「有難うござります。」

石割はいかつげな會釋で引き下つた。

世の成行と、秀れて美しい一人娘を持つたことゝのために、さしも數代連綿と榮えて來た長門屋も、今は怖るべき敵を持つてしまつたのだつた。しかも、呪ひの牙をとぎ澄しつゝある大敵たちが、どのやうに深酷な計畫を進めてゐるとも知らず、かの一家は、今や悲哀と沈鬱とを家中に澱ませて、忌中休業の大戸を下してゐた。

――轟々と、寒夜を吹き荒れる凩が、まるで大波が寄せては退くやうなひゞきを立てゝゐる夜半を、奥の一間には、主人が愛娘のお梅と床を並べてゐた。いつもなら乳母と一緒に自分の居間つゞきに眠るお梅は、母親を失つてから、父の側に寝みたがつてゐる。そして、疲れに疲れて、おのづと眼瞼が合ふまでは、飽かず父と在りし日の母親を偲んで語り更かすのだつた。

有明に丁字がパツと燃つて、そのあとでめつきり薄暗くなつたと思ふと、凩が一しきり強く吹き過ぎた。

「父さま。」

と、娘は白い頬を枕につけ、ふつくらした顎を、紫天鵞絨の夜具の襟にうづめて聲をかける。

「おゝ、まだ眠らなかつたのかな?」

と、父親は沈んだ聲で答へる。

「だつて、風の音がやかましくつて、いくら指で耳を塞いでも駄目なのですもの。」

と、乙女らしく言つたが、

「今頃、あのお方はもう遠くへいらしつたでございませうね?」

「あの方?」

父親が、不意なので訊き返へす。お梅は勿論、露滴を思ひ出してゐたのだ――生命の恩人、操の擁護者、そして、恥づかしいことではあるが、初戀のあの露滴を――

お梅は赧くなつて、口ごもつて――

「まだ京へはおつきなさらぬかしら?」

「あゝ、露滴先生か。」

と、父親は指を折るやうに考へて、

「如何にお急ぎにならうとも、まだお着きにはなるまい。一日十里としても百里――どの邊まで、おいでになつたかなあ――」

「御無事でお着きになればよろしうございますね――」

「それはお前、先生のことだもの――」

と、父親は愛娘の懸念を言ひ消さうとするやうに、

「どんな怖ろしいものが待ち伏せてゐようとも、決してひけを取る方ではない。」

「早く歸つておいでだといゝけれど――」

お梅の聲は囁くやうだ。

「ほんたうにさ。」

と、父親は、娘とは違つた意味で、その人を慕ひ求める。

「あの方が側におゐでになつて下さりさへすれば、どんなものも怖くはない――あの方がお立ちになつてしまつてからは、何となく心細くツてな。したが、あゝやつて――」

と、彼は耳を澄ますやうにして、夜巡りの拍子木のひゞきが、冴えて聞えるのを聴きすましたが、

「店には角力、船頭達、頭手合も泊つてゐて、夜番に怠りもなくしてくれるから、枕を高くして寝られ

るといふものさ。それにしてもこんな亂世には、眠つてゐるうちが極樂とも云ふ外はない。さあ、もう眠らう。」

「父さま、ぢやあ、お寢すみ。」

「お寢すみ。」

父娘はそのまゝ目をつぶつた。床の白梅の鉢がほんのりと匂つて、次の間では鐵瓶がチリ〳〵と鳴つてゐる。立てまはした屛風には土佐繪の官女が小松を曳いてゐて、まづはいづくを見ても和らぎが立ちこめてゐる。この程から苦勞と不安とに堪へず苛まれてゐるこの父娘にも、主人が言ふ通り、極樂の眠りだけはあたへられるかのやうに見えるのだつた。

――だが、それから小半時して、二人の眠りを擾すばかりすさまじく木枯しが嘯ぶいた時だ。

ド、ド、ド、ドツ――

と、荒々しい足音が入りみだれて、ハツとした主人が、襖を蹴つて刎ね起きた時には、普段の用心に、奥と店とを嚴重に劃つた大格子を、ドカリ〳〵と打つ怖ろしい音がするのだつた。

「開けろ！　この格子を開けろ！」

長門屋主人は、サツと蒼褪た。押し込みに相違ない。震へながら娘を搖り起すと、吃驚して目を見開いた顏の上から――

「何か變事が起きたやうだ。默つて――默つて！　聲を出してはなりませぬぞ。」

低く囁いて、

「さあ、そなたは奥の茶室へ逃げなさい。」

お梅は紫縮緬の寢卷小袖のまゝ床に起き直つたが、腰が立たない。

「さあ、躊ふ折ではない。茶室にかくれてしまひなさい。どんなことがあつても聲を立てゝはなりませぬぞ。」

ソツと、障子を開けて、抱へるやうにして父親は娘を暗い廊下へ連れ出す。その突き當りの引き戸の棧をはづして、細い渡り縁へ――そして娘が、ガク〳〵と身を震はせながらも茶室へ逃げ込んだのを見屆けると、再び引ツかへして、引き戸の錠を下してしまつた。

格子の方では、荒つぽい響きが續いてゐる。

「これ、格子戸を開けろ！　叩き壞すぞ！」

主人は立ち竦んだが、店の方が心にかゝつた。あれだけ泊り込んでゐた連中はどうしたのだらう――夜盜の手にもうかゝつてしまつたのだらうか！

「開けろ！　開けぬと煙硝玉を抛り込むぞ！」

四五人の聲だ。

主人はハツとした。

財物を掠められるのはまだしもよい。火が出たら、置き場も倉庫もこの風では燒け亡せる…そこには得意から預りの船荷が充滿してゐる。それを燒いては申しわけないばかりか、延焼の衆に顏向けも出來ない。

主人は娘の夜具蒲團を、グル〳〵とまるめて戸棚へ抛り込むと、

「只今、それへ參りまする。」

と、思ひ切つて答へて、そして格子口へ出て行つた。

店から射して來る八間燈の灯を背に、荒い太格子に向つてゐる黑衣覆面の侍ども、いかめ、取つて、手にはいづれも拔刀を閃めかしてゐる。その中で龕燈をたづさへたのが近づいた主人のパッと燈火をかざした。

「おい！　格子を開けろ！　開けぬと火玉だぞ。」

見れば、煙硝玉の長口火のさきが、もうブス〳〵といぶり始めてゐる。

主人は狽てた。

「はい〳〵、開けますでございます。開けますから、どうぞその火玉をお消し下さいまして――」

「おゝ、殊勝ぢや。開けろ！」

――長門屋もこゝまで來てしまへば、もはや落着かざるを得ない。その上、廻船問屋の主人として、長年荒つぽい人間を使つて來ただけ、商人相當の膽力も持つてゐた。落着いた手つきで、錠を上げて、ガラリと格子戸を開けると――

「おはひりなされまし。」

「ハ、ハ、ハ。さすが主人ぢやな。お互に手荒なことをせずに濟んで結構だ。」

黑衣の一人が笑つて、拔刀を、ズイと主人の前に突き出した。見ると、切尖から赤黑い血が、鍔元へかけてねばッこく塗られてゐる。

主人は眉をしかめた。

「斬ッたよ、刃向つた奴はな。溫順しうしてゐた奴は縛つただけぢや。」

ドサリ〳〵と草鞋で廊下を踏んで、黑裝束は寢間へ押し込んだ。

「まづ、そこに坐れ！」

頭立つたのが、拔身で下を指す。

主人は寢卷の膝を揃へてベタリと坐つて兩手を突いた。

「ハ、ハ、もう小さな用事は濟んだのぢや。手代どもを拷問して、土藏窖の千兩箱を、車に積んで運ばせてしまうた。」

冷々として頭分は皺枯れた聲で言つた。

「辱じけないと禮を言ふのだ。」

主人は低頭したまゝ言葉もない。

「さて、今度の用事はそなたでなければ叶へられぬのぢや。」

「金子を差し出しました上、その上の御用事とは？」

恐る〳〵主人が頭を上げる。

「まづ訊ねるが、先日この店前にて暗殺された長州密偵の死體はいかゞいたした。」

「ぼろん字のお方のことでございますか？　あの亡がらはお上へお屆けの上、いづ方の方か判りませぬ

で、店先での御死去も何かの縁と、假埋めいたしましてござりまする。」

「フム、密偵所持品はいかゞいたした？」

「すべてお檢視役に差し出しました。」

「すべて？」

「ハイ。」

「僞り者！」

だしぬけに、相手は罵つた。

「お上取り上げの所持品は拙者ども一覽したぞ。その中に一品落ちた密書一封。その方いづ方へ隱した。申せ！」

「おゝ、さう申せば――」

と、主人はわざと思ひついたやうに答へるのだつた。

「ぼろん字姿のお方が、息をお引き取りになる時、恰度當家に居合せましたさるお方に、何か書ものをお渡しになつたやうに存じますが――」

――露滴すでに西に去ること遠し――大よそのことを說き明かしても差支はあるまいと思つて、彼は公然と告白したのだ。

「當家に居合したといふのは勿論露滴。」

と、押し込みの侍は呟いて、

「で、露滴、行く先はいづれぢや。」

「何でも、たしかに京まで屆けるとかおつしやつておゐでゝした。」

「フム、では、やつぱり京へ出向いたのだな。」

相手は頷いて、

「よく白狀いたした。ついてはもうひとつ相訊ねる。その方娘お梅はいかゞいたした？　今宵姿が見えぬが――」

主人は肚胸をつかれたやうだつたが、

「はい、娘でござりまするか？　母親が長患の上死にましたので、看病づかれを癒してやらうと、湯治場へ――」

と、言ひかけるのを、頭分は白刃を伸べて主人の頰をピタリと打つた。

「これ、たはけたことを申すまい。店の若者どもが、とうに口を割つてをるぞ。娘はたしかにこの奧に、その方と一緒に寢てゐる筈だ。どこへ逃がした、言へ！」

「これは御無體なおたづね。たしかに娘は湯治場へ――」

「默れ！」と、吼鳴りつけて、左右をかへり見ると、

「それ、方々、お探しなさい。」

夕、タツと、三人ばかりの黑裝束が、あらゆる部屋々々へ踏み込んで行く。

頭らしいのは、白刃を主人の頰に押し當てたまゝ、

「一度見込んだ以上、仕遂げずには措かぬわれ〳〵だ。何も因縁と諦めて、娘を出してしまへ。」
「御無體で――旦那さま――御無體で――」と、主人は今は一生懸命だ。
「黄金も献上いたしましたし、露滴さまのお行方も申し上げました。その上、娘まで――いえ、もう黄金も、寶も、もつと〳〵、いくらでも差し出します。どうぞ娘だけは――あれだけはお助け下さいませ――旦那さま。」
「その頼みはもう遲いのぢや。」
と、押し込みは冷たく答へた。
「最初われ〳〵は、娘の身體を押へて、それをカタに黄金を奪ふつもりであつた。然るに貴様が露滴なぞを力とたのみ、われ〳〵に恥辱を與へたではないか。言はゞ、貴様はわれ〳〵の敵ぢや。どこまでも苦しめてやらねばならぬ。どのやうに泣き喚かうと、娘は確かに盗んで行くぞ。」
「それはあんまり御胴慾――旦那さま、この上とも、どのやうな御用にも立ちますれば、あれだけはお許し下さいまして――」
――主人の額に油汗がダラ〳〵と滲む。彼の耳は、すでに一味が離れの茶室に近づいて行く足音を聽く――ぢつとしてどうしてゐられやう。ひれ伏す、拜む、縋りつく。
頭分は草鞋の足で主人を蹴りつけた。
「くどい！　ぢつとして居れ！　動くと首が飛ぶぞ！」と、途端に――
「あ〻――」と、一聲、泣き叫ぶお梅の聲がして、直ぐに口へ手を當てられたか、悲鳴が消えた。

「お〻！」と、長門屋は黑裝束の足へしがみついた。
「あれは娘！　旦那さま、お助け遊ばして――どうぞ――一生の御恩――」
ぐいと、相手は長門屋を踏みつけた。
「藻搔くな！　靜まつてをれ！」
ダ、ダ、ダと、足音が亂れて、やがて緋色のしごきもしどけなく、ぐたりとしたお梅を抱へた奴を先頭に、手下どもが歸つて來た。
「泣くとうるさいで一當あてました。」
「御苦勞でござる。」
頭分は、必死にじたばたする長門屋を踏みつけたま〻頷いたが、
「しからば、もはやこの家に用事もない。引き上げ申さう。」
タツ！
と足を揚げて、主人を蹴り退けると同時に、白刃を提げた右手が揚がつて、紫電一閃！
「ムツ！」と、呻いて、肩先から大袈裟に斬り下げられた不幸な商人はのけぞツた。
「ふ〻。これで胸がすいた。では、火をかけなされ！」
煙硝玉に火がつけられて、二ツ三ツ投げ出される。と、同時に早足で店先へ――
店先は淺ましい血の海、角力も氣負もすべて一刀に斬り仆されて、三四人、猿轡をはめられたの[illegible]両足をく〻られて呻いてゐる。

[illegible]を守つてゐた五人ばかりの黒裝束が、

「ほう！　たうとうすべてすみましたか——」

「御苦勞であつたな。」

頭分らしいのは、黒裝束を脱ぎ捨てる。袴の股立を下す。

「では、拙者はこの娘を隱れ家まで伴ひます。おの〳〵はお引き取り下さい。」

覆面をはづせば、まがふ方なき石割三平だ。

ガラリとくゞりをあけると、そこには大威張。おツけ晴れて、駕籠が一挺、裸一貫の駕籠舁きが待つてゐる。

石割はお梅に活を入れるなり、一聲を叫ばせもせず猿轡を嵌めると、ドサリ駕籠に投げ入れて垂れを下した。

「申しつけた通り谷中まで——」

駕籠が上る。石割がひたりと駕籠脇に添つて歩き出す。

その後から、覆面の一味は闇へ出た。

寒月すでに落つくさうとして、凩は吹き靜まつた。しいんとした暗闇を、遠くで犬が吠えてゐる。

その闇空を、やがて眞紅に燒き焦して、長門屋の大屋根は一面に炎を吐き始めた。

——業火は闇を血よりも紅く彩どつて燃え狂ふ。

だが、再び氣を失つたお梅を載せた駕籠を守る石割はかへりみようともしない。

「旦那、いつもの傳で、たんまり頂戴出來るでせうな。」

「言はずとものことだ。默つて急げ！」

「だが、全くわッしたちも、こんな時節にやあ旦那がたの仕事を片棒かつぎもしなくつちや、うめえ酒も飮めませんや。」

「ほんとだよ、合棒——こんな亂世が來ると知れば、おいらもやツとうでも憶え込んで置くんだツけ。さうすりやあ旦那の手下に使つて貰へたかも知れなかつた。」

「ふ、ふ、いや、貴公には相變らず御健勝——」

「身ども〻無事で——と、いふやうな具合に肩で風を切つて歩けたものを——」

駕籠屋ども、押し込みの手傳をしてゐながら、それを怖ろしいこと〻も思はぬ容子だ。騷亂は人心を底の底までかき亂して、上も下も、今は一切の認識を失つてゐるのだつた。

石割は呻いた。

「うるさい、默つて行れ！」

——谷中天王寺の、あの憂鬱な塔に近い、とある廢寺に着いたのは、冬の長夜も、どうやら白々明け

——刺すやうな寒さなのに裸蟲どもは、駕籠を下すと鉢卷の手拭で汗を拭いた。

石割は、庫裡の破れ戸を、無遠慮にドン〳〵叩いた。

「寂心！　寂心！」

四聲ばかりかけると、

「どなただな？」と、中年坊主の聲が、鬱陶しげに答へる。

「わしぢや。」

「ほう！　妙な時刻に――」

ガタピシと、立てつけの惡い戸が開く。しよんぼりした行燈が、奥の方でまたゝいてゐる。

「おゝ、もう夜明けか――それにしても今ごろお訪ねとは何御用だ？」

寂心といふと、いかにも行ひ澄ました僧侶らしいが、その實いがぐりの逞しい四十男――あらうことか、寢卷は裏に紅いものがついてゐる女どてらだ。

石割は答へずに、駕籠からお梅を抱へ出した。

「ほう！　これはすばらしい。」

寂心が抱き取つて、家内へ入れる。お梅はまだ正氣もつかず、ぐつたりとして抵ひもしない。

石割は小判を一枚、駕籠屋に投げて、

「金は崩して使へ！　小判なぞ貴さま達がひけらかすと、飛んだことになるぞ！」

「でえ丈夫でござりやす。」

駕籠屋は空駕籠を輕々と走り去つた。

圍爐裏に消えのこつてゐた火へ、寂心が粗朶を足さうとすると、石割は權柄らしく言ひつけた。

「何より先きに、貴樣、そのどてらを脱げ！」

「へえ、これをかね？」

寂心はニタリとして、

「こいつあ小塚原のあいつが、寂心さん、寺の一人ずみは寒からうツて、わざ〱呉れてよこしたのさ。こいつを脱げたああんまりだ。」

「たは言を！　貴樣は衣でもかぶつてをれ、大事のお孃が風邪を引かあ！」

寂心は、しぶ〱女ものの瀧縞のどてらを脱いで、自分は鼠いろの無地布子を引ツかけた。

石割はそれを紫縮緬、寢卷のまゝ、氣を失つて石よりも冷たく冷たお梅にふはりと着せかけると、

「ふむ、この娘もどんな夢を見てゐることか、呼び生けたらさぞ驚くだらう。」

兩手を背後から脇下へまはして、ぐツと水落を押す。

「寂心、水だ。」

缺茶碗のふちで、土氣色の唇を割つて、嚙み締めた白齒の間から、冷たい水を流し込む。お梅は、ぐ、ぐと、微かに咽喉の奥を鳴したが、ものうげに目をあけた。

「娘御！　娘御！」

お梅はぼうとした瞳で、まつすぐ前をみつめたまゝ、しばし身動ぎもしなかつた。

「娘御！　お氣がつかれたか！」

石割が聲をかける。

その聲で、初めて我れに返つたが、お梅は、あたりを見まはして、兩袖で顔をかくした。

「恐れることはない。そなたが惡人どもにかどはかされる道すがらを、拙者が蹴散らして救つて取らせたのだ――な、泣くことも怖れることもない。一體、そなたはどこの娘御だ？」

石割三平、あからめもせずこんな出鱈目を囁くのだつた。

淫獸魔獸相ひ詐むく事

附り　美女毒に醉ふ事

「お氣がつかれたかな？　まづは重疊。」

と、おツかぶせるやうに、また相手の氣持を出來るだけ和らげ落着かせようとして、石割はお梅の耳元に、口ぜはしなく囁きつゞける。

「こんな荒れ果てた寺院に、だしぬけに連れてまゐられて、さぞ吃驚なされたであらうが、只今も申す通り、怪しい奴原に、どこへかかどはかされてまゐられる容子ゆゑ、拙者、身命をなげ打つてこれまで助け入れたのぢや。この寺は人里はなれてをれど、これなる和尙は世外無慾の智識ぢや。まづ、ゆるりと御休息なさい。その上で、親許までお送り申すでござらう――」

お梅は、たゞ瞳を瞠るばかり――頭の中の大渦卷がやつと靜まつて來はしたが、しかし、ハツキリと一切を追憶することもまだ出來ぬ。

石割は今のところ、お梅に騷ぎ出されるのが何より怖いのだ。と、いふのは、彼は今夜夜盜頭としての成功の褒美に、是非この世にもすぐれて美しく淨らかな處女をわが者としたい。ではあるが、一方では掠め取つた大金を佐々木只三郎の前で、一同に分配といふ場合、この方もやつぱり自分がどこまでも筆がしらでなければならぬ。色慾二道かけて、目下の彼の心は忙がはしい。この場でお梅を相手にいつまでもとやかう手間取つてはゐられないゆゑ、濱町河岸の方をきまりをつけて來るまで、この處女をばソツとこゝへ預けて置く外はない。この娘に騷ぎ立てられては迷惑至極だ。

間者、密偵が本職の石割三平ゆゑ、懷中には常人の手に入らない祕藥毒藥のたぐひをたやすことではない。彼は印籠をはづすと、黃金紙につゝまれた、小粒の丸藥を取り出して懷紙へ載せ、缺茶碗の水を添へて、

「さあ、娘御、これをお飮みなさい。これは拙者祕藏の合藥ぢや。ぐツと飮むと直ぐに神氣が沈まる。毛頭御懸念はない。さあ、飮みなさい。」

――ぼうとした頭の奧でも、お梅はこの男が自分の救ひ主だといふことだけを吹き込まれて感じてゐる。この男の言ふことに間違ひがない氣がする。そこで躊はず、土氣色の、萎れた花びらのやうな唇を開けて、まつ白な齒を見せて、すゝめられた丸藥を呑んでしまつた。

「の、だん〴〵よい氣持になつて來るであらうが――の、そら、身內がほか〴〵と溫まつてまゐつたであらうが――おゝ、おゝ、頰にも血の色が潮してまゐつた。神藥といふものゝ靈驗は爭はれぬものであるな――おい、住持、枕をかしなさい。少し橫にならせてやらうほどに――」

寂心が持つて來た木枕に、新しい紙を當てゝ、そツと娘を臥かして、例の女ものゝどてらをかけてや

つて、

「目をつぶつておゐでなさい。直きに氣持が良うなる。さうなつた上で、拙者が親御の許までお送りいたすほどに、安心して、ゆつくりお休みなさい。」

石割の、さも柔しげな言葉を耳にしながら、お梅は言はれるまゝに目をふさいだ。

――それにしても、私はどうしてこんなところへ來てしまつたのだらう！　昨夜は凩のひどい晩であつたが――それから、父さまと一緒に奥へ寢て――梅の花の匂ひが大層よいのを憶えてゐる――だが何か急に怖ろしいことが――さうだ！　怖い人達が押して來たといふので、どこかへ逃げて行つて――

ハッとして、彼女は何か叫ばうとした。

――父さまはどうなされたであらう！　もしや父さまは！

だが、彼女はもう口を利くことも、起き上ることも、目をあけることさへも出來なかつた。その時には後頭部の方から、言ひ表はし難い、混沌とした、生ぬるい無自覺が潛み入つて來た。急に一度蘇つた想念は中斷され、心は痲痺しつくした。想ふことも考へることも出來なくなつて、うつとりと忘我の境に入つてしまつた。

「ふゝ、紅毛藥はよう利くのう。これは原田半齋の祕法ぢや。」

と、石割は嗤いて、お梅の寢顏に恍惚と見入つてゐる寂心を眺めて、

「は、は、貴樣には大毒な女の顏なぞにうつゝをぬかしてゐずと、まあ酒の殘りでも呑ませるものだ。夜寒朝寒を犯してまゐつたので、臓の底まで冷えてしまうたよ。」

白丁の底に、まだ何程か殘つてゐた酒を、どくり〳〵と茶碗につがせて、石割はきゆうと咽喉を鳴らして二三杯――ぽツと、やつと目ぶちを染まして太息をついた。

「一體、昨夜はどんな仕儀だつたのだね？」

と、寂心は好奇心をあり〳〵と見せて訊ねた。

「このおむすめは、一體どこの祕藏ッ子かね？」

「さる大商人の愛娘ぢや。例に依つて人質に取つて、その内に現金と代へようといふ寸法――かくし場所にこまつて貴公をわづらはした次第さ。」

と、石割は程よく言ひ反した。

「まあ、大事にいたはつて置いてやるがよい。その代り、現金が入つたら、貴公にもたんまりわけ前はつかはさう。」

「そりやあ何より辱けないが――あゝ、世も末法だなあ。こんな美しい娘が、お前さん達餓虎よりも怖ろしいものゝ餌食になつて苦しむのを、誰一人咎めるものもないなどゝは――」

「は、は、は、これは笑はせるぞ。」と、石割は一笑した。

「佛門に生れながら、邪淫、偸盜――その外の戒といふ戒を破りつくし、傘一本で寺を追はれ、賭場といふ賭場にごろついた果てが、亂世を幸にこの荒れ寺にもぐり込んで、やつとお上の目を忍ぶ貴公から、そんな名文句を聽かうとは思はなんだよ。」

「イヤ〳〵、さうも一概には言はれませぬぞ。」

と、寂心は不平さうに、

「拙僧どもが何か罪とがを犯せば、直ぐに寺法にかけられた上、宿無しとなつて江湖をさまよはねばならぬのぢや。そなた達武家と來ては、あつぱれ公儀御奉公人の大面をして、紋服を着し、大刀を横たへ、晝間は都大路もせましとばかりのさばりながら、夜陰になればいかなる惡黨どもよりもあざとい藝を見せるのだ。はたで見てゐても空怖ろしい。」

「はてさて、今日に限つて大分氣が弱いな。さては負け込んだ上、小塚原の妓にでも振られたかの？」

——石割は茶碗酒に頬を赤くして、大刀を取つて立ち上つた。

「では、拙者はこれから濱町河岸に立ち戻り、夕方になつたら娘を連れに參る。それまでは、貴公を信用してこの娘をあづけるにより、かまへて間違ひのないやうにしてほしい。その藥は午後四時ごろまで効目があらう。そのあとは、よろしく介抱を頼みますぞ。」

「畏まつた。拙僧が一度引きうけたからには安心なさいよ。」

寂心はしきりに頷く。

しかし、石割は何となくあとが氣にかゝるやうに、下へ下りてからも振り返つて、

「寂心、若し、その娘に不了見を起すと、貴公の首はないと思へ！　江戸、奥州、京都に逃げようとも佐々木組の目は光つてゐるぞ。」

「大丈夫でございますよ。石割さんも、今日は馬鹿に疑げえ深けえね。は、は、は。」

「では、くれ／＼も頼んだぞ。」

石割は、ふところ手、さも暢氣らしい落し差しで、のそり／＼と、はや、朝霧の底にほの紅く曙の燈きのちら／＼する中を、立ち去るのであつた。

——寂心はお梅の枕邊に大胡坐、毛脛をモゾ／＼と撫擦りながら、昏睡に陷つて、一層無邪氣に、一層愛らしく見える寢顔に、またしても見入りつゞける。

——美しいもんだ、いとほしげなもんだ、寢卷にちげえねえが、染色のいゝ縮緬、てえしたもんだ。それにしてもこの縮緬寢卷になりてえものだな。この和らかい、まつ白な肌に卷きついたら、どんなにいゝもんだろ！

そんなことを呟きつゝ、白丁徳利を空けてしまふと、

——どりや、今日は家中を大掃除と出かけやうか。あんまり塵芥を溜めてゐて、大事なお客樣に嫌はれてはならねえから——さて、どつこいしよ。

尻をもたげると、それでもお梅の枕元に剝げちよろげた小屛風を立てゝから、雨戸を繰り、箒木、はたきを持ち出した。

荒つぽい掃除が濟むと、圍爐裏に炎が快く燃えたち、自在の鐵瓶に湯氣が吹き、そしてこの荒寺へも、朝日は朗かに射し入るのだつた。

寂心坊主は庫裏でゴト／＼と朝飯の支度だ。味噌も、擂れたし、大根も刻んだ。釜も吹いた。

——石割の奴あ、藥は午すぎまで持つと言つたが、どうにかして起こしてやつて、朝飯が食はしてやりてえもんだ——こんなお娘とお取膳と來ては、考へただけでもたまらねえよ。

寂心は八寸膳へ、朝餉の支度をそろへて、とりわけて、とつて置きの鐵火味噌も添へて爐ばたへ出してから、そろり〳〵とお梅の側へ近づいた。

疎い毛が指の付根に淺間しく生えた手を伸べて、ぐつたりと眠る娘の肩に輕く觸れる。

―あゝ、滅法な和らかさだ！

目を細めたが、柄にもなく優しい聲で、

「お娘御や！　お娘御や！」

そつと搖すつても、相手は眉もうごかさぬ。

「これ！　お起きなされ。朝飯が出來ましたぞ―さ、起きてお上り。お娘御や。朝飯が出來ましたぞ。」

だが、お梅は相變らず眠り入つてゐる。

―ほう、こいつ、死んだんぢやあるめえな。死んだのなら寢息も立てめえ。藥の効目といふものはやつぱし爭はれねえもんだ。

寂心はよんどころなげに、痲醉する美しい犧牲をはなれて、一人で本意のない朝飯をすました。もとより、本堂に阿彌陀さまさへいまさぬ古寺、晝でも人を怖れぬ鼠が、食ひ荒して膳の上に飛びついて來たのを追ひもせず、寂心は爐邊に寢そべつて、ぷかり〳〵と惡臭い莨の煙を吐きつゞける。

やがて、彼の手から眞鍮煙管がバタリと落ちた。その時、不思議にも、破戒坊主の眉根に、ある苦悶のやうな影がたゞよひ始めてゐたのである。

―だが、こいつあ、考へもんだ！

のそ〳〵と、娘の側に匐ひ寄つて、息がかゝるほど顏を擦り寄せて、いゝ匂ひに鼻を蠢かしながらも、なほ彼は妙に顏を硬ばらせてゐる。

―こいつあ、いろ〳〵と考へて見なけりやあならねえ。

寂心坊主は、石割が去つて囚はれの美女とたつた二人殘されてから、そも〳〵の最初は當然この坊主らしい情慾に襲はれつゞけてゐた。相手は藥に痲醉して、聲を揚げることは愚か、手も足も動かせぬ少女―まして、こゝは人煙遠い谷中の杜中の一軒寺だ。そこでこの男らしく、あらぬ欲望に燃えつゞけてゐたのだつたが、腹がくちくなつて、午前の光りを浴びて、そして幾分の理性を恢復すると、色氣が慾氣に變つて來た。

―もしうつかり手を出して、何だつまらぬしくじりを仕出かすよりも、ちよいとこの間に―この娘が睡つてゐる間に、女衒の吉のところへ駈けつけて、出來るだけ高く買はせるが上分別かも知れねえ―まづ八百兩、具合よく行けば千兩は鈌けッこなしの上玉、吉の奴がいかに足元を見たところが、俺の手へも三百兩はへえるだらう。それを摑んで逃げてしまへば、二三年は樂が出來る。なあに、石割のくされ眼玉なぞに、見つかるやうなぶまなことがあるもんか！

―色と慾とが相戰つたために生じた、眉間の苦惱の影は去つた。彼はもうたんまりと摑んでしまつたもの〻やうに晴々とした。が、やがて、また―

―それとも、お娘を引き起して、町ところを訊ねた上、親許へ送りかへしてやらうか―この容子で見るとよつぽど豪家に相違ねえから、お禮もふんだんに―いゝや、そいつあ、いけねえ―

寂心は口に出して獨語を言つて、かぶりを掉つた。

—どんな豪家だつて、こんな姿の俺を見りやあ、禮は十兩が關の山—その上、もしこつちの身許でもばれたなら—あゝ、やばい、やばい。やつぱり吉の野郎の手を借りて、賣りこかすのが一番だ。

彼はもう一度じつくりとお梅の寢姿を眺めた。今度はさつきのとろ〳〵とした眼付ではなく、賣物の値ぶみをする老巧な商人らしい目色になつた。そして、突然ムクと刎ね起きる。

—さうときまりやあ、ぢつとしてはゐられねえ！　この子の眠りが醒めぬうち、淺草の吉を迎ひに行つて來なきあ—留守の間に石割がけえつて來たらそれまでだぞ！

寂心はもとより惡黨坊主だ。茶氣があつて、どこか法界坊めいてゐるが、これでも二足で立つて歩くもの〻生命さへ奪つたことのある惡漢だ。さうと決心すると、ピタ〳〵と雨戸を閉して、外から鍵を掛けて、冷飯草履の歩みも飛ぶやうに、目當ての方角を差して駈け出した。

—たつた一人、古寺の暗闇の中に取り殘されて、美しく、哀れなるお梅は眠りつゞける。この昏睡が、いつまでも醒めずば彼女はせめて幸福だらう！　この昏睡から醒めた時、より暗い前途が彼女を待つのではあるまいか！　またこの孤獨がいつまでもみだされずば、彼女はせめて平和であらう！　この孤獨から救はれた時、より苦痛な周圍が彼女を迎へるのではあるまいか！

—とまれ、可憐なる犧牲は、現在いかなる怖るべき境涯に置かれてゐるかをも知らずに、深く〳〵睡りつゞける。晝を荒れる鼠が、とき〴〵彼女の白い顏を覗く。しかし、小さき獸は目をくる〳〵と丸くして、餘りに思ひがけなく餘りに美くしいものを見て吃驚したやうに駈け去つてしまつた。

目明し源七、捕物の途中美女救助のこと

—古寺から、冷飯草履の寂心坊主が走り出して、まだ小半晌とも經たぬ頃だつた。

谷中の塔の方から、森々たる杜道を、八方に目をくばるやうにして遣つて來る三人の男がゐる。先に立つのは四十がらみ、結城木綿の着物に同じ羽織、意氣な髷に結つて、花色甲斐絹のパッチ、紺足袋に草履穿き、あとに續くのはいづれも二十三四の、きりッとした着流しの若い者—ちよいと見たところでは商賣柄がわからないが、ぢつと矚たら、四十男の羽織の下には朱房十手が、また若い者のふところには、黑房十手がかくされてゐることを認識するだらう—これは追ひ込みものがあつて、今朝からこのあたりに手を着けてゐる下谷御徒士町の目明し源七と、その子分どもだつた。

「親分、それにしても不思議ぢやあござんせんか。」

と、半太といふ若者が言つた。

「たしかに天王寺前までは足取りが付いてゐるのに、それから煙のやうに消えてゐるといふなあ—」

「まあ、せかずに待てといふことよ。」と、源七は鋭い目に微笑を見せた。

「谷中の道は八里と言はあ。どこへ行つてもお寺か墓地か、さもなけりやあ森か野ツ原だ。久しぶりで小うるせい町中をはなれて、枯野見をしに來たと思やい〻ぢやあねえか。」

「枯野見だツて？」

と、金太郎といふのが、
「そんな茶氣は、まだあツし等あ持つてをりませんぜ。」
——その當時は、風流氣のある老人や若隱居が、雪見、月見、花見と一緒に、枯野見といふことを流行らせてゐた。一瓢をたづさへた隱居が、水洟をすゝつて、何が何して枯野かな——なぞとやつてゐるかと思ふと、家督は弟に讓つたのら息子が、藝者末社の大一座で、向島のとある窯あたりで、しづかな冬野を淺間しいどんちやん騷ぎで汚してゐるのも見うけられた——いづれも枯野見には相違なかつた。
それは兎に角、一行は森を出はづれて、黃に朽ちた茅がやの野に出た。
美しい冬陽が、黃にかゞやいてゐる野中に一宇の傾き荒んだ廢寺らしいのが見られる。
源七親分はちよいとその方へ目を遣つた。
「ほう、ありやあ無住だな？」
「ちと、臭いね。」
と、半太が呟いた。
「うむ、何となく妖氣が屋の棟から、この晝日中立ちのぼつてゐるといふ奴さ。」
と、源七は言つて、
「ちよいと御本尊へお詣りして行かうか。」
——三人は曉方御徒士町の小金貸の雨戸を外して、殺されてもだれも泣くはずのない七十ぢゞいを殺害した上、相當の黃金を奪つて逃げた盜賊を跟けてゐるのだつた。三人は突然腰を屈めた。夜かせぎ稼

業が、あの古寺の緣の下でゞも眠りをむさぼつてゐるとすれば、接近して包圍するまでは相手に氣づかれてはならぬ。枯草原の中を、それゆゑ彼等は茅がやに身をひそめてその方へと忍び寄る外はなかつた。
「へん、とんと野良犬だね。まツ晝間地面を匐ひまはる恰好は——」
「あんな強慾ぢゞいのためにこんな思ひをするのも前世の約束か。」
若者同志の囁きを、源七は制した。
「うるせえ！　默つて働け！」
「へえ。」
大人しくなつて、三人はだん〳〵古寺の方へ近づいて行く。
——その古寺といふのが、現にお梅が監禁され、麻醉させられて、果しもないやうに眠りに落ちてゐる、あの怖るべき廢寺に外ならなかつた。
がさ〳〵、がさ〳〵——
なるべく葉ずれのひゞきも立てないやうにして、三人は草原を分けつくした。
いよ〳〵境内になる。
草叢の小かげから、半太が目だけ出してぢつと覗ふ。そして、さも失望したやうに地聲で言つた。
「親分、駄目ですぜ。」
「うむ。別條もねえやうだな。」
源七も全身を現はして、境内を見まはしたが、ふツと眉をしかめた。

「こいつあをかしいぜ。」
「へえ？」
「見ろ、雨戸がすつかり閉つてゐるのに、何となく火氣があるぢやあねえか？」
「だつて、この寺あ無住だ――」
と、金太郎が呟くのを押へて、
「半太。雨戸をこじあけて見ろ。なあにかまやしねえツてことよ。寺社奉行からお許しが出てゐる手入れだ。だしぬけに雨戸をぶち開けて見ろ。」
三人は軒下へ近づく。半太は雨戸を開ける前に、まづ隙間から覗き込んだが、
「なるほど、親分の感にやあ怖れ入つた。庫裡の圍爐裏の中に火の氣がありやす。」
――半太は十手の鐺を使つてたちまち雨戸をこじ開ける。二人は一瞬間内部に鋭い目を投げたが、
「こりやあどうだ！ 綺麗な娘が寢てゐるぜ！」
と、金太郎は啞然として叫ぶのだつた。

長門屋むすめ救はれの事
附り 源七石割を見破る事

――源七目明しはじめ、半太、金太郎、二人の子分は、古寺の闇の中に昏睡するお梅を一生懸命介抱

した。いくら呼び醒さうとしても正氣にならないので、半太は愛想が盡きたやうに、
「親分、この娘はどうしたんでせう？ 睡り病にでもかゝつてゐるのですかね？」
「馬鹿奴！」と、源七は娘の額に濡れ手拭をのせて冷やしてやりながら、
「わかつてゐるぢやあねえか、この娘は昨夜どこからかかどはかされて來て、何か魔藥を飲まされて睡つてゐるのよ。」
「どうしてそれがわかりますかい？」
「半、手前も御用をうけたまはる渡世ぢやあねえか？ この着付を見ろ――朧し染の友染縮緬の寢卷を着たまゝだ。上に着せられてゐる女どてらは、こんなに汚れ切つた茜裏で、まあ宿場女郎の自前ものだ。こいつは惡黨奴が、手前の情女のを引ツぺがして寒さ防ぎに着せたものに違えねえ。
「して見ると、かどはかしの惡黨は、ついそこらにうろついてゐるね？ 俺らを見て逃げやあがつたのかな！」と、金太郎が呟く。
「いゝや。」と、源七は頭を掉つて、
「そんなわけはねえ。圍爐裏の火に灰がかけてあるだらう。何か急用が出來て外へ出かけるので、お娘に藥を飲ませて寢かしつけたんだ。」
「ぢやあ、ぢきにそいつが歸つて來るわけだね？」
と、半太はきよろ〳〵して、
「それぢやあ早くこの娘に正氣をつけて連れ出してしまはなけりやあ――」

「さうだ。その前にどうにかして醒ましてやりてえ――いろ〳〵調べて置きてえと思ふんだが――」

と、源七は言つたが、思ひついたやうに、

「半、金、ぢやあかうしてくれ。」

「どうするんでげす？」

「二人でこの娘を運び出して、そこの凌天院までかついで行つてくれ。凌天院のお手代さまは、手前ツちも存知だらう、親切深いお方だ。あのお方にお願ひ申して、醫者を呼んで手當をして頂きねえ。身柄をようくおたのみ申したら、手前たちは引ッけえして來るんだ。」

「ぢやあ、この娘を睡つたまゝかついで行くんだね？ この眞晝間――」と、半太がくすぐつたさうに言つた。

「眞晝間だつて、谷中の杜中ぢやあねえか――氣まりが悪いも糞もあるもんか――」

「さうですとも、親分、でいち、こんな美しいお娘御だ。」

と、金太郎が――

「ふん、こいつあ、親分、いつだつてこんなに女好きなんですぜ――ぢやあ、金、貴様背負つて行け。」

「いゝとも――可哀想な娘と見りやあ、默つてはゐられねえ兄さんなんだ。」と、金太郎が胸を叩いて見せる。

「ふゝ、ふざけてゐやがらあ――」

と、源七も笑つて、

「ぢやあ、金、そつちを向け。おぶせてやるから――」

源七は、まだ深い昏睡から醒めないお梅の身體を、金太郎の背中に捕繩でくゝりつけた。

「さあ、行け！」

「親分は？」

「俺はこゝに張り込んでゐる。もう金貸殺しは今日は諦めた。ことに依ると、こツちの魚の方が大えかもしれねえからな。」

「よし、それなら親分、いそいで行つて來やせう。」

と、半太は勇んで、

「金、さあ、駈けろ！」

「駈けろツたつて、だつて死人のやうにぐんにやりしてゐるんで、この娘はなか〳〵重たいぜ。」

「役得ぢやあねえか―― 親分、往つて來ます。」

「うん、頼んだぜ。」

お梅を背負つた金太郎は、半太に引ツ張られるやうにして、例の茅がやの原ツぱを急ぎ出した。

あとでは、物馴れた源七、再び元の通りに雨戸を閉めて、眞暗な中に爐端に大胡坐で、ゆつくりと身體を暖めながら、惡黨づれの戻り遲しと待ち構へるのだつた。

ちよんの間の留守に、こんなことが起つてゐやうとは、もとより思ひもかけぬ寂心坊主は、一足飛び

に女衒の吉の許へ駈けつけて、時刻を爭ふので駕籠をやとひ、飛ぶが如くに急がせて、この古寺に戻つて來ようとした。

と、その駕籠が、谷中の杜中の十字路まで差しかゝると、垂れを開けて首を突き出して前の方を眺めてゐた寂心坊主が、思はず驚きの聲を揚げた。

「畜生！　人を見そくなひやがつて、人の持物を盜み出して行きやあがる。駕籠を止めろ！　追ツ駈けて行つて、取り戻してやるから――」

寂心が駕籠を飛び下りて駈け出さうとするので、女衒の吉は吃驚して、

「どうしたんだ？　何が始まつたんだ？」

「何も糞も！　見ねえ！　あそこへ話の代物を背負つてゆく奴がゐるんだ。そら、見ねえ――今、あの路を曲らうとしてゐやがる――」

吉と呼ばれた、瘦せッこけた奴が小手をかざして、急に失望の叫びを洩らした。

「いけねえ〱――俺あ歸るぜ、坊さん。」

「待てツてことよ。あんな青二才の一人や二人、叩き殺して取り戻すから――」

と、尻をからげる寂心を、吉は荒つぽく窘なめた。

「相手が惡いぜ、氣をつけて見ろ。十手が腰に光つてゐるぢやあねえか――ありやあ御徒士町の源七の子分だ。もう手前の寺にやあすつかり網が張つてあるにちげえねえ。ウツかり飛び込むと、とんだことになるんだつた――手前のおかげで捲き添ひを喰つて、佃島といふところを、まあやツと受けられた――俺あもう歸るぜ。駕籠屋さん、急いで歸してくれ。」

「合點だ。」と、駕籠舁は棒はなをぐるりと廻す。

「おい――不人情な！　寺へ手がへえツたとすりやあ、俺だつてノメ〱縛られに歸れるかえ？　俺もお前と一緒に逃げるよ。吉つあん！　連れてツてくれ――」

下谷で名高い源七の子分達が相手だと聽いて、寂心坊主は泡を喰つて弱音を吹いた。

「ふん、意氣地のねえ惡黨坊主だな。ぢやあ、兎に角一緒に自家まで來るがいゝ。」

寂心坊主は、駕籠に搖られながら、がつかりしたやうに吐息をついた。

「あんな荒れ果てた古寺でも、暢氣に雨露をしのぐところをやつと見つけたのに、石割の野郎のおかげで！　畜生、また當分居候をしなけりやあならねえのか――」

――淩天院の手代僧に、訝かしい境涯の少女の身を賴むと、忠實な二人の子分は急いで源七のゐる古寺に歸つて來た。

たしかに此所が惡漢の巣窟で、必ず獲物があると見きはめをつけた源七は、ぐつと腰を落着けてしまつた。

「金、臺所を覗いて見ろ。何だか腹が空いて來たぢやあねえか――茶漬を一杯、サラ〱と搔つこみてえ。」

金太郎が立つて行つて、今朝寂心坊主が、美しいお客に食べさせようと、一生懸命になつて炊き上げ

た飯が、まだ八分目も殘つてゐる櫃やら、香のものやら、鐵火味噌やら、その外手當り放題な食器やらを持つて來る。

「湯もよく沸いてゐるぜ。さあ、半太、茶を煎れろ。」

源七は悠々と、茶漬飯をやり出した。

「手前ッちも食つて置け、腹が減つてちやあ、いくさは出來ねえものだ。」

「親分、まさかこの飯にやあ毒はへえつてゐやすめえね？」

と、金太郎が、茶碗をかゝへて、ちよいと眉をしかめる。

「まあ食つて見ろ、ぬすッとメ！　無住寺なんかにすッこんでゐるにしちやあ、そりやあ結構な米を食つてやがるぜ。」

——三人は、雨戸を洩れる日光をたよりに、十分たらふく腹を充たした。

「さあ來い、畜生、熊坂だらうが高阪だらうが、どんな大賊でも出て來て見ろ。御徒士町の金ちやんの十手を喰らつて往生させてやるから——」

「は、は、は。さう言つてゐるうちに、大百甕をかぶつた奴が薙刀を持つて出て來るかも知れねえぜ。」

——一晌、いつか二晌——

今の時間にすれば三時すぎまで、三人はぢつと待ちあぐんでゐたが、なか〳〵それらしいものは足音さへ聞えなかつた。

「親分、氣配を利いて逃げやがつたんぢやありますめえか？」

「あんまり遲いなあ。」と、金太郎も半太も、いくらかくたびれて來たやうに言つた。

「まあ待て、俺の見込みがはづれたら、手前達に手を突かあ。」

源七は、ひどく生眞面目な表情で、聲さへ低めて言つた。

——彼は必ず怪漢の歸來を信じる。そしてその時刻が、今やまさに迫つて來たのを直覺する——

二人の子分はゴクリと唾を呑んで、默り込んで部署についた。

源七は圍爐裏に向ひ、二人の子分は雨戸にぴつたりと寄り添つて、もう無駄口も叩かず、全身を神經にして待ちかまへる。

しかし、冬の日は暮れ易く、いつか裏口の戸の隙を洩れる光も紅くなつた。おツつけたそがれ始めるだらう。

今になつても、逃げ失せた寂心坊主は兎に角、石割が姿を見せないのは、惡僧の注進を得て警戒し始めたのであらうか？　いゝえ、寂心はそれを石割に告げることは出來ぬ。告げたら、自分の內々の惡だくみを自白してしまふわけだ——

三人は、そんな祕情については何も知らなかつた。だが、源七は自分の直覺を信じる、また二人の子分は親分の人にすぐれた認識眼探偵眼を信じる——

だが、それからまた半晌も經つて、陽かげもすつかり淡びてしまつたころ、ふと、源七は圍爐裡ばたで立膝になつた。

「香ふぞ！」

三人は十手を握り締め、源七の左の手に捕縄の輪が潜される。

――最初、源七が呟いた時には、まだ殆んど何の物の氣配も感じられなかつた。が、次の刹那々々ヒタ、ヒタ、ヒタと、赭土をしづかに踏んで來る雪駄の響が近づいて來るのだつた。

「用心しろ。兩刀武士だぜ！」

足音で聽き分けて、源七が囁く。

足音は庫裡のつい側まで來て立ち止つた。

「や、戸が閉つてゐる？」

多分、そんなことを自分に言つたらしい呟きがあり〱聞えた。

「寂心！　坊主！」

荒々しい、少し焦れ込んだやうな男の聲だ。

源七は、ゴトリとわざと音を立てた。

「坊主、ゐるのか！　今から戸なぞ閉めて――」

「へえ、今、開けますで――」

半太が、作り聲をして答へて雨戸に手をかける。

「早く開けろ！」

相手はもう緣へ足を踏みかけた。

ガラリ！

と、雨戸が一枚開かれると、タッと飛び出した金太郎が、十手をひらめかして打突る。

「御用だ！」

迫り近づいた怪漢――いふまでもなく石割はさすがにハツとしたが、サツと身を翻したので、金太郎は緣から地面へころげ落ちる。

石割も、瞬時に地上へ下り立つて、鯉口をプツリと切つた。

「無禮者！」

半太が、飛び出しざまに打つてかゝるのを、石割は刀も拔かず足を揚げて蹴仆した。

「何奴だ！　人違ひをいたすな！」

半太も金太郎も、出現した敵が、骨柄なり着衣なり、思ひもかけず堂々たる侍であるのに内心吃驚してゐた。しかし、親分から命令を受けてゐる以上、命を投げ出しても捕らないわけにはいかない。ましてふたり二人とも、江戸の目明しの中で聞えてゐる源七の双の腕ともたのまれるにふさはしい十手の上手な上に、目から鼻へ拔ける氣轉者だつた。

「御用だ！」

金太郎が、うるさがらせに飛びかゝる風を見せると、半太の十手が相手の顳顬をねらつてひらめく。

「不淨役人、拙者怪しいものでないと申すにしツこくいたせば、もはや容捨はいたさぬぞ。」

石割の方では、さては邪魔が入つて、長門屋の娘はもう助け出されてしまつたと知ると、こんなところで目明しなぞを相手に斬るの殺すのと、つまらぬわざくれを試みるのは厭だつた。こんな手合を手に

かけると、事が面倒になつて、後々まで害を殘す。遂にはあつたら武士の身體を、置きどころもなくするやうなことにもなる――

――此奴等はダニだ！　此奴等に付かれると、これからがやり切れない。

そこで、なるべく刀を拔かずに身を隱してしまはうと努めるのだつた。

しかし、左右から半太、金太郎が、

「御用！」

「御用！」と、飛びついて來るのを、一度に當て倒さうと拳を擧げた刹那――

――ビュウ！

と、音を立てゝ、もう何者も居まいと思つてゐた庫裡の暗がりから一條の繩が伸びて來て、ぐつと首に捲きつくのを感じた。

――繩はぐつと締まる。

――タツ！

到頭氷刃は鞘走しつた。そして石割の首を締めつけて、ピーンと張つてゐた繩が、パツと切れる！

と、思ふと、石割の身體は鞠のやうに背後にケシ飛んだが、そのまゝ茅が谷の原中へ走り込む。

「逃げるか！」

と、追ひかけやうとする半太、金太郎を、源七は呼び止めた。

「追ふな！　追つたつて駄目だ！」

二人は源七の聲に、茫然として足を止めた。

「どうして追はないんだ！」

金太郎は不平さうに、さては相手の手なみに怖れたのかと蔑みさへもするやうに、源七の顏を眺めた。

源七は切られた捕繩をたぐりながら――

「駄目だ、彼奴は正面から打突つて、俺達に捕れる奴ぢやあねえ――」

「へえ？　親分、あいつを御存知なんですか？」

と、半太が汗を拭いて訊く。

「うん、ちいつとばかり。」

と、源七は頷いて、

「一二度顏を見たことのある奴さ。向うは知るめえが、もしや見憶えがあつては。後の仕事の邪魔になると思つて、俺あわざと顏を出さなかつたのだ。

「ふうむ、ぢやあ、彼奴はこのまゝ見遁してしまふのかね？」と、金太郎はまだ不平さうだ。

「何を！」と、源七は歩き出しながら、

「一度狙つた禽を差し殘すやうな禽差しと思ふかえ！」

源七は、二人の子分とも〴〵、お梅を預けてある凌天院へ行つた。

凌天院には、お梅はもう居なかつた。お手代僧は、娘は氣がつくと、一部始終を泣いて物語つたので、しかるべき供をつけて、油堀長門屋まで戻してつかはしたと說明した。

源七は唇を噛んだ。

「へえ、さうでございましたか？　長門屋の娘で？　ぢやあ昨夜の長門屋の火事も彼奴等の仕事だな！」

商賣柄、彼は昨夜深更名高い長門屋に押込みがあつて、人あまた斬られた上、財物を盗み去られ、戻りがけの火玉を投げたのが原因で、遂に全燒したといふ話だけは聽いてゐた。

——凌天院手代僧の親切なはからひに禮を述べて、源七は我家に歸つた。そして上框で、出迎へた女房に言つた。

「お兼、八丁堀の旦那から頂いた脇差を出してくれ、やい、若い者、足拵へを持つて來い。」

手甲、脚絆、菅笠から合羽まで手早くつけて、布緒の草鞋を踏締めると、

「俺アことに寄ると遠旅だ。後をみんなで氣をつけてくれ。旦那へは、後から飛脚を出すかも知れねえが、みんなからもよろしく申し上げて置いてくんな。」

「お前さん。」と、眉あとの青い、その昔は品川で板頭を張つてゐたといふお兼が、立て膝で、

「一體、急に何處へ行くのさ？」

「御用筋だ。何處へ飛ぶか分らねえ。それとも今夜にも歸つて來るか分らねえ。」

——そして、もう源七の姿は、黄昏の町の人ごみの中へと消え去つてしまつた。

「ほんたうに內の人と來たら、いつも何が何だか見當もつきやあしない。」

と、お兼は呟いて、

「半さん、金さん、こりやあどうしたわけなんだね？」

「さあ。」と、半太は答へた。

「ちよいと大物に心當りが出來たんでせうよ。親分のことだ、いづれまた江戸中にひゞくやうな捕ものをなさるに違えござんせんよ。」

——くどい話は誰もしなかつた。お兼も目明しの女房だつた。

それツきり、彼女はもう愚痴も言はずに、子分たちの夕餉を支度するために、勝手元でいそがはしく立ち働きはじめた。

霙する箱根路眺めの事

附り　源七石割に迫る事

——源七目明しは、谷中古寺で捕りそこねた怪漢が、濱町河岸の部下で、密偵として名高い石割三平であることを、あの時ちやんと見極めてしまつてゐた。どうして彼が石割を知つてゐたかといふのに、彼は小野派の劍客金澤勇之助といふ老人に、宮本流十手術の稽古を受けたので、その邸へ時々御機嫌伺ひに出るのだつたが、去年の春年禮に行くと、恰度それが稽古始めの日で、來客の模範仕合があつた。その時、金澤門下の錚々と立ち合つた一人が、卽ち石割だつたのだ。その後何度か、彼を街上で見かけたこともある。

そんなわけで、先方では、恐らく源七を見憶えもしなかつたであらうが、彼の方ではすつかり見知つ

てゐたのだつた。

源七は、長門屋事件に石割が關係があるのを知ると、直ぐに彼一流の直覺で考へたのだ——

——拔目のねえあいつの事だ。谷中へ手が廻つたと知れば、やがて自分の身體へ火が付くと察して、逃げ支度を始めるにきまつてゐる——しかも、昨夜たんまりかせいだ後だ、愚圖々々してゐるわけがない。そこで、身を落着ける先きをどこへ選むだらう？　きまつてゐる——京だ！　京には佐々木の友達の近藤勇が、新選組とやらを作つてあばれてゐると言ふぢやあねえか——

そこは蛇の道は蛇だ。

かうした直感から、御徒士町の源七目明しは旅支度で家を出て、目ざす濱町の兄弟分、明石屋儀兵衞の家を訪れたのだつた。

儀兵衞は恰度家に居合せて、これから晩酌といふところだつた。

「何だな？　御徒士町、道支度で？」と、でツぷりした、苦味のある顔の儀兵衞は、源七の姿を見ると訊ねた。

「ことに依つては遠い旅立をしようと思ふのさ。それについて、ちよいと賴みがあつてやつて來た。」

草鞋を取つて上にあがると、持ち合せの盃を儀兵衞は差す。

源七は一口飮んで、

「實は兄貴の繩張りだが、この河岸の佐々木さんのところにゐる、ある侍に用が出來て、そいつの行方を突きとめたいんだ。何とか智慧を貸して貰ひたいと思つてね。」

「ふうん、何といふ侍だ？」

「石割——そら、隱密上手で評判な奴だ。」

「ほう、石割か？」

「あの男だ、今夜か明日は屹度旅へ出るだらうと思ふ。そいつを跟けて見たいので、兄貴の力で、何とか探りを入れて頂きたいんだが——」

「よし來た。おい、鐵、こゝへ來い。」

氣の利いた若者が、膝をそろへて、

「へえ、何御用で？」

儀兵衞は顎で源七を示して、

「御徒士町のが、ちよいと用があつて佐々木の屋敷にさぐりを入れてえといふんだ。手前、あすこに懇意があるな？」

「へえ、從弟の奴が、あすこでお仲間をやつてゐやすから——」

「結構だ、ぢやあ石割といふ侍が、今夜にも明日の朝にも、旅に出るかも知れねえから、それを見落さねえやうにして、さうときまつたら直ぐにこゝへ知らせるやうに、ぬからず計らはねえと承知しねえぞ。いゝか？」

「へえ、かしこまりやした。そんなことならお茶の子で——石割？　かしこまりやした。」

直ぐに鐵は座を立つて行く。

御徒士町の。安心しねえ、あいつはなか〳〵スルどい奴だ。まあ任して置くがいゝ。そして寛いで一獻といふことにしようぢやないか。」

職業的な第六感といふものは、當らずとも遠からぬ的を射る。

その原因は源七の考へとは大分違つてゐたが、當の石割は、その夜の明け方に、源七の推測通り、上方へ立つ人であつた。

と、いふのは、折角久しぶりで心ゆくまで淫樂を貪らうと、部下の口を禁めて佐々木只三郎には祕密に誘拐した長門屋の娘が、思ひがけきやその筋の手で救ひ出されたのを知り、失望して歸つて來ると、早々主から居間へ呼び寄せられ、祕密な命令を受領したからだつた。

佐々木は例の通り、蒼白い面に神經的な影をたゝへて、這入つて行つた石割に鋭い目を送りながら、言葉すくなに要領だけを言ひきかせた。

「石割、貴公にすぐに京へ立つて貰ひたい。」

「はい。」

石割は主人の顏を仰いだ。お梅が手に入つたことなら、この突然の命令は不滿であつたらう。しかし彼女を失つて見れば、彼にしてもこの旅はのぞむところだ。長門屋一件が自分達の仕事だとは、萬に一ツも知れはすまいが、若しそれが暴露した曉には、江戸棲居は幾分危險だ。それに、船材藏一件から佐々木の信用を大分傷けてしまつてゐるので、この邊で何か功績を擧げて置かねば、今後とも何かにつけて煩ひがのこる。そこで、京都行きは歡迎すべきだつた。

「仰せのまゝに致しますが――御用すぢは？」

「例の露滴ぢや。」

と、佐々木のいかつい眉根がぐつと釣つた。

「かやつ、長州密偵が必ずふところにしてゐたに相違ない一件ものを預つて、身代りに京へ立つたものとしか思はれぬ。京へ行つたとて、何しろ長州一派はこと〴〵く都落ちをして、影をひそめてゐる現在ゆゑ、すぐに一件ものを桂の手へ渡すこともなるまいが、どうも京都の同志にばかり任せて置くのは心許ない。露滴の顏を見知つてゐる貴公に一骨折つて貰ひたいのはそこぢや。是非ともかやつの首に繩をつけて、江戸まで引き戻してしまふなり、手にあまらば人手をかけても始末をつけてしまふなり、いづれかにして來るがよい。何しろ、かやつを氣まゝにさせて置くことは出來がたい。よく心得てやり遂げてかへるやうに――」

「かしこまりました。」

露滴と言へば、手ごはい相手だ。それを自分を見込んで命令を受けたと思ふと、石割は功名心に胸が躍る。

「萬事拔目なく仕遂げてまゐるでござりませう。」

佐々木はすでに認めてあつた一通の手紙と、路用の黃金包とを取り出した。

「この封書は壬生の近藤氏へ――」

「たしかにおあづかりいたします。」と、石割はかたちをあらためて。

「では、曉立ちにいたしますから、これで御免蒙ります。お身體をおいとひなされますよう。」

「おゝ、貴公の手柄をいのるぞ。」

——石割は、部屋へ戻ると、早速旅支度にとりかゝつた。

——そして、石割鹿島立ちの報告は、佐々木の仲間部屋から、たちまち明石屋へと飛んだのである。

玉くしげ、箱根の山はもとより日の本を東西に兩分する天下の嶮岨、まだ春遠い頃であるから、巍々には雪も消えやらず、往來する雲は雨を呼んで、午後になるといつか魂を氷らせるやうな霙日となりをはつた。

——その霙をついて、箱根權現の鳥居前にぬかづき、關所のかなたに淋しい軒をつらねる宿を行きすぎ、つゞら折りなる三島道へとさしかゝる、足ごしらへ、雨具も嚴重な一人の侍——それは昨日の朝まだき江戸を立つた石割三平だつた。

——石割のこゝろは、この冷たい氷雨に凍る肉體の中で、溫かく希望多く踴躍してゐる。

——なアに。露滴の奴がどんな猛者にもしろ、京に追ひつめればこつちの物だ。もとより俺の手に及びはせぬが、新選組の連中を煽つてやれば、あの命知らずのゐのしゝ武者たちが、必ず仕止めてしまふに違ひない。天にひそむも地にくゞるも高々狹い京のことだ、三日と經たぬ中に、屹度見つけ出して、新選組へ引き渡さう。まあ、露滴の奴なんぞはどうでもいゝとして——

ニタリと、深い笠の中で、彼の鋭い目が薄氣味惡い笑みをうかべた。

——何しろ、京はいゝところだ。景色もいゝが女もいゝ——

石割も、曾て佐々木の供をしたり、また隱密用をうけたまはつたりして、何度となく上洛した經驗があるのだつた。そしてそのたびに、荒らびすさんだ心を慰さめてくれたものは、あの芳醇甘美な銘酒と、艶冶濃厚をきはめた、京女の和肌とであつた。

——江戸にくすぶつてゐればこそ、町娘の野暮ッたいのを追つかけもするが、あんな小娘なんぞは、京女を見た目には二度と見られるものぢやあないわさ。

彼は逃がした魚の大きささへ、今は忘れてしまつてゐた。何しろ、長門屋の分捕の報酬として、久々で唸るほどの大金を手にしてゐる。持てるだけ持つたのこりは江戸の手がたい飛脚問屋にあづけて來たから、いつ何時でも手紙一本で金船が着くのだ。その上公用の費としては、佐々木からも十分に受けて來た。

——まあ、春が來るまで、京見物としやれるかな——祇園、嵐山の花もしばらく見ないで——

石割は、氷雨に濡れながら京の春を、あの爛漫たる春の花を想ふ。江戸でのいまはしい出來ごとはもはや心に殘つてはゐなかつた。

——全く氷雨の中ではあるが、石割はちよいと小謠でも口吟みたくなる位な、樂しさと自由さとに充ちあふれてゐる。佐々木只三郎の手許を暫らくでも離れてゐられるといふことさへ、決して惡くはなかつた。

——先生もすばらしい方ではあるが、ちと窮屈すぎるからなあ、あゝいふ鋭い人間に氣に入られてのお側去らずも、考へて見れば得な境涯とは言はれない。ちつとはのんびりと暮して見たいものだ。いつそ、京へ行つたら、新選組へ加入してしまはうか？　近藤さんは小節にはこだはらない仁だといふからな。

京の新選組が、團體としての威望を背景に、京洛内外を肩で風を切つて押しまはしてゐることは、當時の無祿者どもに取つてはこよない羨望の的であつた。京の女、京の酒、一切の快樂はすべて自由にはばからず受用し得るのが新選組の特權のやうに言はれてゐた。

——近藤さん、土方さん、若手では沖田總司あたりには及びもすまいが、この石割だつて、新選組一統にさまでひけを取る腕でもあるまい。

そんなわけで、石割三平は、そのいづれから見ても、今度上洛の任務を帶びたことをよろこばずにはゐられないのだつた。

行歩に難き箱根の山路も、すでに上りつくしてしまつて、あとは三島への下り坂、つゞら折なる羊腸を、のこすところ四里といふけれども、これからは樂であらう——

石割三平は、これまで數度の上洛をしてゐるので、極めて暢氣な旅だつた。もう少し行くと、大方お稻荷さんでもあるだらう——森々たる老木の杉並木の蔭に、小さな赤い鳥居を持つた小祠がある筈だ。そこで焚火をして凍えた手足をあたゝめながら、背負つた辨當包でも解くことにしよう。

さて、峠も下りで、そして見憶えの小祠まで來た。すると、すでにそこには先客があるか、うッすり

とほの青い煙が雨煙の中に立ち上つてゐる。

——ほう、何者か休んでゐるな？　まづ濕つた枯枝に火をつける手間だけははぶけたといふものだ。

石割はさう呟いて、近づいて行く。

小祠の朽ちた緣に、腰打ちかけて、菅笠をかたむけ、兩手を焚火にかざして暖を取つてゐるのは、鐵いろの合羽、手甲、脚絆、草鞋の緒の締め方で見ても、さも旅なれたらしい町人——

石割が近づくと、顏を上げたが、寒さを怖れて、手拭で目ばかり出して面部を包んでゐるので、ハッキリと人相は見わけ難い——

「おや、こんな日に峠越しのお方はあるまいと思ひましたに、旦那も急ぎのお旅と見えますね。さあ、おあたりなさい。恰度燃え立つたところで——冠物は失禮致します。」

「いや、御造作になり申さう。かやうな氷雨日には、焚火ほどの馳走はない。」

石割も緣に並んで腰を下し、火に兩手をかざして揉み合せる。

「町人、そちも西へ參るのかな？」

「はい、ちと急用で上方まで——」

「拙者も同じ道ぢや。」

「それは思ひがけなくお道連れが願はれると申すもので——どうもこの山路は、三島へ着くまでは、あんまり氣味のいゝところでもございませぬ——旦那のお供が願へれば、心丈夫でございますよ。」

「は、は、は。」と、石割は笑つた。

「まだ日が暮れるには間があらうに、さりとは臆病な話だな。」

「いゝえ、何しろ短日で、おまけにこんな天氣でございますから、暮れかけると忽ちでございます。冬旅は、どうもそれが心細うございまして――」

「ほんに物騒な世の中ゆゑ、町人たちが心淋しう思ふのも無理はないのう。」

石割は割籠を取り出し、腰につけた瓢、黒塗椰子の實の水呑なぞも緣に並べたが、その水呑で冷酒を一杯ぐいと干すと、

「町人、一杯いかゞぢや。」

「ありがたうございますが、お武家さまのお樂しみを減らしましては――」

「いゝや、かまはぬ。寒さしのぎに一杯いたせ。拙者は辨當を食すから――」

石割が握飯を食べる間に、町人はよほど飮ける口と見え、さもうまさうに遠慮なく傾けてゐた。

「いやもう、これはとんだ御馳走にありつきました。私も御酒は大好きで、宿屋へ着いての一杯を樂しみに道を急ぐやうなわけなのでございますよ。實は只今も、寒さしのぎに、こんな時に一口やれたらと手足をあぶりながら考へてをりましたところで――」

町人は石割に水呑を返して、酌をしてやつたが、ふと、目を相手の面上に止めて、

「おや――」

と、言ひさして小首をかしげるやうにした。

石割は眉をひそめて、

「何ぢや？　何で拙者をそのやうに凝視めるのぢや？」

町人は目で詫びて、

「お咎めで恐れ入りますが、何だか旦那には何處かでお目にかゝつたやうな氣が致しましたので――」

「ほう？　拙者に見覺えがあるとな？」

急に石割の五體は、外には現はれぬ緊張に引き締められた。彼は全身を明るみには突き出せぬ身の上だつた。

町人はまだ小首を傾げつゞけてゐた。

「さあ、どちらでお見かけ致しましたのか――ちよく／＼、よそながらお姿を拜んでゐたやうに思はれてなりませぬが――」

と、言つて、急に膝を打つやうにして、

「さう／＼、思ひ出しました。貴方樣は濱町河岸、佐々木樣のお屋敷にゐらつしやるお方ぢやあございませぬか？」

石割はじろりと町人を睨んだ。

「ふん、一體其方は何者ぢや？」

「私でござんすか？」

と、町人は始めて菅笠を脫り、頰を包んだ手拭をのけて、腰を屈めて、

「私は乘物町に人入れを致してをります、藤間屋の者でござんす。今度京都會津部屋に、江戸人足を送

ります下相談に參りますので――」

「ほう、ではそちは藤間屋身内か？」

石割はホッとしたやうに言つた。

「で、拙者を何處で見たのぢや？」

「多分御門際ででも時々お目にかゝつたのでございませう。私は佐々木樣のお隣の松平樣へ始終お出入り致してをりますから――」

――言ふまでもなく、赤鳥居の小祠で、先くゞりをして石割三平を待ち設けてゐたのが、御徒士町の源七であることは説明を要さぬのだ。彼が石割の質問に答へて、堅氣の商人とでも言つたなら、一隻眼を有する相手が多少の疑ひを抱いたであらうが、人入れ稼業と名乘つたので、渡世特有の鋭さ、素早さがいくら隱さうとしても仄見える源七の容子をも、敢へて怪しまうともしないのだつた。

「左樣か？　會津部屋へ參ると申すか？　大分の人足を送るのかな？」

會津部屋は、もとより親幕の筆頭、京都守護職松平容保に屬する非常警戒の火消人足の溜りだ。石割は源七を見ること、味方の一人となつたのである。

「はい、何しろ生命を的に御奉公いたさなけりやあならぬ御時世でございます。上方もんぢやあ仕方がないので、生命知らずの江戸ッ子が、幾らでも御用なのでございますよ。」

――源七の方でも安心した。彼は例の十手術を學んだ師匠の許で、名乘り合こそせね一二度は、この石割の腕を見てゐるので、先方で若しや憶えてゐはせぬかと、なか〳〵油斷も怠らなかつたのだつた

が、今はその用心も要さぬのであつた。

そんな出鱈目な應待をしてゐる間にも、源七は隙もあらば、江戸名代御徒士町の腕の冴えを、天晴れ武士面した不逞漢に示してやりたいと、心の中で焦るのだつた。しかし相手は佐々木輩下の錚々、根性の下劣は別として、なか〳〵半分半厘の油斷もなかつた。あながち源七を訝しいと見ての用心ではない、そこは修業で、眠つてゐても耳を動かす、あの肉食獸のやうな本能が、いつとなく養はれてゐるに相違なかつた。

――八丁堀の旦那衆は、屹度自儘に旅へ出たので、怒つておゐでなさるに違えねえ。どうあつてもこの大ものを、引ッ括つて連れて歸らなけりやあ、御徒士町の面目も、滅茶々々になつてしまふんだが――

源七は懷の中の捕繩が、生ある蛇のやうにうごめくのを感じた。しかし、憖じ此處で本性を現はしたら、佐々木一派の特色の、稍寸詰りの一刀、ビュウと拔き打ちに落ちて來て、大事な首が一間も向うに飛んで行つてしまふにきまつてゐる。――

――でえじに使へば一生ものだ。やきもきして、死に急ぎをするでもあるめえ。それにしてももう少し、神田の先生のところで十手の修業をして置くんだつた。あり來りの泥棒や人殺を相手なら、退けを取らうとも思はねえが、免許取りの侍を向うに廻しては、俺の腕ぢやあ覺束ねえ――

源七がこのやうなことを思ひめぐらしてゐるとは知る由もない石割三平は、割籠の握飯を食しをはり、瓢の酒もつくしてしまつて、陶然として凍雨に煙る岨路を眺め下ろした。

「さあ、大分身うちも温まつたほどに、そろ〳〵出掛けようか？　今から立てば三島まで、日のある中

に着くであらう。」
「お供をさせて頂きます。三島は角屋と申すのがよい宿屋だと言ふことで、お構ひなければ、今夜はゆつくり寛いでお相手致したいものでございます。」
「拙者も無聊な一人旅、よい連れが出來て重疊ぢや——いざ參らうか？」
石割三平は、源七が焚火を踏み消すのを待つて、冬雨の中へ歩み出した。
源七は振分荷物を肩に、その後につゞくのだつた。

石割三平、大津驛危難の事
附り 源七片腕男となる事

——石割三平が覘つてゐる露滴といふ鴨は京にゐる——三平の目はその鴨だけを見つけ出さうと輝いてゐる。ところが、源七は是が非でもわが手で捕へねばならぬ鴨を、いつもつい鼻の先に見てゐるのだ。
彼は箱根で一緒になつてから、絶えず石割の後頭部を見つめながらじり／＼してゐる。だしぬけに、出來ることならあの首筋に、捕繩の輪を引ッかけてやりたい。ぐつと輪をくゞしてしまへば、もうこつちのものだ。相手がどんなにジタバタしたとて、宿の役人に唐丸を仕立てさせ、網に包んで江戸送りだ。亂世を幸に、お膝下を荒しまはる無賴の浪人どもへの見せしめに、これに越すものがあらうか？
だが、石割には油斷がない。

今迄も言つたやうに、この石割といふ男は、浪人目付として偉大な權力を持つ佐々木只三郎に直屬した密偵として、これまで幾人となく反幕志士を縛りもし、殺しもしてゐる。そしてその志士たちの、親友、同志、親兄弟、それ等は絶えず彼を付けねらつてゐるものと考へねばならぬ。
それ故、彼は、例へば一夜の宿りに就いたところが、源七その人には毛頭疑ひを抱いてゐぬ癖に、決して先に盃をふくまうとはしないのだ。二人の盃が充たされて、源七がまづ干してからでなければ、それ程好きな酒さへ飲まうとはせぬ。
現に、源七にも、旅路のつれ／＼に、こんな繰りごとさへ聽かせてゐるのだつた。
「拙者も思へばつまらぬ役儀を引きうけたものぢや。御家人暮しのたより無さに、憖じひの腕をたのんで佐々木先生の同志となつたが、そのために、今では前後左右敵を作つて、いつ何時刃の林に圍まれるかも知れない身の上になつてしまつた。こんなことなら町道場の一つも開いて、町人相手にヤットウの稽古でもつけてゐれば、無事泰平であつたのだが——」
「そのかはり、何かお手柄をお立てになれば、槍を立てゝの御道中といふ御出世は目に見えてゐますからね。」
「イヤ／＼、町人のそちは何と思ふか知らぬが、この御時世はどう變るかわかりはせぬ。萬一、薩長の勢力が、大樹家を冒すやうなことがあつて見ろ、先づ第一に飛ぶのは憎まれ役の俺達ぢや。」
そんなわけで、石割は、二人床を並べて寢る時にも、刀の下げ緒を手首にからんで寢るのを忘れなかつた。

――一通りの奴ではねえと覺悟はしてゐたが、これはあり來りの手立ぢやあ、とても御用便にすることは出來ねえぞ。

だが、いつか、泊り〳〵を重ねて、もうぢき二人は京に入らねばならぬ。

――こいつを都へ入れてしまつては、なほのこと事が面倒だ。どうあつてもその前に、一か八かの勝負をせにやあならぬが――

石割の言葉尻から見ても、京へ到着早々壬生の新選組を頼らうとしてゐるのは十分に呑み込める。

そして、一度あの魔王の窟に追ひ込んでしまつたなら、たとへ上方の目明仲間に助力をたのんだところが、到底首に繩をかけるやうなことは困難なのだ。

一日、一日、源七はじれて來た。

で、たうとう二人は、今夜強行軍をして京まで這入つてしまふか、それとも大津泊かと、いふところまで來てしまつた。

「旦那、どうなさいます？　京までは足がちツと無理かと思はれますが――」

と、もう少しで大津の家並が見えるところで、源七は聲をかけた。

もう日はたそがれ――この宿で、最後の血戰の腹をきめた源七だつた。

「イヤ、こゝまで來れば京は鼻のさき、くたびれ足は、ゆる〳〵華やかな日の下で伸さうよ。」

「しかしねえ、旦那。」

と、源七は稍感情的な調子で、

「私はしがねえ身の上でござんすが、旅は道づれ、世は情で、五十三次をお供をしてまゐりました。京へ着いてしまへば、手前は會津部屋、旦那は立派なお武家さま、今迄のやうに友達づくの我儘も言はしては頂けませぬ――せめて今夜一晩は、どツか景氣のいゝ所へ泊つて、別れの盃といふのを頂戴いたしたいと思ふのですが――それに、折角の都入り――陰氣な夜中よりも、あした明るい晝日中に着いた方が、何と、景氣がいゝと思ふのですが――」

いろ〳〵な意味から、一刻も早く京都へ踏み込みたかつた石割も、かう言はれて見れば心が動かないわけにはいかなかつた。他人を邪推の目で見ずにはゐられないやうな彼も、源七の竹を割つたやうな氣性にはいつか引きつけられてゐた。

――こやつ、なか〳〵面白い男だ。さすが人入れ渡世だけあつて、どこからどこまでアクが抜けてゐる。あツぱれ江戸ツ子だ――

なぞと、感心もしてゐた源七から、情にからんで言はれて見ると、それを振り切るのもつれない氣がした。

そして、京はもう目と鼻の間だ。こゝまで來て見れば、一晩位は仇にすごしたとて問題はないであらう。

「さやうさの、貴公とも長のなじみと言つてもよいの。では、今夜は惜別の宴といふことにいたさうか。」

「御承知下されましたか？　私としましては、何とも名譽なことで――そのかはり、今晩は私に御馳走させて頂きます。これまで何やかやお世話になりつゞけでございますから。」

——源七は、浮々と、うれしげに言つたが、いよ〳〵宿へ這入ると、

「旦那、宿屋も景氣が悪うござんすから、今夜は上方をんなの口あけといふことにして、見つきのいゝお山屋へ案内させて頂きますぜ。」

事實、二人とも、海道すぢの飯盛、女郎と遊ぶ氣にもならなかつたので、これまでは禁慾生活を守つて來たのだつた。

そこで、大津の廓でも、花家といふ遊女屋が目立つてゐるので、ずいとのれんをくゞる。抜目のない源七が、切目々々へ金びらを切つて見せたので、藝妓、末社、にぎやかな酒宴になつて、石割も上機嫌だ。

「旦那、長らくお供をしてまゐりましたが、私の隠し藝をまだお聴かせしませんね。これで、實は大變な咽喉自慢で——おゝ、藝妓さん、ちよいと三味線をかしてくんねえ。江戸前の清元の彈き語りだ。」

源七のいゝ聲のひとくさりが濟んで、末社どもが總をどりだ。

石割は、蔦といふ遊女が大分氣に入つたらしく、さかんに大盃を傾けてゐる。

「旦那はしよげ返つてゐるのが大のお嫌ひだ。さあ、みんな、拳飲みをやらかさう。」

源七が音頭を取つて、賭飲みがはじまる。石割は今は安心し切つてゐるので、ほとんどの泥醉だ。

「殿さん、もう遅うおますよつて、あちらへ——な。」

と、蔦と呼ばれる遊女は囁く。

「ほう、花魁のお床いそぎぢや。いざ、おん供つかまつらう。」

と、末社の一人が踊りに立つ。

そして、一座はくづれ、やがて森閑たる深夜が來た。

——寝たがり遊女が、ぐつすりと眠つたのを見すまして源七は、スツと床を抜け出した。手早くつけた手甲、脚絆、十手を摑んで、鼠のやうに薄暗い廊下を足音もなく——

十中七八は成功だつた。今夜に限つて、さすがの石割も醉ひつぶれてゐる。部屋は既に見さだめて置いた。

その石割の部屋まで行くと、幸ひ、遊女の草履もない。さては一人で熟睡してゐると見える——邪魔がないのは何よりだ。

障子を音も立てずに開けて、覗き込むと次の間にぼんやりついてゐる朱塗の行燈、石割の枕元には、衣類を疊んで、その押へに大小だ。さすがに彼も、今夜は下げ緒を握つて眠るだけの用心を忘れてゐる。

——締めた!

寝息を聴きしづめて、近づいて、大小を取りのけようとしたが、その刹那だ。

「誰だ?」

餘りに突然、大聲だ。そしてパツと掻捲が蹴のけられる。

源七は大小はそのまゝに十手をかざした。

「長門屋の押し込み、御用だ!」

「ふうむ。」
いつか、石割は一刀を引き寄せて、床の上に立て膝してゐた。
「貴樣、岡ッ引だつたのか！」
破れかぶれで振り込む十手！　石割の上半身が左右に動いたと見る間に、シュッと振つた一刀！
あはれ、源七の左手は、二の腕から切り落された。すべて瞬間の出來事だつた。
源七は怯へず、どうと尻餅をつく。
「馬鹿奴！　怪しい奴とは思つたが――」
石割は仆れた源七の呻きも耳に入らぬやうに、手早く衣類を身につけた。
「馴染み甲斐に生命は預け置く。さらばぢやぞ！　いろ〳〵造作になつた。」
石割の影は、最早この一間から消え失せた。
「ううむ、ううむ。」
源七は呻く。苦痛のためばかりではなかつた。千日の萱も一朝に燒け亡びて、餘りにも慘めな失敗だつた。
部屋は奥まつてゐた。遊里も今は寢入ばなだ。時經て石割の相方が部屋に戻つて來るまでは、源七の傷の手當をするものとてもないのだつた。
――しかし源七は男だ。片腕になつても絶望はしない。北野の梅が盛りなころには、京の町を、無事な片手を彈藏にきめて、ブラリ〳〵とブラついてゐる男であつた。

長門屋娘お梅京洛に趣かんとする事
附り　清元延いね害心の事

話頭は轉る――
……亡き母の葬りをすまして、墓もまだ乾かないのに、何たる悲運ぞや、狼藉者の押込みに遭つて、父は殺され、家は燒かれ、財寶さへ殘りすくなに掠め去られたお梅である。わが身だけは御徒士町源七目明しのおかげで、谷中古寺から救ひ出されはしたもの丶、かうした一埒を改めて見聞した時の、彼女の悲しさは！　驚きは！
兎にも角にも、母の生家石町分銅屋といふ鐵物問屋へ引き取られて來た彼女は、叔父、叔母一門の心からなる慰めに感謝の涙を流さないわけにはいかなかつたが、しかし悲哀と涕泣との幾日か過ぎたで、このまゝぢツと人の情にすがつて無事をたのしむには忍びなくなつて來た。
――亂暴者に斬り殺される時の、父さまのお氣持はどんなであつたらう？　それといふの
く思ひ合せて見れば、私をねらつてゐた浪人ものが、二度三度のやりそくなひに腹を立て
違ない――つまりは私が父さまを殺させる因を作つたやうなもの――あゝ、どうかして、
りたい――あの鬼のやうな浪人たちを滅ぼしてしまつてやりたい――

お梅の、垂れこめて、今は涙さへ盡きたやうに、默り込んで暮してゐ屋の叔父はさとすやうに言ふのであつた。

「お梅、何事も運だと諦める外はありませぬぞ。お前にして見れば、父さまはどたことだから、さぞ肉を食つてもあき足りぬ浪人原に仕返しもしたいだらうが、のや、天下は亂れに亂れようとして、さう申しては何だが、公方さまのお力でもこのおとが六かしくなつてゐる現在ぢや。そこに付け込んであばれまはる惡侍たちを、なか／＼も捕まへることは覺束ない。それに、高い聲では申されぬが、お直參衆、御家人衆、役人衆はよからぬ所業もしてゐるとのこと――相手が萬一そんな人達であつて見れば、泣く子と地頭、お辛抱するより外はない。お前もさぞ／＼忌々しからうけれど、こゝを辛抱して、それよりも一日も早く後とりの婿どのを貰ひ、長門屋を再興するが何より――重なる不幸には逢うても、老舗の長門屋ぢや。立派にのれんを張ることが出來るによつて、過ぎ去つたことは夢として、新しい日を一日も早く見るやうにせねばなりませぬぞ。」

叔母の云ふことにしても、やはりこれと大同小異だつた。

そんなことを聽かされるたびに、お梅はかすかに頷いて見せる。けれども胸の中には、却つてそのたびにムラ／＼と燃え立つ炎があるのだつた。そして、例のこの世でたつた一人の頼もしい人、戀しい人、美しい人、勇ましい人の面影を瞳に浮かべる。

――あゝ、あの方さへ江戸にゐらしつて下されば！ 露滴さまさへ側にゐて下されば、どんなことも起らなかつたらうし、また起つたにして見ても、屹度私の切ない願ひを入れて、父さまの敵を取つて下されたに相違ない。あの方だけは、どんな怖ろしい敵にも尻ごみをなさる方ではないもの――

お梅の瞳の底には、いつも／＼、あの黒羽二重着流しの美青年の姿が彷彿として燒きついてゐる。優人路考よりもより優雅で、その癖亂刃に圍まれても唇元から微笑を消さぬ、あの命の親のおもざしが、晝間は幻に、夜は夢路にあらはれて來て、一刻も忘れてゐることが出來ない。

――でも、あの方は京へお上りになつた。遠い／＼西の都へ――

すると、たつた一人離れ小島へとり殘されたものだけが感じるやうな、賴りなさ、淋しさ、はかなさが、うら若い胸の中に一杯に潛み入つて來るのだつた。彼女に取つては、露滴こそ唯一の力で、慰藉で望みであつた。それゆゑ、その人に逢ふことさへ覺束ないと考へると、人生全體がこと／＼く空虚なものに思ひ做され、どのやうな華やかなもの、樂しいもの、歡ばしいものを持つて來ても、その隙間を埋めることは出來ないとしか思はれないのだ。

――いつか、早春となり、坪庭の沈丁花が、甘く惱ましい匂ひをまき散らして、そしてほんたうの春が來ようとしてゐた。

分銅屋の叔父叔母は、あはれな姪の沈み切つた心を引き立てゝやらうとして、物見遊山、芝居音曲とさそひをかけても、相手がさつぱり浮き立つて來ないので、そこは年配者の恒で、とり越し苦勞以上に苦に病まずにはゐられなかつた。

「ほんたうにお梅にも困つたものぢや。どうしたら元氣がつくか――あのまゝで置いたなら、勞症でも

病み出すのは知れたこと。このごろの顔色を見い。まるで生きた色もない——あの子が萬一のことでもあれば、名高い長門屋の店も、之ぎり絶えてしまふのだ。」

「でも、無理もありませぬ、これまでは全盛の長門屋の愛娘、世の中に苦勞といふものがあらうなぞとは、思つても見なかつた子が、急に兩親には死に別れ、家は燒け、手代番頭まで殺されてしまつたのですから——」

「だが、哀しいのはもつともだと、いつまでもあのまゝにして置くわけにもいくまい。そこで、わしは考へたのぢやが、ひとつ長門屋再興を急いで見たらどうだらうと思ふのぢや。つまりはあの子に許婚でも持たせて見たら——そして來年父親の一周忌でもすんだなら、華々しい店びらきと一緒に婚禮の式を擧げるやうに運んでやつたなら、あの子も望みが出來て來て、めつきり活氣がつくかも知れぬ——から思ふのだが、そなたの考へはどうぢやな？」

「さうですねえ、いゝ婿がきまつて、お店の再興の段どりが十分につけば、あの子だつていつまでも泣いてゐるわけもござんすまい。で、その婿どのに、こゝろ當りがありますかえ？」

「さればさ。ほかにこれといふのも見當らないが、つい手近かなところで——」

「え？」

「うちの仙次郎さ。商賣の見習に、駿河町へお賴みはしてあるが、これももう二十四、縹緻、才智、別に世間へ恥かしいものでもない。ことさら幼い時からの知つた同志、俗にはいとこ同志は何とやら、屹度お互に否やはあるまいと考へるが——」

「さう言へば、私も滿更それを思はぬわけでもないのですが——ぢやあ、折を見て、私から、あの子へ話し込んで見ませうか？」

——もとより、分銅屋とても石町では一二の分限、姻戚關係を別にしても、長門屋とはいゝ取組、別に遠慮することでもないので、ある春の初めの靜かな宵、叔母は相變らず一間にとぢこもつてゐるお梅に、そのことを言ひ出したのだつた。

「ねえ、お梅さん、お前もその女の身で、名代の長門屋を立てるとなれば、なか〳〵大仕事だよ。萬一身性の惡い婿どのでも取るとなると、折角再興したところが、どんなことになるやも知れない。それで、叔父さんともいろ〳〵相談して見たのだがね——」

叔母はいくらか聲を靜めて、ちよいと襟を突いて、相手の顏を覗き込むやうにして、

「少し私たちの口からは言ひ難いことなのだけど、お前さへ厭でなければ、うちの仙次郎をどうかと思つてね？」

お梅は項垂れて、白い頸あしを見せてゐるだけで、表情はわからなかつた。

「あれももう分家するなり、婿入りするなりの年ごろ、親の身びいきかは知らないけれど。長門屋の婿どのとしてもさうをかしくもあるまいと考へるのだが——」

お梅は膝の上に重ねた黄八丈の振袖からこぼれる、紅友染の襦袢の袖を白い指でいぢりつゞけながら答へはない。

「それはお前にも一生の大事、急に返事をしてほしいといふのではないが、長門屋の暖簾も、さういつ

までも外しても置けないから、それで私たちもいろ〳〵と心配するのさ。ね、お梅、私たちの氣持はよくわかつておくれだらうね？」

「をばさん、すみません。」と、やつと口の中。

「いゝえ、すむもすまないも、そんなことぢやあないのだよ。今言つたことにしろ、無理押しつけに言ふわけではないのだから、たゞ、正直の返事を、その内に聽かせてくれゝばいゝのさ。」

と、叔母は言つて、思ひついたやうに、

「さう言へば、清元の延いねさんが、もう見えるころだ。大變すゝみが早いと言つて、あのひともお前を大層讃めておゐでだつたよ。」

――分銅屋夫婦は、お梅の氣鬱を案じるあまり、當時流行の清元界でも、女師匠で聞えた延いねといふのを招いて、強ひて稽古をさせなぞしてゐた。

叔母が去つてから、お梅は新らしく湧いて出た問題に壓しつけられて、美しい顎を襟にさし込んでしまつたのだつた。

――仙次郎さんを婿に取れ！　何と返事をしたらいゝものだらう？

事實、女の子といふものを持たなかつた叔父叔母の、自分への心遣が、なみ一通りのものでないのはわかつてゐた。ことに依ると親身の親でも、これまでに愛してはくれないかも知れぬ。そして從つて、仙次郎を婿にしてはどうかと言ふ意見も、決して分銅屋親子で、長門屋の資産を横領しようといつたやうな、きたない考へからでないのはわかつてゐた。それに、仙次郎は、親達もいく分諦つて言ふやうに

豪家の次男としては、出來すぎた人間でもあつた。物ごしなら、應待なら、亡き父も、いつもあゝいふ男の子を一人持つてゐたら、長門屋も萬歳だが――なぞと歎息した位なのだ。この縁談は、長門屋の全盛が今もつゞいて、父母が無事にながらへてゐたとしても、當然發生したかも知れぬのである――けれども、現在のお梅には、その縁談がどんなにすばらしいものにしろ、到底應諾なはれぬわけがあつた。

――いゝえ、私は、もう一生お嫁になど成れる身體ではない。私の命も、操も、みんなあの方があつてこそ、今からうやつて殘つてゐるのだもの――あの方へこそ、命も操も、いつ何どきでも差し上げよう。ほかのお方へは、どんな方へも上げられない。

彼女の生一本のをとめ氣は、いつかかうした決心をかためてしまつてゐた。

――でも、もし萬一、あの方が、私なんぞはお嫌ひだと――要がないとおつしやつたら？

お梅はそんなことを考へて惱ましくなる。しかし、さうした破目が來たら、彼女はこれまでの恩義にむくいるために、手の甲にひゞを切らせて、女中に使つて貰つてもいゝとさへ思ひきつてゐるのであつた。

だから、お梅は、分銅屋の叔父叔母の厚い情を、どんなに感謝してゐるにもせよ、今度の問題だけには色よい返事が出來る道理がない。と、言つて、長門屋を復興するには、この申しいでを受け容れる外はないであらう――

叔母から話し込まれたその晩から、お梅はこの難題に苦しめられて、易々と眠る夜も少くなつた。

——こんな時、露滴さまさへ江戸にゐて下されば、直ぐに飛んで行つて、苦しい氣持を聽いていたゞくのだけれど——

たつた一人生きのこつた自分が、古いのれんの長門屋を再び起さないのは、亡き父母への不孝とはわかつてゐるが、そのために婿取りをする氣には毛頭なれない。だが、叔父叔母は、あの返事を、今日聽けるか明日聽けるかと樂しんでゐる風で、何かにつけてこちらから口を切るに便利なきつかけを拵へようと試みてくれるのだつた。

早い櫻が、上野御山內を白くなつかしく霞ませはじめた。飛鳥山ももう見ごろになつたといふ評判だつた。

「お梅や、あしたは內輪のお花見をしたいと思ふのだよ。仙次郎も駿河町から呼んでね——」

ある黃昏、叔母が言つた。

お梅はギクリとした。

彼女がいよ／＼意中を叔父叔母に告白せねばならぬ日は近づいたのだつた。明日仙次郎に久々で逢ふといふことの心苦しさ——恐らく、叔父叔母は、二人を並べて見て、一對の雛のやうにも心の中で樂しみ愛したいのであらう——

——私には、もうこの家にべん／＼と厄介になつてゐることは出來ない、叔父さん叔母さんの滿足なさる返事の出來る身ではなし——

お梅は、ぢつと、灯をみつめて、蒼褪めてゐた。後れ毛をほつれのまゝに、前齒で嚙む下脣は土色

だつた。

——私は決心しなければ！

お梅はもうずツと以前から、露滴を京に追はうとする望みを抱いてゐた。しかし、どんなに戀しい賴もしい人がゐる都にしろ、五十三次、何百里程を考へると、一人ぽつちで此の家を家出をするまでの覺悟はつかなかつた。

けれども、今や事件は急迫した。

分銅屋夫妻の情にすがつて、江戸で安穩な日を送つてゐる限りは、仙次郎との結婚を義理にも承諾せねばならぬ身だ。どんづまりまで押し寄せられると、おぼこ氣の彼女は、おぼこ氣であるだけ大膽になることが出來た。

——女の一人旅で、京まで無事に着けるかどうかわからないけれど、そんなことは二の次——私は、もうこのまゝではゐられない——

彼女はその夜、これだけが燒けずに出た、母親のかたみの朱塗の手箪笥の抽斗に手を掛けた。

金金具、銀の秋草を象嵌した手箪笥の下の抽斗には、五十兩の黃金が入つてゐた。彼女はそれを緋色縮緬の布に包んで胴に卷き、一家が寢靜まるのを待つて、目立たない栗梅の小袖に着更へると、思ひ切つてソツと裏庭へ出る。

——朧月夜だ。

お梅は分銅屋脫出、京都旅行といふ難事が、何人の後援もなく、たつた一人で出來ようことゝはさす

がに思はなかつた。彼女が頼りにした女が、たつた一人居た。それはこの月頃、清元の稽古といふ名目で、實は話相手に來てくれる延いねといふ女だつた。

延いねは、以前は柳橋で左褄を取つたこともあるといふが、年の頃は三十三四の大年增、揉上げの長い目の美しい、すんなりとした姿で、縞縮緬がよく似合ふ、仇と意氣とを兼ねた江戸前の女、話が面白く、氣が利いてゐて、世間知らずのお梅にはこの上なく、心頼りに思はれてゐるのだつた。

――お梅は今夜の思ひ立ちは、この人ならでは相談するものもないと考へた。そこは苦勞に苦勞を重ねて來た女ゆゑ、のツけから押し伏せるやうな沒義道をする筈もない。それに、女は女、また何とかい い考へを聽かせてもくれやう。

裏木戸は、奉公人達の夜遊びの出入りために、丑滿近くまでは空錠になつてゐた。外へ出て、ホッとして、冷汗が流れるまゝに、横町から横町へ、とある町角で始めて駕籠を呼んだ。

「柳橋の、延いねさんのところまで、急いでね。」

辻駕籠は別に怪しまうとはしなかつた。況して、清元界では當時艶名の高い延いねの名は、こんな連中にも通つてゐた。

「合點だ。」

――歌舞音曲、紅燈綠酒の巷も、夜は更けて、しんみりした濕つぽさ――殊更延いねの棲む裏路地には、行き交ふ影も途絶えてゐた。

駕籠から下りて、もう清元の紋のある提灯さへ取り込んでしまつた師匠の家の格子の外へ立つ。戸は

閉まつてゐるが、嬉しや、中から低い話し聲が洩れて、それが確かに目あての人の聲音である。

「お師匠さん！　お師匠さん！」

トン〳〵と、慄へる手で、若しや追手もと路地口を振返りながら、遠慮深く叩いて見る。

中では話し聲が止んで、聽き澄ます風であつたが、

「どなた？　もう寢んでしまひましたが――」

延いね自身、入口の方へ出て來た氣配だ。

「お師匠さん、あたし――石町の――」

かすかに答へると、

「まア？」

と、吃驚した語韻で叫んだが、

「まア、さういふお聲はお梅さんですね？　油堀のお孃さまですね？　まア、今頃どうして――只今あけますからおまちなすつて――」

内で、囁くやうな聲がちよいとすると、格子戸、雨戸が引き開けられた。

意氣な南部縮緬襟つきの半纏を羽織つて、櫛卷に横ぐしの延いねは、しよんぼりと立つたお梅を探るやうに眺めて、

「全く、思ひがけない――まア、お這入りなさいましな。」

お梅はおづ〳〵と招ぜられるまゝに中へ這入る。

二疊の玄關の次の茶の間は、間の襖がピッタリ閉て切られてゐたが、客でもあつての酒盛か、あたりに酒の香がたゞよつてゐた。

「階下は散らかつてをりますから、狹苦しうござんすけど、どうぞ二階へ――」

トン、トン、トンと、白い足うらを見せて延いねが先に立つて階段を踏んで上る。

二階は六疊、壁際にけいこ三味線が二三挺かゝつて、床の間には人形の箱、うた本が幾冊か積みかさねてある。ほんのりとした行燈だ。

延いねは、いくらか目の下を染めて、馬鹿に美しく仇ッぽかつたが、瞳には眞劍ないろをうかべて、友染模樣の座蒲團をすゝめると早々、當然訪ねなくてはならぬことを訊ねた。

「一たい、今時分、どんな御用でお訪ね下さいましたの？　お顏のいろも大層お惡いし――私、心配でなりません。」

「お師匠さん、私、御迷惑とは思ひましたけれど、外に賴るところもないので、御相談があつてうかゞひました。」

お梅は今は氣弱くばかりはしてゐられなかつた。彼女は割合にハッキリとさう言つて、さすがにうつむいた。そして付け足すやうに、

「實は、石町を今夜家出をして來たの。」

「まア、何だつてまア？」

延いねはぢつと娘をみつめて、

「石町さんではあなたのことを、生みのお子でもあるやうに大事にかけておゐでなのは、私たちにもわかつてゐますのに――」

「それだからこそぢッとしてはゐられなくなりましたの――」

と、お梅はかなしげに吐息をして、

「私はね、お師匠さんの力をかりて、明日にも京都まで行きたい決心で家出をしました。」

「えツ、京まで！」と、聽くごとに延いねは驚くのであつたが、

「どうも、お孃さま、困りましたね。それはあなたにもいろ〳〵理由はおありなのでせうが、石町さんは私には大事な御最屓さま、旦那もおかみさんも、こんな私のどこが御意に召してか、言ふに言はれぬ御恩をかけて下すつてゐるのです。その私が、大事なあなたの家出のお手傳をするなんて、あちらのお耳に入つたら、ほんたうに獸とも畜生ともおいかりなさるにきまつてゐますわ。私のやうなものをたよつて來て下すつたのは有難うござんすが、私としても途方に暮れてしまひますよ。それに、何分あまりだしぬけで――」

お梅はさう言はれると、栗梅の小袖の膝の上に、ボタ〳〵と涙を落した。

「ですけれど、私だつて女の身です――辛い目は何度も見て來た女の身です。」

と、延いねはやさしくなつて、

「折角こんなしがない私を指して來て下すつたのですから、お差支がない限り、お胸の中をうかゞつて見ようではありませんか？　そして私のやうなものにも、御無理のないわけ合ひだと會得がいつたら、

及ぶ限りおためにもなりませう――さあ、どうぞ話して聽かして下さいましね。」

お梅は延いねが、氣持を變へてこんな風に言つてくれるのに力を得た。

彼女は、もう、恥づかしさも、氣まり惡さも、すべて忘れた。

――露滴との交渉――仙次郎との緣談――その他一切のなりゆきを、酸いも甘いもなめ知つた年增をんなの前にすべて打明けたのである。

「まあねえ、うかゞつて見ると、あなたの御決心も、無理だの若氣だのと一槪に言つてしまふわけにも行かない氣がいたしますねえ。」

延いねは何度も頷いて、さう言つて、

「ぢやあ、かうしようではありませんか、あなたのお賴みを引きうけるにしても、私だつていろ〳〵考へなければなりません。今夜すぐに京へ立てるといふわけもなし、まあいろ〳〵の支度が出來るまで、おうちだと思つてこの二階にゐらつしやいましよ。その代りどんなことがあつても――たとへ石町さんからお尋ねをうけるやうなことがあつても、滅多にこゝにゐらつしやるなぞとは、口が腐つても申しませんから、せめて二三日でもこゝで寢起きをしてゐて下さいましな。私も、何だかあなたがさう言つては何ですけれど、他人のやうにも思はれなくなりましたから、屹度御滿足がいくやうに計らつて差し上げたいと思ひますから――」

「お師匠さん、私――」

お梅は思はず掌を合せた。

「あれ、そんなことを――」

と、延いねは止めて、

「あなたもいろ〳〵なお氣苦勞で、さぞお疲れになつてゐらつしやいませう。寢道具だつて、どうせ御大家のやうにはいきませんけど、こゝへ伸べて差し上げますから、どうぞ今夜はゆつくりお寢みなすつて――」

延いねは、押入れを開けて、それでも郡内縞のやはらかな夜のものを敷き伸べて、

「さあ、横におなりなさいましね、おねまをこゝへ置きますよ。お小用場は、梯子の下を右へお曲りになるのです。御用があつたら、遠慮なく手をお鳴らし下さいまし。」

痒いところへ手が屆くやうに、彼女は言つて、

「では、お寢みなさいまし、御安心なすつて、ゆつくりお寢みなさいましよ。」

お梅は今夜ほど女同志の思ひやりの有難さを感じたことはなかつた。

――狹い二階に、お梅のやうなしをらしい女客を迎へた延いねは、階下の茶の間にも、今一人の客を持つてゐた。

しかし、この方は、二階のそれとはまるで反對で、女ものを仕立かへたらしいお召縞の丹前を着て、長火鉢の前に胡坐になつて、ちびり〳〵と飮つてゐる、二十四五、面長で苦味走つて、ちよいと髷の刷毛先をわざと亂したと言つたやうな、目に險のある若者だつた。

婆やはとうに寢かせてしまつたので、延いねが二階にゐる間さも退屈さうに三毛猫の咽喉をさすつたり、かと思ふと邪慳に投げ出したりしながら獨酌を試みてゐた彼は、這入つて來た女主を見ると、顎で上の方をしやくつて、

「一體、どうしたつてんだ？　お娘は泊り込みといふことになつたらしいが――」

「しッ！」

延いねは制して、長火鉢に坐ると、鐵瓶の下の火を具合して、聲をひそめて、

「それについて、ちよいと考へたことがあるので、ほんたうは無理にも送りかへさなけりやあならないお娘を、言ふまゝに泊めてやつたわけさ。」

そして、差された盃を半分干して猫板に置いて、

「それもこれも、みんなお前のためになるだらうと思ふから――」

「俺らのためになると思ふから――だつて？」

と、延いねにくらべると、十も年下らしいやくざ者風の若者は訝しげな眼付をした。

「全體、二階のお娘ッてのは、どこの何者なんだね？」

「聽き及んでゐるだらうが、年があける早々、押込みにあつて主は殺され、燒打までかけられた油堀の長門屋ね――あそこの跡取娘のお梅さんなんだよ。」

「へえ？　長門屋の？　ふうむ。」と、若者は目をみはつたが、

「そいうがまた何だりて？」

「あたしの出入り先の石町の分銅屋へこのごろ引き取られてゐるのだが、いろ〳〵わけがあつての駈け落といふわけなのさ。こんなあたしを頼りにして、軍師に頼みに來たのだから可愛いぢやあないか。」

「何でまた長門屋の娘ともあらうものが、そんな大それた――」

「まあ、お聽きよ、かういふわけなんだよ――」

延いねは盃をかへして、酌をしてやると、たつた今聽いて來たお梅の祕密についてすべてを話した。

「ふうむ、で、お前は、お娘のために一肌拔いで、京の露滴とかへ送りつけてやらうといふのかね？」

「そこなのだよ――あたしにすりやあ、お梅さんの言ふまゝに計らつてやつても、何しろ大家のあと取り娘でゆく〳〵大した金箱なのだし、また心を鬼に石町へ追ひ歸しても、御褒美は相當に貰へるだらう――だが、あたしはそこへお前のことを算勘に入れてゐるんだよ。」

「先刻からそれが聽きてえんだ。」

「ねえ、吉さん。」

「うむ。」

「吉さんも、このまゝ江戸にやあ、あんまり暢氣に暮してはゐられない身體だね？」

「うむ、きまつてらあな。身體のいそがしさに、こんなに痩せせえ來てゐるぢやあねえか？」

「それゆゑこそだよ――あたしがひとつ采配を振つて、お前をほとぼりさましに無事に上方へ送つた上たんまりまうけさせて上げたいと思ふんだがね。」

「へえ、ぢやあ、あの娘を、この俺が送り狼といふわけか。」

吉と呼ばれた若者はニタリとして、

「こいつあ儲け役だ。」

延いねはビリヽと柳眉を昂げた。

「身體がいそがしいの何のとこぼしながら、吉さん、すぐそれだ——あたしも何の因果で、通魔なんて綽名のある掏摸なんぞをいろにしたのか？　年がちがふと思ふと、今度こそ別れようと思ひながら姉弟のやうな情も出て、心を碎いて心配してゐるのに、お前もほんたうに人でなしだ。あたしや、お前にはつく〲愛想がつきる時があるよ。」

「謝つた、俺あ何もそんなつもりで、言つたんぢやあねえよ。」

「ほんたうにお前だつて、今度お手當にでもなれば、當分娑婆が見られない身體ぢやあないかね。佐渡へでもやられて見な、そんなひよわい身體で、生きて江戸へもどれツこはありやあしないからさ。」

「もう謝つたツてことよ。」と、吉はコックリ首を下げて見せた。

「佐渡の、何のツて、緣起でもねえ。」

——通魔の吉は、淺草から兩國へかけて、十五六の頃からすばしツこさで鳴らした掏摸だ。延いねと出來合つたのは、彼女が柳橋を退いて、清元師匠の看板を出してから、藝事のすきな彼が弟子入りをしたのが緣となつた。目から鼻へ抜けるやうな才氣、苦味ばしつた美貌——それが、延いねの目について、ついしたことから割ない仲となつたのだが、今迄たゞの遊人と思つてゐたのが掏摸だと知つた時には、もう切るにも切れぬ惡縁が結び合はされてしまつてゐた。この通魔の吉の難儀を救ふために、これまで

延いねは何度生命のちゞまる思ひをしたか知れなかつた。けれども、折々は、それが却つて嬉しいこと——つくし甲斐のあることのやうに思はれるのも、年增獨特の爛熟した戀に狂ふものゝ常であるのかも知れない。

「そこへ遣り度くないからこそ、六かしく言や、苦肉の策とやらも思ひつくのさ。」

と、延いねは、相手が干した盃をふたゝび差したのに注がせもせず、

「吉さん、酒どころぢやあない、眞面目な話だから、しツかり聽いておくれ。あたしが思ふには、お前が江戸を離れてどこへ落ちるにしろ、そのまゝぢやあぶない——何か人目を暗ます算段をしなければなるまいが——」

「そりやあさうさ、このごろこの家へころがり込んだまゝ、洗湯へもオチ〱いけねえ俺ぢやあねえか。」

「そこだよ。」と、延いねはいよ〱聲をひそめて、

「お前はんも、いくらか知つてゐるだらう？　大家の六兵衛ぢいさんが、あたしにうるさいことをしよツ中言ふのを——」

「ふうん、とんだところで禿茶瓶ののろけかえ。」

「そんなどころぢやあないよ、あたしがあのぢゞいに、こんな風に賴み込むのさ。あたしの從弟が、さる町方に奉公してゐたのが主人の娘と家出をして、上方の知り人をたよつて行くのだが、關所手形をどうやつて手に入れたらいゝかもわからないし、駈落者と睨まれながらの旅も可哀さうだから、夫婦ものとして大手を振つてあるけるやうに、何とか才覺をしてくれろ——と、ね。さうすればあのぢゞいは公

事ずれした奴だから、屹度うまく計らつてくれるよ。それを摑んで、お前はお梅さんと上方へ落ちるがいゝよ。」

「こいつあすばらしい筋だ。姉はんは作者だなあ。」

「何しろ、あたしも、お前をどうにか無事に旅に出してやりたいにも、御存知の四苦八苦で、路銀の工面にも差しつかへてゐたのさ。ところが、お梅さんは、聽いて見ると五十兩は手つかず持つてゐると言ふし、上方へ着いた上は、あの縹緻だもの、お前の働きひとつで、相當な仕事は出來るだらうよ。」

「どうも、全く棚牡丹だな――何分頼むよ、今度といふ今度は、江戸にやあゐられねえ俺なんだから――」

「だが、吉さん。」

ジロリと、凄い秋波が、やくざ者の眉間へ眞向に來た。

「お前にあの娘を預けて出すのは、猫にかつを節を背負はせてやるよりもつと危なツかしいんだよ。あたしだつて、素ッ堅氣のかみさんぢやあるまいし、五十三次の長道中、毎夜々々の泊り〳〵を、無事でおゐでとは言ひはしない。美しい花なら手近に咲いたのを摘むのもいゝさ。たゞ、決してあとくされを殘しちやいやだよ。あの娘に心底惚れて、あたしを忘れるやうなことがあると――吉さん、その時こそ、あたしやお前がどこに隱れてゐても、屹度探し出して食ひ殺すから――」

「何を言つてゐるんだ、俺だつて、命を賭けての旅ぢやあねえか。それに、これまでの恩義を忘れて、お前に泣きを見せるやうな俺でもねえ――」

吉は極力辯明する。

「その口に、つい乘つちやあ、今迄に何度しくじつたか知れないんだよ。あたしも因果な性分さ。」

「さうときまつたら一ぺえ呉れ。何だか急に世間がのび〳〵として來やがつた。」

「でも、吉さん、來春は歸つて來られるだらうね？」

と、しみ〴〵と、情夫をみつめて酌をする。

「うむ、今年一ぺえ遠慮してゐりやあ、お上だつて目こぼしをしてくれるさ。」

「今度歸つたらもう惡いいたづらは止めにしなよ。その代り、あたしも何とか智慧をしぼつて、お前一人ぐらゐ遊んで暮せるやうに、小料理屋のひとつも作つておくからさ。」

「うむ、俺だつて、疊の上で死にてえから、これからは魂を入れけえるよ。」

――階下で、ひそ〳〵と、こんな自分勝手な惡計をたくらんでゐるとは、もとより知る由もないお梅は、延いねの江戸ッ子らしい達て引きにすつかり信頼して、自分をあんなに愛してくれてゐる分銅屋夫妻の家にゐるよりも、もつと安心してぐつすりと眠り込んでしまつてゐるのであつた。

――階下もいつか行燈にふうわりと延稻の紅い裏の着物がかゝつて、しみ〴〵と更ける春の夜更けだ。

通魔の吉、林中にお梅を挑む事

附り　蛇とり左助救ひの事

――お梅は何もかも、延いねまかせで、そして、それこそ自分を戀しい人の住む京都への、神ほとけ

の導きだと信じた。

通魔の吉は、恰度延いねの許に食客にころがり込んでゐる從弟で、上方に親戚があるのでかの地で身を立てようかと考へてゐたところゆゑ、折も折、供をさせるから、心置なく同行するやうに――と、さういふ觸れ込みをも、勿論お梅はうたがはなかつた。逃げ込んで來てから三日目の朝まだき、旅支度も延いねの手ですつかりとゝのへられて、いざ、出立といふ間際に、お梅は感謝に充たされて、涙ぐんだ目で見上げて言ふのだつた。

「お師匠さん、この御恩は死んでも忘れません。京都へ着いて、のぞみが叶つて、江戸へ戻つて來る時があれば、その時こそ萬分の一でも必ず御恩返しはいたします。一生ほんたうの叔母さまより姉さんよりお師匠さんを大事にいたしますから――」

「何を言ふんですねえ、お孃さんは！」

と、延いねはさも親しげに笑つて見せて、

「あたしはたゞあなたが可愛らしくつてたまらないんですよ。まあ、折角無事に歸つていらつしやい。冬のあとには春が來るにきまつてゐます。今日の難儀は明日の幸福ですから――それにしても、身體だけは十分にお氣をつけなすつて――それから吉さん。」

意味ありげな延いねの目が、これも堅氣一方な若者らしく身構らへをした吉の方をジロリと見た。

「お前も何度も言ふ通り、道中何かと氣をつけて、京へ着いてからも、お孃さんのお力になつて上げねばなりませんよ。」

「わかつてゐますよ、どんなことがあつても、私がついてゐる限り、お孃さまに難儀はかけません。」

――そして、若い二人は、さも京見物の夫婦らしく、江戸を離れて東海道へと踏み出したのだつた。

しかし、延いねが、あのやうに嫉ましげに豫言したにも似合はず、旅へ出てからの通魔の吉は、極めて實直らしく振舞つてゐた。宿り宿りに着くと、うはべは夫婦といふので、同じ部屋に床は並べて敷いても、別に怪しげな素振りさへ見せなかつた。延いねから酒好きだから餘り飲み過ぎぬやう言つてやつてくれと、お梅は頼まれて來てゐたが、その晩酌さへ、二本と重ねたこともなく、いつも禮儀正しく、まめ〳〵しく、忠實な道づれとしての態度を崩したことはなかつた。

春は旅路が進むに從つて美しく闌けて行つて、海は藍色に、空は淺黄色に、そして街道筋の丘々には櫻が雲のやうにたなびいて咲き匂つてゐる。

――あゝ、この旅が、あの方と御一緒なら――

何度、お梅は心の底にさう呟いたであらう――

すると、敏しげな吉は、その心の中を見拔いたやうに、こんなことを言つて、お梅の頬を笠の中で紅らめさせるのだつた。

「お孃さん、今度お歸りの旅は、さぞお樂しいでござんせうね、露滴さまとやらと、それこそ水入らずの御下向に違ひがありませんから――」

「まア、あんなこと――」と、お梅もいつか吉に馴染んで、

「でも、そんなことが一度でもあるなら、私は死んでもいゝと思つてゐます。」

と、本音さへ吐くのだつた。

「人間、何だつて本氣になつて望めば、屹度叶ふにきまつてゐます。」

吉はさも實體らしく、

「私にしたところが、お孃さんの前ですが、何しろこんな生若い身ですから、これまで何度となくやりそくなつて、折角の運を取り逃がしましたが、今度こそは上方で一苦勞して、江戸への歸りには千兩箱を山と積んで、これまで人を嗤つてゐた世間の奴等を見返してやる積りでゐるんですよ。」

「本當に、今不仕合せな私達が、いつか仕合せになれればいゝのね。」

「なりますとも！　大丈夫、屹度なります。」

元氣らしく、吉は云ふ。

そんなこんなで、最初から何の疑ひも抱かなかつたお梅だけに、日を重ねれば重ねる程、吉に對しての信頼を增して行つた。

――だが、狼は遂に狼だ、肉食獸は遂に肉食獸だ！

通魔の吉が、到頭欲望の鋒鋩を、ハツキリと現はして、孤獨無援の美少女に迫る日が來た。野獸が怖ろしい牙を剝いて、かよわい餌食に噛みつかうとする時が來た。

二人の旅は、だん〳〵了りに近づいて、最早米原にも近いとある原中でのことだつた。

一本道で、行く手、來し方、一目に見渡せるやうな場所であつたが、それだけ妙に淋しさが感じられた。

日が、すでに西に傾いて、そして何となくどんよりと曇り始めた黄昏だ。

吉は、その原のまん中で、足を止めた。

「こいつは困つた。何だか今日は草鞋の緒が緊すぎるやうな氣がしてゐたが、たうとう緒ずれを作つたらしい――」

と、獨言のやうに呟いた。

「お孃さん、すみませんが、ちよいと待つておくんなさいまし。足を直して行きますから――」

どかり、吉は、道ばたの草生に腰を下して、草鞋の紐を結び直し始めた。

お梅は思ひ遣り深く、

「どうなの？　ひどく擦れはしませんかえ？」

「ありがたう、御心配には及びません。だが、あなたは女の身、さぞおつかれでせうねえ――男の私でさへ、一度腰を下すと、ちよいとまた歩き出すのが億劫になりますから――」

「いゝえ、私はさうでもないよ。それにどんなに疲れても、もうしばらくの間我慢をすれば、直きに京へ着くのだから――」

「お孃さん。」

「なあに。」

何氣なく、お梅がさういふ顏を、吉は眞直ぐにみつめた。

心易だてに、見返へしたお梅は、何知らずハツとした。

吉の目の中には、今迄一度もあらはれなかつた、ある閃めきが宿されてゐた。お梅はまだ何人からも今の吉のやうな目で見られたことはなかつた――それ程無氣味な輝きやうであつた。

彼女は吃驚して、視線を反らすことも忘れてゐた。

「お孃さん、あなたはそんなに一日も早く、京へ着きたいとお思ひなのですか？」

「だつて――」

と、お梅は目ざしばかりか、語韻にさへある冷たさ、險しさを感じて、いまはしい困惑の中から言つた。

「だつて、當り前ぢやあないの？ そこへ行かうと思つて、いろ／＼な思ひをして、やつと江戸を立つて來た私たちだもの――」

吉はズバリと言つた。

「ところが、あツしやあ、ちつとも京着を急がねえんだ。」

久しぶりで、通魔は通魔らしい言葉使だ――恐らく、さぞ胸がスウとしたことであつたらう――

「あつしやあちつともいそがねえんだよ。そこどころか、この旅が死ぬまでつゞきやあと思つてゐるんだ。」

お梅は仰天してしまつた。怖れとおどろきとに充されて、呆然として吉をみつめた。

「あつしのその氣持が、お梅さん、呑み込めねえかね？」

「まア、吉さん、お前どうしたの？」

何と言つていゝかわからずに、お梅はオロ／＼と呟いた。

「まア、亂暴な口の利き方をして――」

「は、は、は。」と、吉は嘲笑つた。

「そんならお梅さん、お前さんは今が今まで、このあツしを、素ッかた氣のお店のもの〻しくじりと思ひ込んでゐなすつたんだね。いや、こいつあ大笑ひ――それにしてもこのあつしに、そんな役者になれるたあ思はなかつた。化けも化けたりといふ奴サ。ふん、大笑ひだ。」

お梅は蒼褪めて、草生にべたりと坐つたまゝ、途方に暮れて吉をみつめた。

――これはどうしたわけなのだらう！ あの親切な延いねが親身の從弟と保證して供につけてくれたこの若者が、突然こんなことを言ひ出さうとは！ 荒くれたそぶりを見せようとは！

彼女はガチ／＼と觸れ合ふ齒を噛み締めるやうにして、辛うじて言つた。

「一たい、お前はどういふ人なの？ 私にはわからない――」

「あツしかね――ふ、ふ、問はれて何のなにがしと、と、世話時代に張つていふ程のこともねえが、延いねの從弟といふのは嘘で、平たく言へば通魔の吉といふ巾着きりさ。」

お梅は目をみはつた――信頼しつくして來た道づれの、この突然の變容は、彼女からあらゆる思索力さへ奪つてしまつたのだつた。

「實あね、お梅さん、あツしだつて、話が具合よく行くと思やこんな原ツぱで、緞帳芝居じみた臺詞を並べて、かあいらしいお前さんの膽つ玉をでんぐりがへさせたかあなかつたのさ。まそつと色事師にな

つて、泊り〳〵の暖けえふとんの中で、寝物語りもしたかつたのさ。ところが容子を見てゐると、お前さんもよく〳〵の粋狂者、京の露滴とかいふ浪人に、ほんとの戀をしてゐなさる。宿屋なんぞで手を出しやあ、大聲を出して騒ぎ出すどころか、どんな手ひどい目に逢はされるかわからねえ――さう考へたので、山路、峠、人里遠いところへかゝる度、折をうかゞつてゐたのだが生憎いつも邪魔な往來――それで今迄默つてゐたんだ。しかしもう怺へられねえ――京へ着いたらつきまとふやうなことはしねえから、道中もう僅かだ――宿屋ばかりのうはべの夫婦を、ちよいと本ものにしてくんねえよ。さあ――」

茫然として、相手の顔に見入るだけのお梅の手を、ぐつと、吉はつかんで引き寄せる。

拒まうにも男の力だ。

しかし、これを抗がはずにはゐられぬ。

「あれ！　何をするの！　けがらはしい！」

拂ひのけて、立ち上がつて、前後を知らず駈け出さうとするのを、吉はぐつと抱きすくめる。

「仕事は江戸から企んで來たのだ。今更逃がすことではねえ――延いねから、道中だけは樂しながいゝと、あのやきもち燒きからさへ許されてゐることなんだ。お前の戀人は侍、俺あ巾着きりだが、滿更嫌ふほどでもあるめえが――」

「ぢやあ、お師匠さんが、何もかも承知なのかえ？」

さすがに、地軸もくじける思ひでお梅は叫んだ。

「つらは柔しいが、どの道荒療治にかけなけりやあ、諾のわからねえお前だから言つて聽かせる――どうせ道中は俺が樂しんで京へ着いたら賣りこかし、身の代をつかんで逃げることにきまつてゐるのよ。」

不敵に吉は言つて、

「さあ、人が來ると面倒だ。手前もどうせ駈落者だ――僞名をつかつてお關所を越えた身體だ。あんまり大きな聲も出せめえ。さあ、こつちへ來い――」

ぐん〳〵と、吉は本道から切れ込んで、林の中へお梅を引き入れて行く。

お梅は必死の抵抗だ。

とは言へ、何分にも力が違ふ。喚くことさへならず、息せき喘いで身をもだへるが、結局鷲に摑まれた小雀だつた。

「藻搔いても疲れるだけだつてことよ。さあ、こゝまで來れば、もう街道から見通しはつきはしねえ――」

投げ出すやうに、吉はお梅を地上へ置いて、急に猫撫聲になつて、

「何もかも惡緣だと思ひなせえ。だが、仲よくして御覽じろ、あとぢやあ、必ずこの吉でなけりやあならなくなるのだから――」

寄り添ふのを突ッ放す。

「お梅さん、どうでもさばけて呉れねえなら、手荒になるばかりだぜ。」

吉はすでに鼠をじやらすに飽いた猫であつた――いよ〳〵、彼は齒を剝いた。

「さあ、來なせえ。」

淫らな欲望に爛々たる眼をふすぼらせて、奇怪な微笑に目口を歪ませた吉の淺間しい顏が、ヒタとお

梅の頰に近づけられた刹那だつた——

——ビユウ！

と、空を唸つて落ちて來た杖のやうなものが、通魔の吉の腦天をガーンと打つた。

「アツ！　痛え？」

吉は思はずお梅を放した。

「どいつだ！　人をだしぬけに！」

振返ると、そこには、篠竹のやうな細い鐵棒をたづさへた、六尺豐かの杣夫風の若者が立つてゐた。

「手前、その娘をいぢめるか？　いぢめる氣ならやつて見ろ、叩き殺してくれべえから——」

吉は、杣夫をみつめた。睨みつめた。しかし、どんなにすばやい巾着切りも、この巨人には逆立ちするとも及びがたいのはわかつてゐた。

「けだもの！　飛んだ邪魔をしやがつたな！　覺えてゐろ！　お梅、手前もさうだ。京で待つてゐるから覺悟をしろよ。」

早口に、ベラ〱と、さう叫ぶと、吉の姿は綽名の通り、通魔のやうにケシ飛んでしまつてゐた。

お梅はホツとすると、氣を失ひかけた。杣夫は、いかつい手でやさしく慰めて、

「御安心なせえ、俺あこの山の中の蛇取だ——なあに、怖かあねえよ、まだ蛇は穴にゐるだ。匍ひ出したら生どるために、穴の樣子を探りに歩いてゐるだけよ。家へ行かう。あいつが待ち伏せしてるといけねえから、——うちにはお母あがゐるだけだ。お母あは親切もんだよ。屹度相談相手になるだろ。さあ

來さつせえ。」

——お梅は正氣に恢復すると、吉に路用全部をあづけてしまつてゐたことを思ひ出した——豪富長門屋の愛孃、今や旅のさなかで、一文の旅費すら身につけてはゐないのだつた。凶か吉か、彼女は聽くさへも怖ろしい蛇取り男のいざなひにまかせて片山里の伏家へと導かれてゆく外はなかつた。

片腕男源七京の旅宿に病む

附り　源七お梅出會の事

——遠山櫻、祇園櫻、御所櫻——花の都を、あらゆる華やかさで飾つてゐた櫻が、いつか一夜の嵐に散りつくして、世の中は爽かな若葉の頃だつた。

江戸目明し源七は、左手を二の腕から失つたれ、十手、捕繩を掴むには右手一本殘つてゐるので、

——なアに、生れ付きの片輪だと思やそれまでだ。平生ッから左の手で箸を持つたことのねえ俺らだぜ。片腕男、片腕男と見くびつちや貰ふめえ。

怖ろしく諦めのいゝことを自分に言つて聽かせて、京は三條の、とある商人安宿に腰を据ゑ、公には押込みの夜盜、今は私には怨み骨髓に達した仇敵石割三平の行方を尋ね廻つてゐる。

だが、大津の宿で、負傷の手當をするのに二十日あまり費したため、その間に石割は巧みに蹤跡を晦まして、何處にどう潜んでしまつたのか、皆目見當がつかなくなつてしまつた。

道中、みちすがら、折々洩らした石割の言葉を綜合すれば、多分は壬生の近藤勇をたよつてゐるに相違ない。新選組へ潜り込んでしまつた以上は、ちよいと手入れが面倒だぞ——

とは言へ、利かん氣、負けん氣にかけては。江戸の同業の中でも指折りの源七だ。京まで來て、所司代手下の目明し手先の助力を乞ふやうな氣にはなれなかつた。

——曾我兄弟は十八年の辛抱だ——狙つてゐて隙のねえツてことがあるもんか。石割だつて鬼神ぢやねえ。

大津の失敗が、自分ながら餘りにムゴたらしかつたので、源七の意地は益々突張るばかりだつた。

若いころ道樂が過ぎて、富山の方にごろついてゐたことがあるので、越中訛は手に入つてゐる。で、反魂丹京都出店へ頼み込んで、藥の荷を下ろして貰ひ、合羽に左の手が無いのを隱し、髷の恰好も田舍ツぽくして、大膽に毎日々々壬生のあたりをうろついてゐる。

けれども、壬生の屯所は言ふまでもなく毒龍窟だ。うツかり踏み込めば二度と生きて出られるかどうか解らないから、さすがの源七にも取ツかゝりがない。

その屯所のつい近くに、一軒の萬屋——酒、炭、鹽までも賣つてなか〳〵仕出した店がある。毎日のやうに、其處へ寄つて、一杯酒で辨當を使ふことにしてゐる源七は、日ならず主と懇意になつた。

「毎日、毎日、京からの出商ひも大抵ぢやありませんね？」

江戸辯の主人は、昔は本所で小さくやつてゐた酒屋だつたが、得意先の伊東甲子太郎が同志と一緒に新選組へ加入すると同時に、獨身者の氣易さで、御贔屓筋のあとを追つて來たのだつた。ところが、甲子太郎が、近藤等と意見を異にして、山陵組を作つて別れてしまつてから、同じくばその方へ跟いて行きたかつたのを、折角得意も出來たので踏み止まつてゐる男だつた。

これが、そこは關東者の鋭い目で、いつか源七の望みを、すつかり目的をさしたわけではないが感づいてしまつてゐた。人情で、自分を贔屓にしてくれた伊東派と敵視してしまつた新選組が、主にすれば何となく業腹なので、從つて屯所の中に何か用ありげな源七に、蔭ながら力を添へてやつてもいゝやうな氣持になつてゐるのだつた。

「はい、何しろ物騷な時世で、病氣になつても藥も呑まないのか、さつぱり賣れが止まつてやり切れません。」

「どうですね、この界隈が捌き場なのなら、京から毎日お通ひになるのも億劫でせうから、汚ないが、私の家へ來てゐなすつたら——離れといふと人聽きがいゝが、建て增しをした六疊が空いてゐますから——」

——ふうむ、こゝの主人、妙なことを言ひ出したものだ——ことに依ると、こつちの身性を知つて肩入れをする氣かな？

少しあぶなツかしい氣はしたが、虎穴に入らずば虎子を獲ずの譬へ、差し出された背に負ぶはれて見ようといふ決心をして、

「さうでござんすか、さうして下さりやあ有難いが——」

「何分こんな騷がしい世の中だから、私の方でも、男の人に一人でも多くゐて貰ひたいと思つてね——

毎日現金を扱ふ渡世ですから――」

「では、早速、二三日中に御厄介になることに致しませう。」

――源七は、その六疊を見せて貰つて、口約束を堅めて、一先づ京へと戻つて來た。

屯所筋向うの萬屋――

此處に陣を張つてゐれば、先づは見通しだ。石割が如何に晝は奧深く潛んでゐるにしろ、夜になつたら外出もしよう――

源七は、思はぬ幸運に惠まれた氣がして、三條の旅籠に戻つて來たが、好事、魔多し――昨日今日、風邪を引いたらしく思つてゐたが、その熱のためか、その夜から左手の切口が激しく痛み出した。すつかり癒つてゐたらしい切口の疼きに、彼は人の耳につく程に呻きもだえずにはゐられなかつた。その痛みは、石割の一刀で、すつぱりと切り落された時よりももつと激しく、もつと執拗こかつた。

「――うゝむ、いてえ、こいつはたまらねえ――古傷の傷口がギリ〳〵いたんで、その痛みが、切れのこりの腕を傳はつて、肩から背中へ、づきん〳〵と響くんだ。うゝむ、いてえ、たまらねえ――やり切れねえ。うゝむ、うゝむ。」

どんなに剛氣の源七も、にはかに襲つて來た痛苦には堪へられなかつた。

その呻きを聽きつけたか、障子が開いて、宿の女房が――

「生藥屋さん、どうかなさいましたかいな？　えらう呻いてゐらつしやりますが――」

「左の腕の負傷のあとが、急に痛んで來てどうもならぬ、これはわしの商ひの賣藥ではとても駄目だ。

商賣柄ヲヵしいが、苦しい時の神だのみ、お醫者さんを賴んで下せえ。」

「そんなら恰度いゝことに。ついこの先きに小竹緒庵さんというて、京に名高い外科の先生がおますさかい、早速お招きいたしませう。」

小竹緒庵は蘭法を併せ學んで、賣り出しの大家だ。

「おゝ、これは痛むであらう。この傷はだれが手をつけたのぢや？　う？　大津の？　あの仁ならでは、そのやうに短かい間に、こんなに手際よう療治は出來ぬ。」

と、まづ大津の同業を、緒庵は讚めたが、

「療治に手落はないが、そのあとの養生が惡かつたな。當然は靜養してゐねばならぬところを、愼みが惡かつた。酒はいけぬよ、それから食養生にも禁忌がある――よい〳〵、まあ、一ケ月だけ死んだ氣になつて、わしにまかせなさい。そのかはり二度と痛まぬやうにいたして進ぜる。」

「へえ？　一ケ月もかゝりますか？　そんなところを、どうか十日ばかりで仕上げていたゞきてえものでー―」

「馬鹿なことを――なほざりにして置けば、毒がだん〳〵全身にまはつて、生命取りになるとは知らぬか――まあ、落着いて養生するがよい。」

緒庵はねんごろに藥を塗り、鍼を打つたあとで、飮藥をかず〳〵あたへて立ち去つた。

しかし、醫者の言葉は、決して威嚇ではないと見えた。いかなる名醫の療治も、なか〳〵病毒を直ぐには拂ふことが出來ぬと見え、その夜も、その翌日も、どんなに齒嚙をして怺へようとしても、つい呻

吟の聲を洩らさずにはゐられぬ程の痛みがつゞく。

翌晩のことだ。

隣室には遲くなつて、若夫婦か、それとも兄妹か、男女の泊り客が這入つたらしいので、その人達の眠りを妨げてもと、われ知らず溢れる呻きを、一生懸命抑へてゐたが、夜中になつて、咽喉が干付くやうに乾いて來たが、かなしいことに枕元に水もない。

――あゝ、旅で患ふほどつらいことはないなあ。江戸にゐりやこんな時には、女房をはじめ家の奴等が、夜つぴて枕元に坐つて看病してくれるだらうが――それにしても、江戸の連中は、俺があの石割の野郎に、腕を斬られたことさへ知らずに、その後のことを案じ暮してゐるだらう――たよりもやりてえ、しかし、俺は、八丁堀の旦那樣にお屆けもしねえで上つて來た身體だ。どうしても石割の首に繩をかけて連引いて行かぬことにやあ、二度と面が合せられねえんだ。源七の奴、手柄を急ぎやあがつて、拔驅をした揚句、のめ〳〵片輪者になつてけえつて來やがつた――ざまあ見ろ――と、仲間に嗤はれるのがなさけねえ――どうあつても、辛抱して、のぞみを達しなけりやならぬ。それにしても、この痛みはどうだ！　う、いてえ、かなはねえ――せめて水が呑みてえが――

さうした心の惱み、身の痛みが、ついまたしても呪はしい唸り聲になつて――

「う、いめ〳〵しいなあ！　やり切れねえなあ！　水が呑みてえなあ！」

と、その時、襖のあなたで、ひどくやさしい娘の聲だ。

「もし、御病氣とかうけたまはりましたが、何か御用がございませば――」

隣りの客へ、家人がすでに源七の患ひについて、何か洩らしてゐると見える。

――次に病人がありますが、流行病でも何でもありませぬゆゑ、御安心を――

とか、何とか――

「何なと御用がございませば、お言ひつけ下さいませ。」

なつかしい、江戸言葉だ。やさしい、品のいゝ、美しいひゞきの下町言葉だ。

「有難うござんす――イヤ、唸り聲がお耳にさはつたら堪忍して下せえ、ちつと負傷のあとが病めますんで――」

「さぞ、御難儀でございませう。水がほしいとかおつしやつたやうでございますが――」

――スル〳〵と、襖があいて、茶碗に湯ざましを一ぱい、若い女の立姿だ。

源七は、うれしさに、腹這ひになつて、受けて、押しいたゞいて呑まうとしたが、薄暗い、消えがての行燈に、折しもパッと丁字が立つて、その燈に相手を一目見ると、われにもなく、持つた湯呑みを取り落しさうにして、

「あツ！　お前さんは！」

娘はつゝましく膝を突いて、病人の容子に目を瞠つて、

「まあ！　何でございます？」

「いゝえ、何でもござんせん。いや、そんなことがある筈がねえ――」

と、源七はわが目を疑ふやうに呟いたが、あれ程ほしがつてゐた水を口にしようともせず、

「しかし、他人の空似と言つても、全く生きうつしだ――それにしても、長門屋のお孃さんが、田舍縞の寢卷を着て、上方のこんな安宿にゐなさるわけが――」

すると、娘も、ハツとしたやうに源七をみつめて、

「何でございますつて？　長門屋とかおつしやいましたが。」

と、息をつめたやうな聲音になる。

源七はしげ〳〵と、みつめる目を放しも成らぬ風で、

「江戸油堀、長門屋さんのお孃さんを、子分の奴等と一緒に谷中の古寺から、助け出して上げたことがありましたが――」

娘は寧ろ蒼褪めた――怖ろしい昨日を思ひ出しでもしたもの丶やうに――

源七は今は痛みも忘れて刎ね起きた。

「まア、谷中の古寺から！　ぢやあ、あなたは、江戸の御用聞さんでゐらつしやるの？」

「ほう、そんなら萬一、あなたがあのお孃さんでは――あんたの方では、御存知ねえも無理はねえ。古寺で毒を盛られてゐなさるあんたを見つけると、すぐに子分たちに、陵天院さままで送つて上げて、あツしやあ張込みをつゞけてゐましたから――あツしが陵天院へ行つた時には、あんたはもうお宅の方へ歸つてしまはれたあとでしたよ。」

源七が、行燈の朧な光りに、髮に飾氣もなく、田舍縞を着たこの親切な娘を、長門屋お梅と識別したにあやまりはなかつた。これこそ、通魔の吉に手荒い目にあつて、蛇取りの村男に助けられ、漸くのこ

とで京へ入り込んで來た彼女その人に外ならなかつたのだ。

「まア、ではあなたが、あの時私を助けて下さいましたので？」

お梅は奇遇に驚きながら、

「そのあなたが、何でまたこの京へ？」

「それはこつちからも聽きたいことだが、實はあツしの京上りは、あんたには父御の仇、お上のためには是非ともふんじばらねえでは御威光にか丶はる大賊を、追ひつめてのことでござんすよ。したが、相手も去るもので、お蔭で片腕を斬り落され、あツしに取つても、どうでものがせねえ敵となつてゐるんです。」

「お丶、では父さんの敵がこの京に？　それはまア思ひがけない。」

と、お梅は當時を思ひ出して、惡浪人に對する恨みを新にしながらも、源七を見出して百萬の味方を得た思ひ――

「伺つて見れば、あなたがお腕をお失くしになつたのも、私一家のためと言つてもようございます。お詫びのかはりに、一生懸命御介抱をいたしますから――」

「有りがてえ！」

と、源七は始めてお梅が汲んで來てくれた白湯を飲んで、

「江戸ツ子は江戸ツ子同志――實はたつた今も、氣の弱い話ですが、故鄕のことを思ひ出して陰氣ツ臭くなつてゐたところ――それにしても、お孃さんも、大層變つたお身の上になりましたね？　お連れさ

……は？」

「それには山ほどお話があるのでございます。」

お梅は一切を物語つた。父親の敵を討つには、京へ上つた露滴の力を借りねばならぬと信じたこと、思ひがけない義理の縁談のこと、延いね、通魔二人の悪心のこと、蛇取男の義侠のこと——

「連れといふのは、蛇商の、そのお方なので——京の藥種屋へ蝮の干したのを賣りに參るといふので、序でに連れて來て貰ひましたが、その方に別れてしまへば、知らぬこの都にたつた一人、露滴さまにめぐり合ふまで、また一人ぼつちの淋しい身になるのかと、實はそれを考へて、今夜も眠れずにゐたところでござんした。」

と、話を結ぶ。

「聽けば聽くほどお氣の毒な——渡る世間に鬼はないとも言ひますが、延いねといふ奴あ、太い毒婦でございますね。さうですか？　あの吉の野郎が、あいつの情夫で？　ふん、ぢやあの野郎、まだ京にうろついてゐるにきまつてゐるな。ようがす、石割の奴を見つけるかたはら、屹度吉の野郎を御用にして、あなたの恨みは晴して上げますよ。」

お梅は、そして、何よりも、露滴の在家を探し出して貰ひたいのだつたが、さすがにそれとも言ひ出し兼ねて、

「どうぞこれからは何かと力になつて下さいまし。望みを叶へて江戸へ下つた上は、出來るだけ恩返しはいたしますから——」

「そりやああツしも一生懸命でさあ、あツしにしたつて、あんたの親御の敵を御用便にしなけりやあ、江戸へ歸れる面はねえのですから——一人の目より二人の目、あんたも精々、怪しげな關東侍と見たら、探りを入れて見ておくんなせえ。」

「私ももう決心はしてゐます。親分の言ひなりに、どんな苦勞をしてもようございますから、足手まとひと思はずに、役に立てゝ下さいまし——」

——こんなわけで、不思議な緣が、源七お梅を引き合せた。

——さうかうしてゐる中に日數が經つ。無慾恬淡な蛇取男は江戸の知邊に邂逅したことをお梅のために祝福しながら歸鄕する。源七もめき〳〵健康を恢復する——

源七は寢てゐる間に、探索の計畫を立てゝゐたが、その第一手段として、お梅を、最も有効に役立てることに決心した。

彼はもうすつかり快よくなつて、緒庵から外出を許されるころになると、ある夜、お梅を身近く招いて囁いた。

「お梅さん、あんたのやうな身分の方に、ちよいと申し難いことなんだが、いつぞやあんたは、役に立つならどんなことでもさせてくれと、あツしのやうなものでも見込んで言つて下すつたね？」

「えゝ、親分、私、とうからその覺悟でゐますから、どんなことでも遠慮なく。」

お梅も苦勞に苦勞を重ねて、もはや富家深窓の世間知らずではない。目にも唇にも、きりツとした下町娘の氣合が出て、どこから見ても隙間のないしツかり者になつてゐる。

「さう言つてくれりやあ有難え。實は先斗町に、東家といふ江戸風の會席が出來てゐる。こいつは關東から來てゐる侍たちを目あての料理屋で、新選組を始め武士たちが始終集まつて來るらしいが、あツしもとうからその家の男衆にでももぐり込まうかと考へてゐたものゝ、何しろ人の目につく片腕男、はしツこい石割の目にふれたら大事だと、實は用心してわざと近よらなかつた。あんたは女、髮の結ひやう、顏の作りやう、これまでとすツかり變へれば、ちよつとのことでは、たとへあいつに行き逢つてもそれと見つかるわけがねえ——あすこへひとつ住み込んで、何かと探つて見ちやあ下さるまいか？」

と、源七が意中をのべると、お梅は勿論贊成だ——第一、關東料理と聽けば、故鄕忘じがたしで、萬にひとつ、露滴の姿をそこに見出せぬともかぎらない。

「御念には及びません、どうぞその東家とやらへ、明日にも連れて行つて下さいまし。」

「御大家のお孃さんが、上方へ來て料理屋奉公——おいたはしい話だが、これもみんな憎らしい侍たちのためだ。ぢやあ、父御の妄執を晴らしてさし上げるためだと思つて、一骨折り骨を折つて下せえまし。」

そして、二三日すると、お梅は黑襟付の、縞もの、黑繻子と水玉の腹合帶、意氣な銀杏返しといふかたちで、鴨川べり、東家といふ小會席の新參女中と身をやつすことが出來たのだつた。

源七はといふと、前說の壬生の酒屋、そこを久々でたづねて、約束をはづした言ひわけに、不慮の煩病について話すと、對手も快癒をよろこんでくれて、すぐに彼を建增の離れに迎へてくれたのである。

すでに初夏、若葉はいつか靑葉となつて、見る目すべて鮮かなる京洛であつた。

通魔の吉、武家を掏らんとして捉はる

附り　お梅一怪漢の密議を仄かに聽くこと

——その初夏も、もうやがて眞夏に入らうとして、鴨川べりの料亭々々には凉みの床が裝はれるのも間もないといふ時節だ。

東家に、もう一月近くもつとめてゐるが、源七の求める石割三平らしいものも、自分があのやうに戀こがれる、露滴に似た人影も、絕えてのれんを潛らぬ模樣なのに、今は神佛の加護を願ふ外はないと、すつかり茶屋をんなになり澄ましたお梅は、祇園神社への日參を思ひ立つて、店の手隙のわづかの間を、步みを早めて神詣りに通ふのだつた。

ある午すぎ、これから店が立て込んで來ようといふちよいと前、

「お花さん、祇園さんへ行つて來ますから——留守の間に私番がまはつて來たら、いつものやうにして置いて下さいね。」

「ほんたうに年にも似合ず、神いぢりの好きな人ねえ、行つておいでな。」

と、言つてくれたのは、これも江戸から流れて來てゐる、酸いも甘いも飮み込んだ中年增、よこばしりに、裏口を駈け出すお梅を見送つて、ひとり言だ。

「あの子はあれでもう戀をしてゐるのかねえ——でもなけりや、あの信心は出來や